魔法少女リリカルなのはＳｔＳ StoryAfter

明日の行方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　ＳｔｏｒｙＡｆｔｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ３４５０Ｔ

【作者名】
明日の行方

【あらすじ】
Ｊ・Ｓ事件から一年が過ぎたある冬の日、フェイトはクロノから一つの事実を告げられる……時を同じく彼女の復讐が始まり、それが全次元世界の命運を賭けた物語の始まりになる物語……八月八日タイトルを変更、旧題のタイトル～復讐の蒼雷～を第一章として続けて書きます……八月十一日全サブタイトル変更

序章　彼女の記憶（前書き）

サブタイと文章の一部を書き直しました

序章　彼女の記憶

これは誰の記憶だろう？

雲ひとつ無い青空の下、草花が広がる原っぱに二人の親子、母親の隣にはピクニックバスケット、母親は器用に花を編んで花の冠を作り花冠を目の前にいる五歳くらいの娘の頭に乗せる

？？？

「ほら、かわいいわ。アリシア」

アリシア？……ああ、そうだこれは彼女の記憶、私の中にあるアリシアが幸せの記憶……今はもう決してありえない幸せの記憶の一片、アリシアは満面の笑みを母親プレシアに浮かべるこの記憶はアリシアの記憶であって私の記憶じゃない、私とは縁も縁（ゆかり）もない他人の記憶、でもこの記憶は今、確かに私の中にある。

ほしくはなかった、他人の記憶なんて……プレシアは私にアリシアの記憶を押し付けたもう一度、娘の笑顔を見る為に他人である私を犠牲にして、もう一度やり直す為に……

私の記憶にいるアリシア、あなたは母親の行為を許せる？私は許せない、プレシアのした事は私の人生を大きく狂わせられたから許せない……でも、彼女は手の届かない所へ逝ってしまった……残されたのは、私から生まれた記憶転写・プロジェクトFの残滓だけ……

この怒りをどこにぶつければいいのかなって、問いのその答えはもう出ている……アリシア、あなたは私を止める事が出来る？私の

復讐の物語を……

序章　彼女の記憶（後書き）

続きます

感想・誤字脱字があれば遠慮なくどうぞ

第一話　冬　～夢の繋がり～

ミッド・チルダ　首都クラナガン

その日の天気は実に二十年ぶりの積雪のある雪だったその為か、スリップ事故が多発して交通機関が麻痺する程の積雪、予報では最大積雪１・５ｍになるとかその雪の為、高速道路は渋滞になり彼女達はかれこれ一時間弱渋滞の中にいる四人乗りの黒のスポーツカータイプの中に、時空管理局・執務官フェイト・Ｔ・ハラウオン執務官補佐・シャリオ・フィニーノと同じく補佐官・ティアナ・ランスターの三人が暖房を効かせて、進まない渋滞が進むのを待っていた

ティアナ
「進みませんね～」

シャリオ
「そうだね、もう一時間……この渋滞十五キロ近くあるみたいだけど」

ティアナ
「十五キロ…どうします？フェイトさん、このままだと会議に遅刻しますけど…」

フェイト
「そうだね……遅刻するのはマズイから、いざっと言う時は車

を置いて走るしかないかな……？」

ティアナ・シャリオ

「「……」」

フェイトの言葉に二人は沈黙したこの降り続ける雪の中を走るのかと、二人の沈黙にフェイトは首を少し傾げながら

フェイト

「ダメ……かな……？」

ティアナ

「私はなのはさんの訓練で走ったりして、ダメじゃないですけど……」

シャリオ

「どうしてもと言う時は仕方ないと思いますけど……ほら、私達ヒールですし、雪の上なんて走ったら転んで怪我をするかもしれないですし」

シャリオの言葉を聞きながらフェイトは、少し進んだ渋滞に車を進ませながら悩みそして……

フェイト

「じゃあ……今から歩こう、歩けば会議には十分間に合うし、ちょうど先に駐車場がある」

ティアナ・シャリオ
「「え！？今からですか！」」

フェイト
「うん、シャーリーの言うとおり雪の上を走るのは危ないからね」

そしてそれから五分後、フェイト達は車を駐車場に置いて、雪道を四時間以上かけて目的地の本局地上本部へたどり着いた

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ミッド・チルダ　首都クラナガン市外　森林

そこはまだ新雪が積もり、誰も足を踏み入れていない純白の地、その地に今一人の足跡がつけられたその人物は、全身を白地に胸に薄い黄色の花の刺繍がされたローブを被った女性、顔は見えないがローブの隙間から赤毛が覗かせていた

？？？

「ここがクラナガン……最後に来たのは何時だろう？」

一人であるはずの彼女のつぶやきに、誰かが答えた

？？？

《あの日から約十七年ぶりでは？》

？？？

「十七年か……本当に久しぶり、生まれた街に帰って来たのに実感が湧かない……まるで初めて来た街の感覚」

？？？

《主、本当に始めるのですね？》

？？？

「勿論よ、アレイヤ……その為にここへ戻ってきたのだから、それに長期はしないよ？あいつらも待たせるのも悪いし」

アレイヤ

《期限は？》

？？？

「……十日。それで決着がつけばいいけど、つかなければ諦めて消える」

アレイヤ

《了解です》

？？？

「さぁ、今から十日全力で行くわよ、アレイヤ」

アレイヤ

《Ｙｅｓ、主、アルカスター・ヘンドリック》

そして彼女はさらに一歩新雪を踏み付けて、首都クラナガン目指して突き進む……全てはこの胸に宿る怒りを彼女にぶつける為に

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

空を覆う雲から真っ白な雪が深々と降り注ぐ、地上にある全ての色と言う色を白く染め上げ、世界を自分の色で占拠する為に……首都クラナガンは夜を迎え、雪は積雪１・５ｍを超えてそれこそ豪雪地帯並になり、首都圏の交通機関はほぼ停止状態になり高速道路も極一部を除いて、閉鎖状態になり多くの人々が車の中で寒い一夜を過ごす事になった

そして、駐車場に車を置いて管理局地上本部に四時間以上かけてたどり着いたフェイト達は、無事に会議を終えるも歩いて駐車場に戻るのは不可能なので、地上本部内にある二段ベットが二つ備え付

けられた仮眠室を借りる事にした

シャリオ
「良かったですね。仮眠室がちょうど空いていて」

フェイト
「うん、この雪も明日の明け方には止むらしいから車は明日取りに行こう」

ティアナ
「やっぱり、歩くんですよね？」

フェイト
「そうだね…でも、今日よりは……マシなんじゃないかな？」

マシと言いながらもフェイトは、四時間かけて地上本部に着くまでの苦労がまたあるかもしれないと思い苦笑い気味の笑顔を浮かべその表情にティアナとシャリオの二人は不安に駆られた……また、あの道を歩くのかと

シャリオ
「はぁ～フェイトさん、思い切って魔法で……」

フェイト
「ダメだよ。魔法による飛行は非常時のみだって、法律で決められているでしょ？」

シャリオ
「わ、分かってますよ、冗談ですよ、冗談……ははは」

笑いながら冗談だと言っているが、内心飛んで車に戻りたいシャリオの心情をフェイトは分からないがティアナは理解していた

ティアナ
「（気持ちは分からなくはないけど……）あの～二人共もう寝ませんか？」

フェイト
「そうだね……少し早い気もするけど…うん、寝ようか」

シャリオ
「はい…（どうか、雪が全部解けていますように）」

そして三人は雪道を歩いた疲れと会議の心労の為、毛布をかけてすぐに眠りに就いた……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フェイトは雲が流れる青空の下、草原に一人いた、そしてフェイトから少し離れた所に草原を駆け抜ける一人の女の子と猫が追いかけっこをしていた……逃げるのは五歳くらいの金髪の女の子猫は尻尾を揺らしながら女の子を追いかける

フェイト

「（あ、リニス……そうだ、この記憶は母さんが優しかった頃の、まだ使い魔じゃないリニスが居た時の記憶、あの後リニスが勢い良く飛び掛ったんだっけ……それでよろめいて思いっきり顔を地面にぶつけて思いっきり泣いて母さんを困らせたんだ……でも、これは私の記憶じゃない……憶えていた楽しいけど痛かった記憶でも本当はアリシアの記憶……でも、今ままで一度も夢で見たことのない記憶……どうして、今見ているんだろ？あれ？）」

フェイトはここからアリシアがリニスに飛び掛かられて転んで、泣くはずだったがそこに違う部分が出てきた……リニスが飛び掛った瞬間に本来なら、そこにいるはずのない人間形態の使い魔のリニスが飛び掛る猫のリニスを受け止め、それを見たアリシアは特に驚かず猫のリニスを受け止めた人間のリニスに笑顔を向けて

アリシア

「ありがとう、リニス」

リニス

「気をつけてください。フェイト、あなたはまだまだ新米の魔

導師なのですから不用意に魔法を使ってはいけません」

フェイト
「え？リニスが二人……？フェイト？？」

訳が分からなかった……途中までは確かにアリシアの記憶だった、そこにまだリニスに魔法を稽古してもらっていた自分の記憶が重なってきた……今までこんな事一度だって無かった、フェイトは急に大きな暗い不安と恐怖に駆られ、これは何かの凶報の予兆ではないかと

フェイト
「どうして……」

？？？
「へぇ～、これは一種の精神リンクなのかな？」

フェイト
「！？」

フェイトが振り向いた瞬間、目の前に手のひらが視界に入り頭を鷲掴みしてフェイトの視界を塞いだ……不思議な事に抵抗する気が起きなかった

フェイト
「な！？」

???
「そんなに驚かないでよ、フェイト」
フェイト
「（私の声…）誰？」
???
「……プレシア・テスタロッサの罪その唯一の被害者と言えばいいかな？」
フェイト
「！？……プレシア母さんの？」
???
「今は分からなくていいよ。今度会う時は夢じゃなく、現実で会おう」

フェイトの塞がれた視界は突如開けて、目に光が差し込んだ……
そして視界に映ったのは鼻から血を流して大泣きしているアリシアと泣くアリシアを懸命に泣き止まそうとしているプレシアだった

フェイト
「今のは？母さんの罪……」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

クラナガン市街

カプセルホテルの一室、世代遅れのテレビとシングルベットだけの簡易な部屋、その一室でアルカスターは目を覚ます、先ほどまでそれはもうぐっすりと寝ていた彼女に反応してベットに備えて付けられた小物入れの上に置いていた黒のカード、常備警戒状態を維持している彼女のデバイス『アレイヤ』は突然目を覚ましたアルカスターに呼びかけた

アレイヤ
《どうしました？特に異常はありませんが》

アルカスター
「あはは……ねぇ、アレイヤ信じられる？今、夢の中でフェイトと精神が繋がった」

アレイヤ
《……精神がですか？……夢じゃないですか？》

アルカスター
「夢だけに？あはははは面白いよ。でも本当、フェイトと精神が繋がった」

アレイヤ
《……以前、情報を探っていた際、こんな情報がありました。双子は良く同じ行動や互いを呼ばずとも呼ばれた気がする。どちらが怪我をすれば、もう一人も同じ箇所に怪我の痕が出る『シンクロニシティ』と言う物があるそうです。もしかすると主と彼女が夢の中で繋がったのはそれの類かもしれません》

アルカスター
「シンクロニシティ、偶然の一致か、そうかもね……（私が寝てる時に情報を探っていたの？それとも暇な時にネットサーフィンで偶然？）」

アレイヤ
《機械の私としては理論も根拠もあやふやなオカルトはあまり信じたくないですけどね》

アルカスター
「でしょうね……まぁいいや、もう一回寝るわ。続けて警戒よろしくね」

アレイヤ
《了解、ゆっくりお休みください》

アルカスターは「おやすみ」と言いながら、布団の中に潜り込みとすぐに寝息を小さく立てて再び深い眠りの中に沈んで行った

第二話　最初の犠牲　～スバル～（前書き）

予定通り投稿できました
戦闘始まるまでの部分が長いです
次回は水曜日を予定してます
追記、サブタイトルを少し変えました
　文章少し変えました

第二話　最初の犠牲　～スバル～

そこは白い世界……くすんだ汚れも、黄ばんだ色も彩り鮮やかな色も何も無い唯白く『純白』と言う言葉が、最も似合うそんな白で埋め尽くされた空間にアルカスターはいた

彼女が気付いた時には、当てもなく歩き続けていた……「ここはどこ？」「どうして？」そんな疑問は浮かばない、何故ならこの状況は今に始まった事ではない……彼女が今の彼女になった時から時々起きる夢、理由も分かってる彼女が原因だから……それから感覚で五分くらい歩いて、白い世界に重厚な存在感を感じながらも虚空のような存在感の無さと相反する気配を持った銀の扉が現れたアルカスターは立ち止まり、ため息を吐き銀の扉に触りながら、つぶやく

アルカスター
「世の中唐突に……なんてのは当たり前、一寸先は闇、一秒先も分からない、私は一秒先を思い続ける自分の頭に浮かぶ限りの可能性を…」

彼女の言葉に反応して、銀の扉は鈍い錆びたような音を発しながら扉は開く…そしてその先には『始まりの彼女』が笑みを浮かべながら

？？？
「待ってたよ。どうして来てくれないの？」

アルカスター
「忙しいから、それに……」
???
「それに？」
アルカスター
「あんたのせいで今の私がいるんだから、好き好んでここに来ない……あんたに会いたくない」
???
「……ごめんなさい、で、でも会いたくないだけで私の事嫌いじゃないよね？だって皆にも出会えて……」
アルカスター
「あんたがいなければ、私の人生に関係ない出会いよ。それと、会いたくない＝嫌いって意味よ」

その言葉に???は酷くショックを受けた表情を見せて下を向きその瞳に涙を滲ませると、アルカスターは踵を返して扉の外へ出ると銀の扉は再び音をたてながら、閉まり始める……アルカスターは振り向き扉を見つめながら、つぶやいた

アルカスター
「大人しく見てなさいアリシア……あんたの妹がもがき苦しみそして散る様を」

銀の扉は完全に閉じ、下の部分から急激に風化し砂になり風に流れるように散って消えた……そして夢は覚めた

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

復讐　二日目　早朝　天気　曇り

ミッドチルダ　南部

『湾岸特別救助隊』その名は『管理局最大の激務がある部署』と呼ばれる場所、多くの管理局員が恐怖し配属されたら最後、骨は砕け肉が焼かれても出動させられ最後は大地の肥やしになるとまで噂で囁かれる、時空管理局が誇る『局員殺しの部署』の一つ……因みに他には『無限書庫』や『戦技教導隊』などがある

その部隊の雪で埋もれた隊舎周辺をもう何周したか分からない程走っているジャージ姿の青い髪の少女がいた……彼女の名前はスバル・ナカジマ，一年前フェイト達と同じ部隊『機動六課』に所属していたティアナの相棒……その彼女も今は自分の夢に向かい進んでいる勿論スバルも夢へ向かって頑張っている……ただティアナと違いスバルの夢は肉体的に極限までに辛く険しい

スバル
「ハァ……ハァ…マッハ…キャリバー……後、どれ…位？」

息を切らしながらも、胸元に吊るされた大きめのペンダントに話しかける彼女のもう一人の相棒でありデバイスの『マッハキャリバー』は、数秒の間を置いて

マッハキャリバー
《後，十キロです》

スバル
「十キロ……長い」

マッハキャリバー
《今のペースで行けば一時間くらいで終わります。諦めず頑張って下さい相棒》

スバル
「うん……がん…ばる……うおおおおおおお！！」

スバルは全力でスパートを駆け始めた……その時、マッハキャリバーは思った《叫んだら余計に体力の消耗が大きくなる》と思いながらも、相棒の更なる成長を願い黙って見続ける事にしたが案の定、スバルは目標の距離まで五mの所で力尽きた……その後、スバルは隊舎横に備え付けられる水飲み場で、水を吸うスポンジのように勢い良く水を飲んでいた……その後は頭を水に濡らしながら念話で、

マッハキャリバーと会話していた

スバル
「〈くそ〜後もう少しだったのに〜〉」

マッハキャリバー
《〈スパートを賭けるのが早過ぎたんです〉》

スバル
「〈……そうだね…そこは直すべき箇所だった。もうしないよ〉」

マッハキャリバー
《〈はい、またやりそうになったら止めます……それよりもこの寒空で水を浴びてると風邪を引きますよ？〉》

スバル
「〈大丈夫だって頑丈なの……へっくっしゅん！」

くしゃみをしたスバルは、水から頭を上げて急ぎタオルで頭を拭いて隊舎に戻ろうとした時、彼女の目の前に白い生地に胸に薄い黄色の花の刺繍がされたローブを着た女性がいた

スバル
「あの……何かようですか？」

？？？

「スバル・ナカジマって君？」

スバル
「へ？あ、はい、そうですけど…（今の声何処かで…）」

？？？
「悪いけどさ、あいつを本気にさせる為に私にぶっつぶされて」

スバル
「え？……！！」

その瞬間、スバルの腹に彼女は蹴りを打ち込みながら自己紹介した

？？？
「私はアルカスター・ヘンドリック…先制攻撃もらうわよ！」

スバル
「ぐっ……」

スバルは後ろに吹き飛びながらも、倒れる事なく持ち堪えてアルカスターを睨みつけて

スバル
「マッハキャリバー！！」

マッハキャリバー

《セット・アップ》

その瞬間、スバルの服装はジャージ姿から黒のインナーに白のジャケット、短パンに前開きのスカートのバリアジャケットに変わるその右手には拳装着型のリボルバーナックルとインラインスケート型のマッハキャリバーを装着した姿にアルカスターはそれを見て、率直な感想をこぼした

アルカスター
「へそ出して、寒くないの？まぁ、バリアジャケットだしいいか……アレイヤ行くよ」

アルカスターは袖の中から待機状態のアレイヤを手品のトランプのようにスライドさせて出し、何も言わず姿を変え、その姿にスバルは驚いた……フェイトと同じ漆黒の戦斧、柄と刃の接合部のコアの色は蒼……しかし、フェイトのように片刃型ではなく両刃型、そして何よりスバルを驚かせたのは刃の大きさ、身の丈に匹敵するほどの長い柄に大口径のリボルバー式カートリッジシステム、バルディシュの刃渡りなどゆうに超える刃渡り六十ｃｍ以上の巨大な刃

スバル
「（大きい…あんなの受けたら一溜まりもない）」

スバルの警戒を余所にアルカスターはアレイヤを軽々と軽快に棒術のように振り回すと、刃を足元の雪の上に乗せる

アルカスター
「さて、やりますか……あ、それと先に言っとくけど助けは来ないから、隊舎内にいる局員は全員気絶してるし周辺に防音を重視した結界が張ってあるから」

ザッと雪を踏みつける音がスバルの耳に届いたと、同時にスバルは条件反射のように自然と、右手を上、左手を下に交差させたと同時に黒い影が交差させた腕に迫り、有無を言わさずスバルを吹き飛ばし、雪の上に何回も転がるが転がりながらも、スバルは体勢を立て直し

スバル
「ウィングロード！」

瞬間にスバルの足元から、帯状魔法陣で構成された蒼い光の道が後ろへ形成され、光の道は天へと伸びそれに乗りスバルは、アルカスターを見つめると、彼女は少し関心したように見つめていた

アルカスター
「ふ～ん、今のは反応出来るんだ。何か無意識って感じだったけど…」

スバル
「どうしていきなり……」

アルカスター
「言ったでしょ？あいつと本気で命を賭けて戦う為にあんたをぶっつぶすと……それとも他のメンバーなら良かった？」

スバル
「そんな事言って…」

アルカスター
「じゃあ、いいわね？今度はもっと速く鋭く行くからあんたも本気で来なさいよ？」

スバル
「！？」

風切り音がスバルの耳に届いた時、同時にスバルは体を動かしたが、胸の部分のバリアジャケットが切り裂かれる

スバル
「な！」

アルカスター
「だから、本気で来なさいと言ったわよ？」

スバル
「くっ！」

スバルはバリアジャケットを再構築して、構えると同時にアルカスターのいる前方にウィングロードを伸ばし、マッハキャリバーは高速で後輪を回しながら急発進の体勢に入り、アルカスターはローブのフード部分を捲りスバルはその素顔に驚くその顔はかつての上司の一人であるフェイト・T・ハラウオンと瓜二つ

スバル
「え、フェイト…さん？」

アルカスター
「あいつと一緒にしないでくれる。目と髪の色逆だし、髪の長さもロングとセミロング」

スバル
「あなたは一体……」

アルカスター
「知る必要ないわ……あんたはただここで私に潰されなさい」

スバル
「嫌です」

アルカスター
「……あっさりやられた方が良かったって後悔するかもしれない」

スバル
「後悔はしません。全力で戦ってそれでも、負けたら悔しいはあっても後悔なんてしません」

アルカスター
「……後悔はしないか」

アルカスターはスバルの言葉に、何か思う所があったのかスバルを見つめる瞳には呆れた感情が入っていた

アルカスター
「そんな台詞はあんたみたいな新人には十年早い……やっぱりあんたを狙って正解だった。あんたに本当の敗北を教えてあげる」

アルカスターの足元に蒼色のミッド式を展開し、同時に魔法陣から蒼い電気がバチバチと音を立てながら放出されるそれを見たスバルも淡い青色の近代ベルカ式を展開し、同時にリボルバーナックルからカートリッジが排出され、マッハキャリバーの後輪の回転は上がり甲高い音を出して、いつでも最高速度の急加速が出来る状態だった

そしてスバルは後輪をウィングロードに着けた瞬間、爆発的な加速を見せて最高速度でアルカスターに迫り、リボルバーナックルの重い一撃を与えようと右手を振ったがその拳は空を切り、アルカスターはスバルの頭上に跳び上がっていた

アルカスター
「雪の上だとローラーのスピードが出せないから、その魔法を使っているんでしょうけど、軌道が丸見えよ」

スバル
「そんなの分かってる！リボルバーシュート！！」

スバルはリボルバーナックルの手首部分にある、歯車ナックルスピナーの回転による衝撃波を雪にぶつけて白い煙を作り出しスバルとウィングロードの光の道を隠すそしてすでにスバルは移動して、アルカスターの真下には居なかった

アルカスター
「（なるほど、これなら簡単には軌道は読めないけど……）アレイヤ」

アレイヤ
《フレット・ネット》

アルカスターはミッド式魔法陣を再び足元に展開したと同時に、蒼い電気が網目状に周囲に広がりそして背後から驚く声が聞こえ、そこには白煙の隙間から電気の網に捕まりアルカスターを睨むスバルがいた

スバル
「バインド……！」

アルカスター
「従来のとは少し違うタイプよ。これは術者というよりデバイ

スを…金属を捕らえる捕縛魔法よ」

スバル
「デバイス？」

アルカスター
「簡単に言えば磁石よ。だから左手は捕まってないでしょ？」

アルカスターの言う通り、スバルの左手は電気の網は捕らえていない、逆に両足と右手は絡めつくように電気の網が纏わりついていた

スバル
「くっ！」

スバルは網を破ろうと、捕らえていない左手で電気の網を破ろうとしたが、そこはさせまいと『ライトニング・バインド』でスバルを完全に封殺した

アルカスター
「させないよ。それとデバイスに助けを求めても無駄だよ。この魔法はデバイスの機能を一時停止させる効果があるから」

スバル
「！！、マッハキャリバー！！」

マッハキャリバー

《……》

スバル
「そんな……」

アルカスター
「これでもう戦うすべを失ったわね…」

アルカスターはアレイヤを天高く上げるとコア部分が強い蒼い光を放ち、灰色だった雲の色は黒へ変わり雲の中に稲光が光りそして

アレイヤ
《サンダー・フォール》

空から一条の蒼い雷が落ち、一人の少女とデバイスを飲み込みそして空へと続く光の道は音をたてて砕け散った……

第三話　母の罪　～凶報～

曇り空から放たれた一条の蒼い雷は大地を焦がし、その中心スバルは倒れていた右手に装着しているデバイスは手首部分の歯車は砕け、本来は光沢のある黒だったがその黒は土に塗れ光沢を失い、溶けた金属独特の匂いを放っていた

少女の両足に着けていたインラインスケートは車輪を失い全体に無数のヒビが入り、両足のインラインスケートの足首部分に付けていた青いクリスタルもヒビが入り、淡く点滅しその二つを付けるスバルは全身を雷に焼かれて、肉の焦げる匂いが全身から漂って来るが、微弱な呼吸音が聞こえ彼女がまだ生きている事を証明していた

そしてスバルの目の前には彼女に雷を放った本人アルカスターとそのデバイスアレイヤが、スバルを見下すように見ていたがその瞳に強い敵意は感じない……

アルカスター
「……生きているわね」

アレイヤ
《はい、微弱ですが》

アルカスター
「……さすが戦闘機人頑丈ね」

アレイヤ

《どうしますか？追撃を》

アルカスター
「必要ないわ。あくまで目的はフェイトを怒らせて、本気の殺し合いをする為の準備の一つ。ここまでやれば十分よ」

アレイヤ
《エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエの二人を狙いますか？》

アルカスター
「確かにその二人を狙えば確実に本気で来るでしょうけどね……それは私のプライドが許さない」

アレイヤ
《子供は狙わない》

アルカスター
「分かっているなら、そんな事聞かない……帰るわよ」

アルカスターはスバルから視線を外し真上の空を見つめると、雲の切れ間から太陽の光が見えた……

アルカスター
「今日は晴れるかな……」

そして彼女は空をめがけて飛びたった……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

???

「フェ……ん……起き……」

……呼ばれている……でも、誰だっけ？この声は最近聞いたばかりなのに思い出せない……や

???

「起き……て……く……さい」

本当に誰だろう？眼を開ければいいのに体が拒絶している……お願い、体が言う事聞くまで待って、そう後五分……

???・????

「「起きてください！！フェイトさん！！」」

フェイト
「……ふぇ……？ティアナ……シャーリー？」

フェイトは一緒に寝ていたティアナとシャリオの二人に体を無理やり起こされたがフェイトはまだ寝ぼけていた

フェイト
「あれ？……母さんは？どこ……」

ティアナ・シャリオ
「「……はぁ～～」」

ティアナ
「寝ぼけてないでちゃんと起きてください」

シャリオ
「そうですよ。車取りに行くんですよ。ほら、窓を見てください、昨日の雪が嘘のように晴れてます」

シャリオが指差す窓には、どこまでも澄み切った青い空がどこまでも、どこまでも広がっていたこの日に空を飛べばとても爽やかで気分がいいだろう……彼女にとても相応しい空

フェイト
「綺麗だね……なのはにとても似合う空だ」

ティアナ
「そうですね……なのはさんに似合う空だと思います」

二人が一人の女性を思っていると、シャリオがある事に気付いた……

シャリオ
「あ……メールがフェイトさん、クロノ提督からです」

フェイト
「え？」

シャリオ
「え～とですね……『フェイトへ、非常に重要な案件の為、直接会って話しがしたい。聖王教会で待つ』だそうです」

フェイト
「……クロノ、もう少し文章を書いてくれてもいいのに」

ティアナ
「どうします？」

フェイト
「うん、行くよ」

そう言うとフェイトは簡単に髪を整えると，壁にかけていたスーツを着ると足早に、部屋を出て行こうとするティアナとシャリオも慌てて身なりを整えてフェイトを追った……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ミッドチルダ　北部・ベルカ自治領

フェイト達は山と森に囲まれた大きな教会の中にいた『聖王教会』『聖王教』とも言われる時空管理局と双璧をなす、次元世界最大規模の宗教組織、管理局と同じく古代遺産（ロストロギア）の調査と保守を使命とし『聖王』と呼ばれる存在を崇めている

その教会内のとある一室、広い窓と歴史的価値がありそうな書籍が並び、窓側には白い網目模様の彫刻がされた大きめの丸いテーブルそれに合わせて、背もたれにも同じ白い網目模様の彫刻がされたイスが五角形に配置されその内の二つのイスに二人の男女が座っていた『時空管理局本局・次元航行部隊・ＸＶ級艦船『クラウディア』艦長』クロノ・ハラオウンと教会騎士団・騎士カリム・グラシア

クロノ
「待ってたよフェイト。思ったより速く来れたな、雪道でもっと遅れると思った」

フェイト
「急いで車を取りに行って飛ばして来たんだよ。非常に重要な案件って書いてあったから」

カリム
「気を付けてくださいね。雪の降った後は事故が多いですから、どうぞフェイトさんそれにお二人も」

カリムの視線の先の入り口のドアには、ティアナとシャリオの二人が立っていたのでカリムは二人もイスに座るように促して、二人は同時に返事をして、フェイト達はイスに座った

フェイト
「クロノ……ところで重要な案件って？」

クロノ
「……」

フェイト
「クロノ？」

フェイトの呼びかけにクロノは、少し悩んでいる表情を顔に見せながら意を決して、フェイトに話した

クロノ
「先週、次元航行部隊がある小規模な犯罪組織を壊滅させた」

フェイト
「？」

クロノ
「その際にその組織の研究所からある人物の研究過程の一部が見つかった。それは遺伝子研究…特に記憶転写に関する記述が多くあった」

フェイト
「記憶の転写……クロノまさか……それって」

クロノ
「……ああ、ある人物と言うのはプレシア・テスタロッサだ」

フェイト
「！！」

クロノ
「そして……その研究所から今まで謎だった『プロジェクトF』の完成に至るまでの過程が明らかになった」

フェイトの心に強い悲しみが襲った自分の生みの母、プレシアが犯罪組織に所属していた事に……どうして母は犯罪組織に入ったのかと

フェイト
「クロノ、どうしてプレシア母さんは……」

クロノ
「その組織は規模こそ小さいが、資金面でかなり充実していたらしい恐らく当時のプレシアはそこに眼を付けて組織に入り、研究を進めた……その後は知っての通り彼女は『時の庭園』を手に入れ……あとは言う必要はないな」

その後プレシアは時の箱庭内で、亡き娘アリシアのクローンであるフェイトを生み出すも、外見と記憶しか持っていなかったフェイトは失敗作として不当な扱いを受けながらもプレシアの為に彼女の願いである『ジュエルシード』を探し自身の使い魔アルフと共に第97管理外世界『地球』へやって来た

そこで一番大切な友人となる、高町なのはと出会い彼女とぶつかりあいながらも最後は友達として分かり合った……その間にプレシアはジュエルシードを使い、目的の為の次元震を起したが最後は起こした次元震と共に『虚数空間』へ落ちて行った……

フェイト
「クロノ、私を呼んだ理由はこれを教える為のならもう……」

クロノ
「いや、まだある。君には一人の女性を探してほしい、それが君を呼んだ理由だ同時に聖王教会の依頼でもある」

フェイト
「え？」

クロノ

「名前はアルカスター・ヘンドリック、プロジェクトFの完成過程までの実験での唯一の被験者でありそして、君と同じくアリシアの記憶を持った女性だ」

フェイト
「アルカスター・ヘンドリック……唯一の被験者……」

クロノ
「彼女は記憶転写実験で唯一の人体実験の犠牲者だ。実験は彼女一人で成功しプレシアは更に彼女に対して、遺伝子操作を行い肉体的に彼女をアリシアに近づけようとしただから、外見、遺伝子レベルで君と一緒だ」

フェイト
「ど、どうして、母さんはそんな事……」

クロノ
「推測だが、彼女はその時点で娘を取り戻そうとしたんだと思う。記憶を転写出来たのならそのまま肉体を弄ればと……しかし、結果は失敗に終わった……外見は変える事は出来たが髪と眼の色が違った」

フェイト
「髪と眼の色が違った?」

クロノ
「ああ」

クロノは空中にモニターを表示すると、五・六歳くらいのフェイト

が映っていたが髪と眼の色が逆だった……赤毛に金目だった

フェイト
「彼女がアルカスター・ヘンドリック、私と同じ……顔」

クロノ
「フェイト……辛いと思うが彼女の捜索を」

フェイト
「受けるよ…クロノ、母さんが残した罪なら娘の私が引き受ける……でも、どうして教会が」

カリム
「それは今からお話します」

沈黙を守っていたカリムは、その口を開き聖王教会が彼女を探す理由を話し始めた

カリム
「何故、聖王教会が彼女を探しているその理由を……理由は二つあります。一つは彼女が聖王の血筋だからです」

フェイト
「聖王の血筋……」

カリム
「はい、ヘンドリック家は初代・聖王陛下の弟からなる家系で、

彼女の両親の世代まで教会所属の騎士でした。しかし、今から十八年前に彼女は誘拐されその誘拐はヘンドリック家に不信を抱いていた教会内部の者の犯行とされてましたが、その証拠も上がらず犯人からの要求も無く今に至ります」

フェイト
「あの彼女の家族は……」

カリム
「……彼女の両親は彼女が生まれて間もない時に事故で亡くなり、その後は母方の父親に育てられました」

クロノ
「その母方の父親は長年管理局に多大な資金を援助している人物で、発言力も一佐クラスなら平気で左遷出来るほどの発言力を持った人物だ」

クロノの言葉にフェイト達は、彼女を探す裏に彼女の祖父が関与している事が目に見えていた……恐らく先週の犯罪組織壊滅の際に見つかったプレシアの資料がアルカスターの生存を確信させ、教会に探させようとする理由の一つだろう

ティアナ
「でも、どうして管理局では無く聖王教会なんですか？普通に考えれば力を揮える管理局じゃあ…」

今まで静かに聞いていたティアナが口を開きプレシアの事などは、

補佐官になった時に大まかだがフェイトから聞いていた為静かに聞いていたが彼女もこの部分は疑問に思った普通に考えれば高い発言力のある管理局に頼むのが普通である

カリム
「理由は恐らく、彼を敵視している管理局上層部を警戒してでしょう。弱みを見せたくないなどの理由だと思います。それに彼女がプレシアの実験体にされた原因も本をただせば、彼女を誘拐された教会の落ち度ですから多少強引でも、教会側は拒否出来ないと考えたんだと思います」

ティアナ
「そんなに管理局上層部は彼を敵視しているんですか？資金提供者なら歓迎されるはずじゃあ……」

クロノ
「普通はそうだが、彼の場合は資金提供の時期が管理局の黎明時の最中で、当時の上層部と当時の管理局の今後について部外者ながらも、かなり強引に介入して来て当時の上層部とかなりのいざこざがあったらしい……それが七十年以上たった今も現在の上層部に引き継がれているんだ」

ティアナ
「七十年以上……その人、かなりの高齢ですよね？」

カリム
「今年で九十八歳だそうよ。多分、老い先を見越して孫娘のアルカスターに一目会いたいのも理由の一つなのでしょう。彼の話はこれ位で……もう一つ理由をお話ししま」

その時、ピピピと呼び出し音が聞こえると同時にテーブルの真上にモニターが表示され、その画面には小豆色の短い髪をした女性が慌てた顔でいきなりカリムに話かけてきた

???

「『大変です！！騎士カリム！！』」

カリム

「どうしたのシャッハ？そんなに慌てて……」

モニターに映る彼女の名前はシャッハ・ヌエラ、カリムの秘書であり聖王教会所属のシスターであり陸戦ＡＡＡを持つ騎士、本来ならこの場にいるはずだが、彼女はカリムの使いで地上本部へ出向いていた

シャッハ

「『湾岸特別救助隊舎が何者かに襲撃されました！それでナカジマ二等陸士が重症を』」

ティアナ

「スバルが！？」

カリム

「シャッハ、詳しく教えて」

シャッハ

「『私も細かくは分かりませんが、今日の早朝に何者かが救助隊舎の警備システムをダウンさせ、その隙に隊舎内にいた局員を気絶させ、外にいたナカジマ陸士が恐らくその何者と交戦し結果……重症を』」

ティアナ
「そんな……スバル……」

あの頑丈だけが取り柄のスバルが重症……ティアナの動揺は誰の眼から見ても酷く傷ついていたその表情を見た

クロノ
「フェイト、病院へ行くんだ」

フェイト
「……うん、ティアナ、シャーリー行くよ」

ティアナ
「……はい」

シャリオ
「はい」

フェイト
「騎士カリム、失礼します。クロノまた後で」

そしてフェイト達は足早に部屋を出て、車の置いてある駐車場へ走

った……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フェイト達がスバルのいる南部の病院へ車を走らせている時に湾岸特別救助隊を襲撃しスバルに重症を負わせたアルカスターは襲撃後にカプセルホテルをチェックインして、今度は最初よりは豪華なホテルにいた今度はさらにシャワーと冷暖房システム付きの一人部屋……そして彼女はイスに座りながら誰かと通信をしていた顔は出ない音声のみと表示された画面に向かって

???

「『で、どうだ？復讐はうまく言っているのか？』」

アルカスター

「まだ、二日目よ。まぁ、管理局の隊舎を襲撃したけど……」

???

「『手の早い事で……派手にやり過ぎるなって言っても派手にやるんだろ？』」

アルカスター
「当然♪」

？？？
「『必要以上の被害出すなよ。特に人的は避けろ』」

アルカスター
「そこは気をつけるわよ。人的被害は後二、三人ぐらいで済ますつもり」

？？？
「『そうか……それと連絡な』」

アルカスター
「？」

？？？
「『そっちにイオリが行くから宜しく、喧嘩するなよ』」

イオリと言う単語にアルカスターは明らかな動揺と共に、大声を出した

アルカスター
「はぁ！？何でよ！？あのバカがこっちに！！」

？？？
「『あいつがお前がやり過ぎないようにする為の防波堤役だろ？』」

アルカスター
「……信用無いわね……私」

？？？
「『念の為だろ？じゃあ、連絡と通信終わり』」

アルカスターの通信相手は唐突に通信を切る、アルカスターはイスから立ち上がりそのままベットへ倒れこみ

アルカスター
「イオリのバカが来る……あ～あ！嫌だ！！」

と叫んだその後、彼女はベットの上を動き回りそして誤ってベットから勢い良く落ちた

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ミッドチルダ　南部　病院

フェイト達はスバルのいる南部の病院に着き、早々にスバルのいる病室へ向かうとそこにいたのは全身を白い包帯で巻かれて、ベットに横たわり呼吸器を付けて寝ているスバルと姉、ギンガと父親であり管理局の地上部隊の部隊長ゲンヤ・ナカジマの二人がいた。二人は訪れたフェイト達に驚くがその反応よりも速く、ティアナがスバルに寄り

ティアナ
「スバル……ギンガさん！スバルは……」

ギンガ
「ティアナ、落ち着いてスバルは大丈夫よ」

ティアナ
「でも……こんなに包帯を巻いて……」

ギンガ
「見た目はこんなだけど、命に別状は無いわ。火傷が全身にあるけど痕が残るほどじゃないって先生が言ってたし……」

ゲンヤ
「まぁ、全治二ヶ月、再来週には退院が出来る予定の怪我だ」

ティアナ
「大丈夫何ですか…？」

ギンガ・ゲンヤ
「ええ」「おう」

それを聞いたティアナは空気が抜けた風船のように力無く床に座った

ティアナ
「良かった～心配させんじゃないわよ、バカスバル」

シャリオ
「良かったね。ティアナ」

「はい」と安堵の笑みを浮かべて、シャリオに返事しフェイトはゲンヤの方を向いて

フェイト
「ナカジマ三佐、私達ここへ来る前にシスターシャッハに簡単には聞いたんですが……」

ゲンヤ
「……鑑識曰く見事なもんだったらしいぜ？警備システムを完全に停止させて、その間に隊舎内の局員を全員一撃必倒、その後外にいたスバルを襲撃したらしい……」

フェイト
「どうして、スバルが最後だと？システムが停止しているのですから、監視カメラも止まっているはずでは？」

ゲンヤ

「システムの停止は一時的だったみたいで、最初に停止させた外の監視カメラがスバルがやられる様を映してた」

ティアナ
「じゃあ、犯人が映っているんですよね……（許さない、必ず捕まえてやる）」

ゲンヤ
「……」

ゲンヤはフェイトの顔を見て決めたように、話を続けた

ゲンヤ
「映ってた……だが、ちょっとな……」

ティアナ・フェイト
「「？」」

ゲンヤ
「まぁ、見せた方が早いな……ギンガ」

ギンガ
「はい」

返事をしたギンガはモニターを出すと、映像が流れたその映像にはスバルが襲撃者に戦いを挑み、敗北する映像まで映っていたそして、フェイト達は襲撃者の顔に驚いたそこに映っていたのは、他な

らないフェイトと同じ顔の赤毛に金目の女性だった

フェイト

「アルカスター・ヘンドリック……」

第四話　殺す理由　～イオリ～

ゲンヤ
「……知り合いか？お嬢」

フェイト
「アルカスター・ヘンドリック……プロジェクトFの唯一の被験者で、私と同じアリシアの記憶と同じ遺伝子情報を持ってます。姉と言っても過言じゃない人です」

フェイトの言葉にギンガとゲンヤの二人は驚きと、同時にフェイトのまるで苦虫を噛み潰したようなとても苦く、苦しい表情をしていた

ゲンヤ
「そうか……まぁ、何だ。この件は他の連中に任せて、お前さん達は別の事件を」

フェイト
「……それは出来ません。三佐、私は聖王教会の依頼で彼女をアルカスター・ヘンドリックを探す事になっているんです。だから、私はこの件に参加しないといけません」

ゲンヤ
「いや、だけどな、お嬢……」

フェイトは先ほどの苦虫を噛み潰した顔が嘘のように、覚悟を決め

た顔を見せそれをみたゲンヤは頭を掻きながら

ゲンヤ
「（……たく、気を使っているのに）いいのか？」

フェイト
「はい、彼女は母が犯した唯一の罪の証なんです……私がいるのも彼女の犠牲があってプロジェクトFが完成して、それで私やエリオがいるんです。だから……」

ゲンヤ
「分かったよ。俺がこの件の担当する訳じゃねぇから、強く言えないがこの件の担当にお前さんを進言しとくよ」

フェイト
「ありがとうございます」

フェイトはゲンヤの言葉に強く感謝して頭を下げて、それに続いてティアナとシャリオが頭を下げる

ゲンヤ
「さっさと現場見て来いよ」

フェイト
「はい」

そしてフェイトはゲンヤ達に背を向けて、現場へ行こうとドアへ歩き出そうとした時、彼女の声が聞こえた……

スバル
「ダメ……フェイトさん」

ベットで寝ていたスバルが眼を覚まし、彼女の声に全員が一斉に彼女の方を向く

ティアナ・ギンガ・フェイト
「「スバル！！」」

スバル
「行っちゃあダメです……あの人の狙いは」

ゲンヤ
「無理すんな、後でいい今は休め」

スバル
「……ダメお父さん、フェイトさんが狙いだから……」

ゲンヤ
「どゆうことだ？」

スバルは少しずつだが呼吸が荒くなるだが、それでもスバルは必死に話続ける

スバル
「あの人は……フェイトさんと殺しあう……為に」
フェイト
「私を殺す為……どうして？」
スバル
「分かり……ません……」
ゲンヤ
「もういい、スバル休め。後は俺達でどうにかする」
スバル
「うん……」

返事を最後にスバルは静かに寝息をたてて再び眠った……寝静まったスバルを横にスバルの言葉に全員が疑問に思う

ギンガ
「どうして……フェイトさんを殺し合う為にスバルを」
ゲンヤ
「何にしても狙いがお嬢と分かったのは上出来だ（スバルの奴、無理しやがって）」
シャリオ

「何が目的何でしょう？」

ゲンヤ
「さあな……しかし」

フェイト
「……」

シャリオ
「フェイトさん大丈夫ですか？」

シャリオはスバルの言葉を聞いた後のフェイトの表情が、血を引いたように白い顔をしていた

フェイト
「え……？うん、大丈夫だよ」

ゲンヤ
「大丈夫そうにはみえねぇよ。とりあえず現場行くのは明日にしろ」

ギンガ
「そうですね。それがいいと思います」

ティアナ・シャリオ
「「そうですね」」

全員に今日は休めと言われて、フェイトは渋々休む事を決めて大人しくシャリオが用意したいるホテルに向かったフェイトが、勝手に現場に行かないようにティアナとシャリオの二人が後ろに控えて……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フェイト
「ここは……時の庭園の中……」

フェイトがいたのは、かつて次元の海を漂う前の時の庭園のフェイトの寝室、外から暖かい光が差し込み部屋を照らしていたが部屋には誰もいない

フェイト
「懐かしいな、リニス、アルフは外で私と模擬戦しているのか？」

アルカスター
「ここがあんたの部屋なんだ広くて綺麗ね……」

フェイト
「！？」

後ろを振り向くと、そこには彼女がベットに座っていた

フェイト
「アルカスター・ヘンドリック……」

アルカスター
「ええ、その通り、昨日も夢の中で会ったんだけど……憶えていないか」

フェイト
「……どうして私と殺し合いをしたいんですか？」

アルカスター
「いきなりの直球だね……まぁ、色々あるけど、あんたが失敗作だからかな（あの子、意識あったんだ。さすが戦闘機人）」

フェイト
「え……？」

アルカスター
「私という犠牲を払いながら、生まれたのはアリシアの姿だけの失敗作に納得できる？実験体にされた身としては、そんな事許さない……だから私はあんたの存在を認めないだから殺す、殺し合いは情けだよ。本当はいつでもあんたを一方的に殺せるほどの実力が

あるんだから」

アルカスターは足をブラブラさせながら、フェイトと殺し合いをする理由を話すその言葉に嘘はない……フェイトは冷静に質問を続ける

フェイト
「なら、スバルを襲った理由は？」

アルカスター
「あんたは本気を出しそうにないから、本気にさせる為に傷つけた。悪いけどまだ続けるよ」

フェイト
「！！、そんな事の為にスバルを！」

アルカスター
「あんたがアリシアになれなかったから周りが傷つくんだよ、これはあんたの責任あんたがちゃんとアリシアとして生まれていれば、あの子は傷つかなかった何度も言うよあんたがアリシアになれなかったから……」

フェイト
「もういい！！私だってずっと思ってた！アリシアとしてちゃんと生まれていれば母さんはずっと優しくて暖かくて、ここで！！時の庭園で！幸せに暮らせたんじゃないかって！でも……私はアリシアとして生まれなかった……だから母さんは自分の体と心を壊しても、アリシアを取り戻そうとして……」

アルカスター
「在りもしない都を求めて、娘を蘇られなかった無念を抱いたまま虚数空間に落ちた……」

フェイト
「……」

フェイトの言葉の続きをアルカスターは淡々と続けそして視線をフェイトから天井に向けて

アルカスター
「話しはこれ位でいいや……フェイト後七日だよ」

フェイト
「え、七日？」

アルカスター
「そう、七日……七日後に私はミッドチルダを離れる。捕まえるとしたら七日間だよ。そして私はその間にあんたを殺しに来る。明日かもしれないし、三日後かもしれないけどね」

フェイト
「どうしてそんな事を……」

アルカスター
「……気まぐれよ」

その言葉を最後にアルカスターは、ベットから消えたまるでそこに
初めからいないように……残されたフェイトはベットを見つめていた

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

復讐　三日　早朝　天気　晴れ

ミッドチルダ　首都クラナガン近郊

その日は昨日に続き嘘のように燦々と太陽が、クラナガンを照らしていた雪はこの二日でほどんど溶けて無くなり草木には溶けた雪の滴が太陽に照らされ輝いていた

そして、溶けた雪を踏み付けながら進む人物がいた髪の手入れがキチンとされていないボサボサの黒髪に黒瞳、グレーの上着に白の縁取りがされた黒のロングコートに黒のズボンを穿いた男が確実に一歩一歩とクラナガン市内を目指して歩いていた。この男こそ、アルカスターの嫌がっていた男、イオリだ彼女の幼馴染が送り込んだ仲間の一人彼の腰には二本の剣が差し込まれていた一本は黒い柄の剣、もう一本は鍔の無い剣

イオリ
「帰って来たと言うべきとここは言うのか？」
？？？
《知りませんよ》
？？？
《同意》

二本の剣はアームドデバイスであり、知らないと言った黒い柄の剣を『クリサ』同意した鍔の無い剣を『リオル』

イオリ
「さて、アルの奴はどこにいるんだ？」
クリサ
《何処かのホテルでしょう》
リオル
《探すのみ》
イオリ
「いや、念話で聞けば……あいつ交信拒否かよ」
クリサ
《嫌われてる》

リオル
《同意》
イオリ
「うるせぇよ……仕方ない地道に探すか」

そしてイオリは髪を掻きながらクラナガンにいるアルカスターを探す為に歩き出した……その後、彼は街に入るのに帯刀はマズイので二本を待機状態の黒い十字架のペンダントと銀色のロケットになった

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

アルカスター
「あー！！イオリのバカが来たー！速過ぎるでしょ！？」

アルカスター滞在のホテル、イオリからの念話を拒否したアルカスターは、壁に叫んだが隣のいる部屋から苦情は無い

アレイヤ
《既に近くの世界にいたのでは？彼の連絡はいつも遅いのは最早通例です》

アルカスター
「そうだけど……もう、本当に嫌」

本当に彼の事が嫌いなのかアルカスターは、足で床を小刻みに踏み付ける

アレイヤ
《主、一体彼の何が嫌なのですか？彼は同じ戦場を駆ける同志の一人ですよ？》

アルカスター
「……あいつの騎士道に不清潔な所よ」

アレイヤ
《彼は元・聖王教会所属の騎士の一人なのですから、騎士道があっても問題無いのでは？不清潔な部分は納得です》

アレイヤの言葉にアルカスターは、ベットの上に置いているアレイヤを見つめるがその瞳は何処か冷たい感じがしていた

アルカスター

「アレイヤ、私達の戦う『戦場』は命の取り合いが当たり前の場所。そこにあいつは『優しさ』『慈悲』『情け』を敵に掛けて見逃す。私はそれが許せない……命の取り合いの場所に情けは無用、命の取り合いには敵の命を刈り取って初めて敵が対等であったと宣言する事であり、情けを掛けて見逃すなんてのは相手に対する侮辱で「こいつは自分より格下だから見逃してやる」と言っているのよ」

アレイヤ
《しかし、見逃すは敵が命乞いしたからでは？》

アルカスター
「でも、その前はこちらの命を取りに来てるでしょ？その時点で敵とこちらは対等になったのだからその後で、命乞いしようとこちらは対等に見たまま……だから殺すの慈悲も情けも優しさもいらない、この相手は対等だからそんな物はいらないこちらは奪うのみこそが、敵に対する最大の礼儀と敬意と私は思うの……だから今まで私は命を賭けて相対した敵が命乞いしても、全て殺しているでしょ？」

アレイヤ
《そうでした……今の今までそれに気付かないのは私がまだ主に相応しくないという事ですね》

アルカスター
「そんなに深く考えなくていいわよ。私の相棒はあんただけ何だから……」

アレイヤ
《……感謝します。主》

アルカスター
「いいのよ……さて、じゃあご飯食べに行きますか」
アルカスターはアレイヤを手に取りドアへ歩きながらポケットに入れて、部屋を出た……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

アルカスターが部屋を出てから、数時間後の別のホテルにフェイト達はいたが部屋の空気は重い……目覚めた時の爽快感は微塵も無くただ、どんよりとした空気が部屋を支配していた
理由は一つ、それはフェイトが昨日の夢の内容をティアナ達に話し最初は信じてなかったが、フェイトの真剣な顔と言葉に二人は夢の内容を信じ始めていた

ティアナ
「フェイトさん、嘘じゃないですよね？」

フェイト
「嘘じゃないよ……彼女は私の存在が許せないから殺そうと来

るんだ」

シャリオ
「そんな理由でスバルを……」

ティアナ
「フェイトさん、どうしますか？話通りなら、彼女はまだフェイトさんの知り合いを襲うと思います」

フェイト
「勿論止めるよ。クラナガンにいるのは分かっているんだ。ホテルを手渡りしだいに当たれば必ず網に掛かると思うそれで……網に掛かったら私が相手をする」

ティアナ・シャリオ
「「え！？フェイトさんが！！」」

ティアナ
「ダメです！反対です！相手はフェイトさんを殺すのを目的なんですよ！？それを自分から飛び込むなんて無謀を通り越して自殺行為です！」

シャリオ
「そうです！ティアナの言う通りです！ここは他の局員に任せて……」

二人の言葉にフェイトは二人の顔を見ながらはっきりと答えた

フェイト
「他の誰かが傷つくのはいいの二人とも？彼女は私が苦しむのも目的の一つなんだ……それが分かっているのに唯見てるだけなんて、私は耐えられない……だから私が相手をするんだ。誰かが傷つくのが見たくなくて、誰かが悲しむのを見たくなくて……」

ティアナ
「フェイトさん……」

シャリオ
「……分かりました。フェイトさんがそのつもりなら、私は止めませんだから可能な限りのサポートをさせて下さい。フェイトさんやティアナのように戦えない私にはそれ以外出来ませんから……」

フェイト
「うん、ありがとう。シャーリー」

ティアナ
「シャーリーさんがそう言うなら、私も全力でサポートします。空の戦いは出来ないですけど……」

フェイト
「ティアナ……ありがとう」

シャリオ
「なら、早速ホテルに手配をしましょう！膳は急げです！」

フェイト
「その前に担当の捜査官と連絡して捜査に参加させてもらわないと……いくら、執務官でも勝手に捜査に参加出来ないし」

シャリオ
「あ……そうでした」
シャリオは頬を少し赤めて、恥ずかしい……と心の中で思いそれを見たフェイトとティアナは笑顔を浮かべた……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ミッドチルダ　南部　病院
そこにアルカスターによって重症を負わせられたスバルが入院している場所……そのスバルの病室にいるゲンヤは頭を抱え、ギンガは苦笑いをしていた

ゲンヤ
「なぁ、ギンガ、確かスバルは重症だったよな？」

ギンガ

「うん……そうよ」

ゲンヤ
「俺の目の前にいるのは幻想か、夢か？」

ギンガ
「……多分どちらも違って現実だと思うけど」

スバル
「ねぇ？ギン姉、お父さんは何を悩んでいるのかな？」

ゲンヤ・ギンガ
「「……」」

ゲンヤの視界には昨日、苦しそうに呼吸していたスバルが今、平然とパンを食べているのだ……

ゲンヤ
「お前昨日あんなに苦しんでいなかったか……？」

スバル
「うん、昨日は本当に苦しかったんだけど、朝になったら大分楽になって……それで考えてみると昨日の朝から何も食べて無くて今、ギン姉にパンを買って来て貰って……あ、でも体はまだ痛いよ？」

ゲンヤ
「はぁ～～（いくら、戦闘機人とはいえ回復早すぎだろ。どん

だけ頑丈なんだ）」

スバル
「お父さん？」

ゲンヤ
「まぁ、回復が早くて良かった……ところでお前の相棒だが、ちょっとダメージが酷くてしばらく修理が必要だそうだ」

スバル
「！！、どれくらい……」

スバルは大口を開けて食べようとしていたパンを寸前で止めた

ゲンヤ
「二週間ぐらいだそうだ。ボディ自体は三日くらいで治るそうだが、システムの部分がかなり酷いらしい」

スバル
「そう……（マッハキャリバー）」

ゲンヤ
「ほら」

落ち込んでいるスバルにゲンヤは、大きめのペンダントをベットの上に投げるそれはいつもスバルが身に着けている相棒の待機状態と同じ物だった

ゲンヤ
「マッハキャリバーのＡＩの部分は無傷だからマリーの奴が、気を利かせてＡＩの部分だけペンダントに移してくれたみたいだぜ？だから……」

スバル
「え？」

マッハキャリバー
《火傷は大丈夫ですか？相棒？》

相棒の声にスバルは満面の笑みを浮かべる……その瞳には涙が滲んでいた

第五話　次の犠牲　～ヴァイス～

昼　地上本部ヘリポート

地上部隊が所有する軽輸送ヘリコプターが格納させている場所に一人の男性が座りながら空を眺めていた『元・機動六課』陸曹長ヴァイス・グランセニック
一昨日の雪でヘリが出せずにひたすらの整備をして一日を過ごし、昨日はヘリポート周辺の雪かきを一日中して腰を痛める局員が続出し、自分も肩と腰を痛めたそして
今日はその雪かきの二日目で休憩中……

ヴァイス
「こんな晴天に雪かきかよ……腰痛ぇ～」

???
《大丈夫ですか？》

ヴァイスの首に架けられたドックタグの様な形状をした相棒『ストームレイダー』が、彼の腰を心配していた

ヴァイス
「ん？ああ……しかし、ヘリ飛ばしてな～」

ストームレイダー

《そうですね。整備は完了しますから》

ヴァイス
「あ～めんどくせぇな～雪かき」

ストームレイダー
《他の局員の方も頑張っていますから頑張りましょう》

ヴァイス
「へいへい……っと」

ヴァイスは嫌々立ち上がり、雪かきを再開しようと前を向くと少し離れた所にあまり見慣れない長い金髪が整備士と会話しているのが目に入る

ヴァイス
「（ん？誰だ？）」

目を細めると段々と、金髪の主の顔が見えて来た黒い服に金髪……ヴァイスは思い出した

ヴァイス
「フェイトの姉さん？どうしてこんな所に……」

ストームレイダー
《ヘリの要請ではないでしょうか？雪で車が使えないとか》

ヴァイス
「……かもな、姉さん一人って珍しいなシャーリーやティアナを連れないで」

ストームレイダー
《そうですね》

しばらく見ているとフェイトがこちらを向き、ヴァイスの方へ左手を振りながら近づいて来たのでヴァイスも手を振るそして……

フェイト
「久しぶりだよね。陸曹」

ヴァイス
「そーすね。フェイトの姉さん（姉さんの背が伸びてるような……？）で要請すか？」

フェイト
「……うん、車が雪でね」

ヴァイス
「気をつけて下さいよ（ヒールだからか？）」

フェイト
「そうだね。うん」

フェイトの笑顔にヴァイスは僅かに胸に不安が過ぎるのを感じた

ヴァイス
「（何だ今の？）姉さん背伸びました？」

フェイト
「え……？」

ヴァイス
「いや～、何かシグナムの姉さんより背が高く見えて」

フェイト
「そうかな、最近計ってないから分からないや……」

ヴァイス
「そうすっか……ティアナ達は元気にやってます？」

フェイト
「二人共元気にしてるよ。今は別行動中だけど……ねぇ陸曹？」

ヴァイス
「はい？何すか」

フェイト
「ヘリ見せてくれるかな？使うヘリが向こうにあると聞いたから」

ヴァイス
「了解……（何だよ。この不安は）」

そしてヴァイスはフェイトに背中を見せて、フェイトをヘリが格納させている格納庫へ連れて行き、フェイトはその後ろに続くその途中格納庫の中には整備を終えて何時でも飛び立てる状態のヘリが何機も待機している

ヴァイス
「ところで姉さん？何て機番のヘリですか？」

フェイト
「……」

ヴァイス
「姉さん？」

ヴァイスは返事のないフェイトが気になり振り向くと、彼の視界に蒼い光が入り同時に腹部に強い痛みを感じ腰を曲げた

ヴァイス
「ぐっ！！」

フェイト
「耐えない方が身の為だよ？陸曹」

ヴァイス
「ぐっ……（痛ぇ）姉さん……！」

フェイトの突然の攻撃に腹部を押さえるヴァイスはフェイトを見ると、彼女の左腕に蒼色の電気を帯びヴァイスはそれを見て今目の前にいるフェイトが自分の知るフェイトではないと気づいた

ヴァイス
「（姉さんの魔力の色は金色…でもこいつは蒼）誰だ……てめぇ」

フェイト
「答える気はないよ。陸曹」

ヴァイス
「陸曹長だ……間違えんな（やべぇ、痺れて）」

フェイト
「そう、まあいいや」

微塵も興味が無いような返事をするとフェイト（偽）は、左手に握り拳台の電気を帯びた蒼いスフィアを七つ生成すると

フェイト
「抵抗しないでね」

ヴァイス
「……」

フェイト
「お休み」

フェイトは左手首から上だけを振ると、七つの蒼いスフィアはヴァイス目掛けて降り注ぎ蒼い電気を炸裂させた……がフェイト（偽）の目の前にヴァイスはいない

フェイト
「……抵抗するんだ」

ヴァイス
「当たり前だ」

フェイト（偽）は視線を右に移すと、そこには狙撃銃のように長銃身で高倍率スコープを装備され銃身下にクリスタルが付いたライフルの銃口を片膝を着いてフェイト（偽）に向けるヴァイスがいた彼の服装には特別な変化がないが、体全体を薄っすらと浅葱色の魔力を帯びていた

ヴァイス
「動くなよ」

フェイト
「……ふ～ん、それがあんたのデバイスなんだ」

ヴァイス
「両手を上げて、地面に跪け……〈ストームレイダー応援呼べるか？〉」

ストームレイダー
《〈無理です。周囲に妨害魔法が展開されてます〉》

ヴァイス
「〈だろうな。さっきの電撃から誰も来ないし、警報も鳴らないあいつが細工しやがったな〉」

フェイト
「ねぇ？話し終わった？」

フェイト（偽）は暇そうにヴァイスに話しかける特にヴァイスの指示に従い手を上げる訳でも、跪くもしないでそこに立っていた

ヴァイス
「跪けよ。本気で撃つぜ？」

フェイト
「……身の程知らず」

ヴァイス
「は？……！？」

フェイト（偽）はそこから消えたと同時に、ヴァイスの体に風を

感じてヴァイスは慌てて体を前に飛び出し前周りのように転がったと同時に先ほどいた場所に、巨大な刃が振り下ろされ地面に刺さったヴァイスはすぐに片膝を付いた状態で、銃口を巨大な刃の方へ向けるとそこに黒い柄を掴んだフェイトがいたが先ほどと違い金髪は赤毛になりロングの髪も肩ぐらいのセミロングになっていた

ヴァイス
「それがてめぇの素顔かよ……（姉さんと同じ顔何者だ）」

アルカスター
「……そうよ……ところでスバルって子が重症なの聞いてる？」

ヴァイス
「！！……そうか、てめぇが」

アルカスター
「あんたで、二人目覚悟してね。アレイヤ、モード『ゼンゼ』」

アレイヤ
《ＯＫ、ゼンゼモード》

斧の状態のアレイヤの刃の部分が動き、本体と直角になりその刃の両側面から一枚ずつ蒼い魔力刃が展開され連装刃のようになり後方にフェイトのバルディッシュの『ハーケンフォーム』と同じ姿勢制御を行うフィンブレードが六枚展開され、魔力刃の大きさはフェイトの魔力刃よりも二周り以上大きくそして長い蒼い死神の大鎌がヴァイスの眼前に現れた

ヴァイス
「でけぇ……（あんなの受けたら死ぬだろうな）！！」

次の瞬間、ヴァイスは全力で後ろを向きながら『ラウンドシールド』を展開、ストームレイダーの銃身を両手で持ち、盾にすると同時に障壁にアレイヤの蒼い魔力刃が接触し、火花を散らす

アルカスター
「流石、狙撃手（スナイパー）いい目持ってる」

ヴァイス
「へっ、そりゃあどうも……（やべぇ）」

アルカスター
「でも、それは脆いね」

ヴァイス
「！？」

ヴァイスの展開した浅葱色のラウンドシールドとアルカスターの蒼い魔力刃の接触部から、氷が砕けるような音をたてながらヒビが入り始めた

ヴァイス
「ぐ！」

アルカスター
「抵抗しなければ良かったのにね……」

ヴァイス
「うるせぇ……ストームレイダー！！」

ストームレイダー
《サンシャイン》

銃身下に付いたクリスタルから浅葱色の閃光が生まれ格納庫を照らし、突然の光にアルカスターは目を慌てて隠してたと同時にヴァイスがアルカスターの動きを見逃さず、素早く後ろに跳びながらストームレイダーの銃口をアレイヤを持つ手に狙いをつけてそして……

ストームレイダー
《スナイプショット》

アルカスター
「！！」

ストームレイダーの銃口から精密射撃魔法のスナイプショットが撃たれたが、魔力弾はアルカスターに当たる前にアレイヤが、ラウンドシールドを展開し、魔力弾を砕く

ヴァイス

「な！？」

アレイヤ

《甘いです。主に容易に弾丸が届くと思いますか？」

アルカスター

「ハーケン・フライヤー」

アルカスターは大鎌状態のアレイヤを格納庫天井に向けて数回振ると、蒼い魔力刃が真っ直ぐに天井目掛けて飛び、天井を切り裂きそして切り裂かれた天井は、ヴァイスとアルカスターへ落ちて来た

ヴァイス

「げ！！やべぇ！！」

アルカスター

「……」

ヴァイスは大慌てで走り出したが、アルカスターは慌てる様子もなく落ちてくる天井を見つめていたそして……天井は無慈悲に地面に落ち、粉塵と轟音をたたてながら、砕け散った……粉塵と轟音が支配するヘリ格納庫内部、ヴァイスは全力で逃げたおかげか天井の下敷きにならずに済んだが、数機のヘリが天井の下敷きになりプロペラは拉げ、機体は大きく凹んでいた

ヴァイス

「もったいねぇ～な、せっかく整備したばかりなのに」

ストームレイダー
《そうですね。全壊してる機体もありますね》

ヴァイス
「あいつ……逃げなかったな」

ストームレイダー
《強者の余裕では？》

ヴァイス
「かもな……（姉さんと同じ顔のあいつ本当に何者だ？）」

格納庫の隅に全力で逃げたヴァイスの考えを余所に、粉塵は徐々に晴れはじめ落ちた天井から青空が覗きそしてその真下にはアルカスターが悠然と立っていた

ヴァイス
「おいおい、無傷かよ……」

ストームレイダー
《相棒、彼女の周囲を》

ヴァイス
「ん？……！何だありゃ……」

ヴァイスは驚いたアルカスターの周囲の煙が晴れて、初めて気づいた彼女の周囲の複数のコンクリート片が電気を帯びて宙に浮き、その一つの大きさは直径一ｍ以上重さはゆうに百ｋｇ以上は軽くあるだろう、アルカスターはヴァイスの位置が分かっているのか顔だけをヴァイスのいる隅に視線を向けた

アルカスター
「……驚いた？電気魔法を極めれば、磁力も操作出来るんだよ？陸曹長」

ヴァイス
「（コンクリートの中の鉄を操ってすげぇ）……で、それどうするんだ？」

アルカスター
「勿論……あんたにぶつけるけど？」

アレイヤ
《スチール・テンペスト》

その瞬間、アルカスターの周囲の複数のコンクリート片が動き出し、ヴァイス目掛けて真っ直ぐに飛んで行った

ヴァイス
「げ！？来やがった！！」

ストームレイダー

《全て撃ち落すには出力と魔力が足りません》

ヴァイス
「分かってる！！」

ヴァイスは飛んで来るコンクリート片とにかくを全力でかわす事に集中しながらも、全力で格納庫から出る事を決めて非常口へこれも全力で走ったがしかし彼女が逃がすはずもなく

アルカスター
「逃がさないよ。陸曹長」

ヴァイス
「！？、ちょっと待てよ！！それ無しだろ！？」

ヴァイスの視線の先には、巨大な物体が磁力の力で浮いていた

アルカスター
「ありだよ。そして待ったなし勝負はいつでも非情だからね……おりゃあ！！」

磁力操作で宙へ持ち上げていた全壊状態のヘリをヴァイスの方へ投擲した

ヴァイス
「でたらめ過ぎだろ！！」

ヴァイスの叫び声は飛んできたヘリが、壁に叩きつけられる轟音に掻き消され投げたヘリには、ガソリンが満タンに入っていたので、大爆発を起して黒煙を上げた瞬間に天井のスプリンクラーが作動して大量の雨が、格納庫全体に降り注いだ降り注ぐ雨を見つめながらアルカスターは内心、やり過ぎたと感じていた……ヴァイスが自分の予想よりもずっと素早くしぶとい奴だった為隠し手の磁力操作を見せてしまった

アルカスター
「そろそろ退かないと不味いかな……（流石に武装隊も飛んで来るだろうし）気絶させた整備士達も目が覚めてもいい頃合いだし」

アレイヤ
《同感です。撤退しましょう武装隊も来ます》

アルカスター
「そうね。陸曹長は多分死んでないでしょ（多分、生命力はゴキ並だと思うから）」

アレイヤ
《同意です……センサーに反応、武装隊が来ます。数二十》

アルカスター
「逃げますか…」

そしてアルカスターは低空飛行で離脱した武装隊が来たのはそれから僅か二分後だった……そしてフェイト達はそれからさらに十分後に現場に着いた……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

スプリクラーの雨が止み濡れた瓦礫の上をフェイト達は探索を開始していた………フェイト達は昼前に担当捜査官と話し合い捜査に参加する事が決まり一息入れた矢先に格納庫の爆発の情報が入り、その格納庫にヴァイスがいた事は偶々ティアナが昨日の夜にメールした事で知り急いで捜査官と共に駆けつけた

ティアナ
「ヴァイス陸曹長〜！！いたら返事して下さい！！」

フェイト
「ヴァイス陸曹長〜！！」

しかし、返事は無い……彼女達の声が格納庫に響くだけだった

ティアナ
「ヴァイス陸曹長〜！！死んだらバイク貰いますよ〜！！」

フェイト
「ティ、ティアナ……そんな事言ってもヴァイス陸曹長が……」

フェイトがそんな事を言っても返事があるはずもないと思っていたが……その瞬間瓦礫から浅葱色の光が、飛び出したのだそれを見たフェイトは驚き、ティアナはすぐに光の元へ走り出しそして誰よりも早く、そこにたどり着き近くにあった鉄骨を使い瓦礫を退け始めるとすぐにストームレイダーの銃口を向けたヴァイスがいた

ティアナ
「ヴァイス陸曹長……」

ヴァイス
「誰があのバイクを譲るかよ……ティアナ」

ティアナ
「大丈夫ですか？」

ヴァイス
「まぁ、大きな怪我はねぇよ。けど、魔力使い切って……もう無理」

ヴァイスはストームレイダーを落として精根尽きたように気絶した魔力を使い切ると起こるブラックアウトを彼は起したその後、ヴァイスは検査の為に病院に運ばれて行ったそれにティアナが同行、そして病院に着き検査の結果は両足の骨にヒビが入り肋骨が数本砕け、さらに背中に鉄骨の破片が刺さっている事が分かり、すぐに手術と入院が決まるのは今から数時間後の話し

ティアナがヴァイスに同行したので、フェイトとシャリオの二人で何かアルカスターに繋がる手掛かりがないか探していたフェイトが格納庫の内部、シャリオが計器など使い科学的に探す

フェイト
「（特に変わった物は無い……でも、確実にあの人はＳクラスの魔導師なのは間違いない……）」

フェイトは上を向くとそこには、大きな穴が開いた天井がありそこから青空と雲が見えたフェイトは、再び下を向くと足元のコンクリート片を拾うとコンクリート片の切断面を見ると、鏡のように自分の顔を映していた

フェイト
「（鏡のような切断面……一体どうやればこんな事出来るのかな？）」

シャリオ
「フェイトさん」

フェイト
「シャーリーどうしたの？」

シャリオ
「今、フェイトさんがいる場所から強い磁力の反応があります」

フェイト
「磁力……もしかして磁力魔法を使えるのかな？」

シャリオ
「磁力魔法……？」

フェイト
「うん、電気魔法を極めた人が出来るのが磁力魔法……市街地戦なら最も強力な魔法の一つだよ」

シャリオ
「フェイトさんは出来るんですか？」

シャリオの言葉にフェイトは少し考えて答えた

フェイト
「悔しいけど私は出来ない……あの人は私より格上の電気魔法使用者それに確実に強い」

フェイトは手に握っていたコンクリート片を再び見つめた鏡のような切断面……自分には出来ない斬撃、自分の好敵手のシグナムで

も出来るかどうか分からないほどの高みの技

フェイト
「（それでもあなたを捕まえます。アルカスター・ヘンドリック）」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

イオリ
「派手にやってるな」

クリサ
《管理局の損害は大きいですね》

リオル
《被害は最小》

ヘリポートから五百mほど離れた高層ビルの屋上にイオリはアルカスターが壊した格納庫天井を眺めていた

イオリ
「狙ったのはヴァイス・グランセニックか、確かヘリパイロット兼狙撃手だったか？」

クリサ
《はい。魔導師ランクはＢ＋です》

イオリ
「あいつのレベルなら取るに足らない相手だな（もっと格上の奴狙えよ）」

リオル
《弱者》

イオリ
「残滓の奴を苦しめる為にやっているなら、あの二人狙えよな」

クリサ
《エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエですか？》

イオリ
「ああ、けどあいつは子供は狙わない主義だから襲う事はないけどな……さて、アルの奴を探すか……（念話に答えろよ、あいつ）」

イオリは頭を掻きながら渋々格納庫に背を向けてアルカスター探索を再開した

第五話　次の犠牲　～ヴァイス～（後書き）

はたしてヴァイスはフェイトの事を姉さんと呼ぶのか分からないが
とりあえず姉さんと呼ぶ事に
ヴァイスのバリアジャケットは思いつかなかったので服に魔力を纏う感じに
アルカスターも今回は服に魔力を纏う事にしました

第六話　見舞い　～夜～（前書き）

サブタイトル決まりました

第六話　見舞い　～夜～

夜……冷たい風が街を駆け二つの月の月明かりがクラナガンを照らす中、一人の女性がお見舞い用の花を持って街中を歩いていたその女性は長い紫の髪をポニーテイルにくくり、凛々しいという言葉が似合う美女、その彼女は真っ直ぐに知り合いの入院している病院へ歩いていた

彼女の名前はシグナム、スバル、ヴァイスと同じ元・機動六課のメンバーであり、フェイトの元部下でフェイトの最大の好敵手、その彼女は夕方頃にフェイトからスバルとヴァイスが襲われ大怪我したと聞き、別世界から態々お見舞いに来た

その際に襲撃者の情報をフェイトから聞きその襲撃者が、プロジェクトFの実験の被害者でフェイトと同じアリシアの記憶と姿の人物だと聞いた時は多少は驚いた

シグナム

「（テスタロッサと同じ姿の襲撃者……アルカスター・ヘンドリック、聖王の血族にプロジェクトFの被害者、目的はプロジェクトFの失敗作のテスタロッサの殺害か……）」

シグナムは非常に身勝手な理由で、自分の元部下達が襲われライバルの殺害計画に苛立ちを覚えていた……

シグナム

「（テスタロッサの殺害などさせる訳にはいかない……）」

自然と手に力が篭ったが、慌てて花の茎が折れていないか確認すると茎は折れていない事に安心して少し足早に病院に向かった

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

シグナムが病院に向かっている最中に病院では、フェイト達が入院したヴァイスの病室で戦いとアルカスターの能力について聞き取りをしていた

フェイト
「やっぱり、磁力操作をしたんだね？」

ヴァイス
「そうすね。最後なんて俺に壊れたヘリを投げつけて死ぬと思いましたよ」

ティアナ
「でも、生きてますよ？」

シャリオ

「ティアナ？」

ヴァイス
「何だよ。ティアナ、生きてちゃあ悪いのかよ（そんなにあのバイクほしいのかよ）」

ティアナ
「そんな事言ってませんよ。ただ、もう少し粘って武装隊が来るまで頑張ってほしかったなと思いましたけど」

ヴァイス
「仕方ねぇだろ、俺は狙撃手なんだから近接戦闘なんて門外なんだよ」

無理なもんは無理とヴァイスは体で訴える

フェイト
「あ、そうだ。多分しばらくしたらシグナムがお見舞いに来ると思うから」

ヴァイス
「え！？シグナムの姉さんが！」

フェイト
「？、そんなに驚く事かな」

ヴァイス
「いや……姉さんにこの様を見られたら何を言われるか……「

精進が足りないからだ」とか「私が稽古をつけてやる」とか言われそうで」

シャリオ
「はは、確かにシグナムさんなら言いそうですね♪」

ヴァイス
「ああ、間違いなく言うぜ？賭けてもいいぜ」

ヴァイスは病室に来るシグナムの言葉で、賭けをしようとシャリオに持ちかけた時、タイミング悪く

シグナム
「ほお？思ったより元気そうだな」

ヴァイス
「！！、姉さん！！い、いつから……ここに……（やべぇ、殺される）」

シグナム
「お前が私が来ると知り驚いた時からだ……希望通り鍛えてやろう」

ヴァイス
「いえ！遠慮します！」

ヴァイスは動かない体を使い全力で、シグナムの稽古を拒否する

それを見たシグナムは小さくため息を吐き

シグナム
「冗談だ……怪我人相手に稽古などさせはしない」

ヴァイス
「へ？……あはははは、そうすよね（良かった～）」

シグナムの冗談に内心、心の底から安心の笑みを浮かべるヴァイスだった……

フェイト
「シグナム、スバルの方は？」

シグナム
「いや、まだだ。こちらに戻って来たのはつい一時間ほど前だ……ああ、それとお見舞いの花だ」

シグナムはお見舞いの花をシャリオに渡すと、シャリオは花の刺していない花瓶に貰った花を刺した

シグナム
「テスタロッサ、現状はどうなんだ？」

フェイト

「……まだ捜索中です。クラナガンのホテルのどれかにいるとは思うですけど」

シグナム
「そうか、この件に私も参加する。好敵手のお前を見す見す殺させる訳にいかないからな」

フェイト
「はい、助かります。あの人は確実にSクラスの魔導師ですそれに……」

フェイトはポケットから鏡のように、自分を映し出している切断面のコンクリート片をシグナムに見せると少し驚いたように眉を上げた

シグナム
「なるほど、相当な腕の持ち主だな……」

フェイト
「はい、それに磁力魔法まで使います」

シグナム
「電気魔法を極めた者が出来る磁力魔法か……市街地戦は避けたいな、あの魔法は金属さえあれば街の全ての金属が使い手の武器になる」

フェイト
「もし、戦うなら高高度での空戦や海上戦もしくは森林戦」

シグナム
「無人世界のような文明の無い所だな……だが、それは奴も分かっているだろうな」

フェイト
「はい」

フェイトはコンクリート片を強く握りながらつぶやいた

フェイト
「それでも私は戦います。どれだけ不利であっても……彼女は母さんの罪の証だから」

シグナム
「…………」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

聖王教会庭園内……カリム・グラシアは白い息を吐きながら、静かに月を見上げていた月を見る瞳はいつもの彼女が持つ穏やかで優しさに溢れた瞳ではなく昔を思いながらも、もう決して起きる事の

ない出来事がまた起きればいいと願うような瞳だった……

シャッハ
「騎士カリム……眠れないのですか？」

カリム
「シャッハ……あの日が近づくとどうしてもね……」

カリムは視線を月に向けたまま、シャッハに答える

シャッハ
「『聖王誕生祭』までまだ二ヶ月先ですよ？」

カリム
「そうね。でも、私にとってはもう二ヶ月しかないの……十三年前の聖王誕生祭からね」

シャッハ
「今でも……彼の事を？」

カリム
「……どうかしらね」

シャッハ
「あなたと同じ『聖王三剣（シュヴェーアト・ベーテン）』の二人はもういません。それに彼はあなたを……」

カリム
「シャッハ、もう寝ましょう。グッドナイトティーをお願い」
シャッハ
「……はい」

それを最後にカリムは静かに自分の寝室へ歩き出し、歩く彼女の背中を見つめるシャッハは心の中でつぶやいた

シャッハ
「（もし、生きているのなら、カリムに逢いに来たらどうですか？イオリ）」

第七話　遭遇　～果たし状～

復讐　四日目　正午　晴れ

アルカスター

「この世の中、突然の出来事なんて物はいたる所にあるのよ。ただ、人はその突然に見舞われないとそれに気づく事が出来ないだけ……突然死、事故に遭う、昔の知り合いに会うなんて本当は十分にあり得る事なのに、さも天が仕組んだように何の知らせも予兆もなく起きるから私達は突然なんて言葉で表している……だからさ、今この状況も十分あり得たんだよフェイト？」

フェイト

「……そうかもしれません」

クラナガンの中心部にあるレストラン、そこでフェイトとアルカスターは夢の中ではなく現実で初めて出会った……きっかけは些細な事アルカスター捜索の最中にティアナが唐突に「近くに新しく出来た美味しいパスタのお店がある」と言い、フェイト、シャリオ、シグナムの三人は彼女に連れられてそのお店を訪れた……案の定、来たのが昼休みの真っ只中であり、さらに新しく出来たお店の味を確かめようと大勢の人が来ており店内は火の回るような忙しさだった……その光景を見たシグナムが「別の店にしよう」と言い出す待つのが苦手な彼女には非常に苦痛だった

だが、偶然フェイト達の前に待っていた男性が待つ事に痺れを切らしたのか、何処かへ行ってしまったさらに丁度その時に男女の四

人組が会計を済ませて店内を出るところだった
そして店員が人の流れを考えてか、フェイト達を先に呼んだのだ
それによりフェイト達は考えたよりも早く席に座る事が出来たのだった

ティアナ
「良かったですね。早く座れて」

シャリオ
「そうだね。あ、種類が思ったより多いでも、値段少し高いかも」

フェイト
「シグナムは何にします？私はペペロンチーノにしましたけど」

シグナム
「待て、少し考えさせろ早すぎる」

メニュー表と睨み合っているシグナムを余所にティアナとシャリオは、カルボナーラとヴォンゴレに決まり残るはシグナムのみになり彼女はシンプルなミートソーススパゲッティにしたそれから約２０分ほどして四人のパスタは同時にテーブルへ並べられ、それから四人は今後の捜査の事を考えながらもし街中でアルカスターと接触した場合の事を話しあった

フェイト
「やっぱり、私は彼女の磁力魔法が脅威だと思います」

シグナム
「それは分かってる、問題は奴をどうやって空戦に持ち込ませるかだ」

ティアナ
「そうですよね。彼女もこちらが市街地戦を避けたいのは分かっているでしょうし」

シャリオ
「こんなのはどうですか？ＡＭＦで彼女の動きを鈍らせフェイトさんが彼女と共に空高く……」

シグナム
「却下だ。テスタロッサはＡＭＦは出来ない上に仮にＡＭＦ内で飛ぶのは魔力消費が早いもし、長期戦になったらその分テスタロッサが不利になるそれは私でも同じだ」

シャリオ
「あ～そうですよね……すみません」

フェイト
「謝らなくていいよシャーリー」

ティアナ
「でも、どうします？……あ！思い切って決闘を申し込んで空戦を」

シグナム
「却下だ。復讐の為に他者を平気で傷つける奴だ。そのような

者が決闘をましてや自分の力を殺す場所での戦いなど受けるはずがない」

シグナムの言葉にティアナは少ししょんぼりとした、彼女自身はいい案だと思っていたので否定されると少し悔しくもあった……がこの案はこの直後、良案になったどうしてかと言うと彼女がそれを受けたからだ

???

「失礼な、私は決闘を挑まれたら基本的には断らないようにしてるのよ。勝手に決めつけないでくれる？」

突如聞こえた声のする方を向くとそこには、シグナムと同じミートソーススパゲッティを食べている髪をショートポニーテールに纏めたアルカスターがいた彼女はフェイト達が驚きの表情を見せても平然と食べ続けていた

フェイト

「アルカスター・ヘンドリック、どうしてここに？」

アルカスター

「あんた達と同じ、雑誌でここのパスタ料理が美味しいって書いてあったから食べに来たのよ…（私としてはもう少しミートソースが多くてもいいと思うけど）」

シグナム

「……いつからいた？」

アルカスター
「あんたがメニューと睨み合いしてる辺りからだけど？」

アルカスターは平然とパスタをフォークに巻き、それを口に入れる……その光景にフェイト達は焦っていた彼女達はまさかこんな所で彼女と遭遇するとは夢にも思わなかった同時に店内の人達が全員人質に取られた瞬間でもあった
何故ならここには十分凶器になりえるナイフ・フォーク・スプーンなどが店内のいたる所にあり、彼女が磁力魔法を使えば、その瞬間に店内の金属は全て彼女の支配下に置かれ、彼女の望むままに動き客の喉にナイフなどが突き立てられる可能性があるからだ……フェイト達の考えが分かっているのか、アルカスターは食べ続ける

アルカスター
「食べないの？もったいないよ」

フェイト・ティアナ・シャリオ
「「「……」」」

アルカスター
「はぁ……予想外だった？」

フェイト
「え？」

アルカスター

「この世の中、突然の出来事なんて物はいたる所にあるのよ。ただ、人はその突然に見舞われないとそれに気づく事が出来ないだけ……突然死、事故に遭う、昔の知り合いに会うなんて本当は十分にあり得る事なのに、さも天が仕組んだように何の知らせも予兆もなく起きるから私達は突然なんて言葉で表しているだからさ、今この状況も十分あり得たんだよフェイト？」

フェイト
「……そうかもしれません」

アルカスター
「ああ、それとあんた達は私が店内の人、人質に取ったと考えているかもしれないけどそんな気は無いよ、そんな事しなくても堂々とお店出るから、お金払って」

シグナム
「そうか、それを聞いて安心した」

フェイト
「え、シグナム？」

シグナムはアルカスターの所まで歩いて行くと、テーブルに思いきっり手を叩き付けたその音に驚き周囲は静まり返ったがシグナムはそれを気にせずに、ゆっくりと叩き付けた手をテーブルから退けるとその手の下に一枚の紙があったその紙には、ペンでベルカ文字とベルカ式の魔法陣が書かれていた

アルカスター

「これは？」

シグナム

「古くから伝わるベルカの決闘の申し出を告げる紙だ。これを受け取った相手は決闘を受ける場合は紙を縦に切り裂き半分を送り返し、拒否の場合はそのまま送り返す……どうだ、私との決闘受けるか？」

アルカスター

「へ～戦闘狂とは聞いてたけど、そこまでとは思わなかった」

フェイト

「シ、シグナム！どうして……」

シグナム

「どうする受けるか？」

アルカスター

「……私は決闘を挑まれたら基本的には断らないようにしてるのよだから」

アルカスターは紙を掴むと迷いなく紙を縦に切り裂きその半分をシグナムに叩き付けた

アルカスター

「受けてたつ、守護騎士シグナム」

シグナム

「決闘は明日の正午、場所はミッド北部の臨海第８空港」

アルカスター
「いいわ、ところで負けた場合私は捕まるけど、勝った場合は？」

シグナム
「生憎と考えてない、負けると思っていないからな」

シグナムの言葉にアルカスターは笑みを浮かべて答えた

アルカスター
「そう、上等じゃない……負けたらあんたには消えてもらうわ！『初代・祝福の風（リインフォース）』のように別れの魔法でね！」

フェイト・ティアナ・シャリオ
「「「！！」」」

シグナム
「いいだろう、その条件を飲もう……（リインフォースの事まで知っているのか）」

フェイト
「シグナム！！」

アルカスター
「決まりね。私が負ければ大人しく管理局に捕まるし、復讐も諦める」

シグナム
「私が負ければ、この命を捧げよう……テスタロッサだから今は彼女を見逃せ」

シグナムの真剣な眼と言葉にフェイトは答える事が出来なかった……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

復讐　五日目　天気　曇り

ミッドチルダ　北部　臨海第8空港　エントランスホール

今から五年ほど前に起きた古代遺産(ロストロギア)『レリック』によって起された火災によって放棄された海上人工島に建築されたミッドチルダで初めての次元港と空港の二つの機能を持った首都クラナガンで八番目の空港、それも今はその機能を失い現在は廃棄区画の一部として管理局の魔導師試験の会場として使われている

そしてエントランスホールに一人の騎士がいた……彼女は騎士服

を着て剣を腰に差し目を瞑り昨日の出来事の続きを思い出していた

レストランでアルカスターに決闘を申し出たシグナムに対して、その決闘を取り消そうとしたフェイト達を無理やり店内から追い出しその間にアルカスターは食事を終えて何処かへ消えてしまった……当然その後、フェイト達は決闘に猛反発した

フェイト

「シグナム！どうしてあんな事をしたんですか！？決闘を申し込んで、しかも命を賭けるなんて……はやてが知ったら、どれ程……」

ティアナ

「そうですよ！！」

シグナム

「……私も本来ならあの状況であのような決闘は申し込まない……だがアルカスター以外にもう一人こちらに敵意ある視線を送る奴がいたなら話しは別だ」

フェイト・ティアナ

「「え、もう一人？」」

フェイトとティアナの二人はシグナムの意外な指摘に驚いた

シグナム

「正確な場所は分からないが、店内にもう一人確実に私に敵意

ある視線を送る奴がいた」

ティアナ

「彼女に仲間が……？」

シグナム

「恐らくな、十八年近く世界を彷徨っていた仲間の一人や二人いても不思議ではないだろう」

フェイト

「そうかもしれませんけど、だからと言って……あんな」

シグナム

「テスタロッサ……奴は強い」

フェイト

「それはもう分かってます」

シグナム

「違う、私の言っているのは魔導師としての強さじゃない、覚悟の強さだ」

フェイト

「覚悟の強さ？」

シグナム

「テスタロッサ、お前はその手を血で染めた事があるか？」

フェイト

「ありません……戦いで傷つける事はあっても殺した事はあり

ません」

シグナム

「私はある……だから、分かる奴は手を血で染めているそれも一度や二度じゃない、何度もだもし、お前が戦っても確実に負ける……実力じゃない他者を傷つける覚悟の差でな」

ここでシグナムは昨日の事を思い出すのをやめて、意識を現実に戻した……

シグナム

「シャーリー、聞こえているか」

シャリオ

「『はい』」

シグナムの呼びかけにモニター越しにシャリオが返答した

シグナム

「武装局員は……動かせなかったか」

シャリオ

「『すみません、フェイトさんが頑張ったんですけど……』」

シグナムがフェイト達にもう一人の存在を話している最中に、シャリオはせめてと臨海第８空港周囲を武装局員で囲うと要請を申し

込んだがそれは何故か却下された……フェイトが直接、武装隊に申し出たが「上から手を貸すなと言われている」と断られた……その代わりとばかりに聖王教会の騎士、約数十名が突如参加してきた

シグナム
「やはり、アルカスターの祖父が裏で上層部に働きかけていたのか？」

シャリオ
「『はい、間違いなく、外にいる騎士達も彼の私兵かもしれません』」

シグナム
「（それほどまでに彼女に会いたいのか……）シャーリー通信はこれで終わりだ。決闘が終わるまで通信は断つ」

シャリオ
「『……分かりました。頑張ってください』」

シャリオはそれを最後に通信を切り、シグナムはゆっくりと視線をエントランス二階の通路に向けた

シグナム
「遅かったな、時刻まで十分もないぞ」

アルカスター
「仕方ないでしょ、こっちにも予定があるんだから」

アルカスターは二階から飛び降り、その手にはすでに斧の状態のアレイヤが握られていたアルカスターは悠然とシグナムの前に立った

アルカスター
「まだ、時間あるし質問があれば答えるけど？」

シグナム
「……どうして今、テスタロッサを殺そうとする？その気になればもっと早く出来たはずだ」

アルカスター
「かもしれないわね。今、フェイトを殺そうとするのは私の人生の一つの区切りとしてよ」

シグナム
「区切りの為に命を奪うのか……お前はテスタロッサがアリシアの失敗作だから殺すと言っただがそれは嘘だな……本当の理由はなんだ」

シグナムには確信があった……彼女は嘘をついていると本当の理由を隠していると……シグナムの言葉にアルカスターは一分近く黙り、そして……悲しいそうな顔をしながら

アルカスター
「……本当はフェイトじゃなくてプレシアを殺したいのよ、あ

の女が私にした事に対しての復讐を……でも、プレシアはもういない逝ってしまった。この憎しみをぶつけたい十七年分の怒りと苦しみを苦悩を」

シグナム
「だとしても、それをテスタロッサにぶつけるのは間違いだ」

アルカスター
「分かっているわよ……そんな事をしてもフェイトを殺しても残るのは、きっと空しさだけ」

シグナム
「そこまで分かっているなら、今すぐテスタロッサと話しあうべきだ」

アルカスター
「……なんてね、信じた？」

シグナム
「何？」

アルカスターは悲しい顔から別人のように笑みを浮かべて、私服からバリアジャケットに変わった服装はティアナのバリアジャケットと似ていた軽装ながらも、守るべき箇所はしっかりと守りながらも動きを邪魔しない事に重点をおいた赤と黒を基調とした服装

アルカスター
「あんたに本当の理由なんて話す訳ないじゃない、でもこれは

言える理由は身勝手で私しか特をしないものだってね。これは嘘じゃないわ」

シグナム
「……そうか、どうやら私の勘は少し平和ボケをしていたようだな」

アルカスター
「良い事じゃない、それだけ世界が平和だって事でしょ？」

シグナムは答えずに腰に差した愛剣『レヴァンティン』を抜くと、同時に刃に炎を灯したそれを見たアルカスターはアレイヤの先端を地面に着けて柄を両手で持ち、ミッド式を足元に展開した

アレイヤ
《主、正午まで後二分ですが》

アルカスター
「もう関係ないわよ、あっちはやる気に満ちてるから」

シグナム
「……少し早いが行くぞ、ベルカの騎士『雲の騎士（ヴォルケンリッター）』が将シグナム」

アルカスター
「『星の海（シュテル・メーア）』が副将アルカスター・ヘンドリック」

シグナム・アルカスター

「「参る！！」」

二人は同時に跳びそれぞれ剣を振り下ろし、斧を振り上げた……

◆◆◆

クリサ
《マスター、どうしますか？外の騎士達を倒しますか？》

リオル
《観戦は無駄》

イオリ
「リオル、そうもいかない。俺はあいつに頼まれてここに来たんだ。アルの奴がやり過ぎないように見張る為にな……（他人の勝負なんて興味ないけどな）」

イオリはリオルに答えると、視線をアルカスター達に移したそしてそれから彼はしゃべらなくなった……が彼は突如片腕を伸ばし、まるでリンゴを握る潰すように力強く何もない空間を握ったするとガラスの砕けるような音が生まれた

イオリ
「バインド……思ったよりも出来るんだな。ハラウオン執務官？」

フェイト
「動かないで下さい（バインド生成中にバインドを壊すなんて……この人なんて鋭敏な魔力感知能力）」

特に慌てる様子もなく、イオリは自分の背にバルディッシュを突きつけるフェイトに話かけた

イオリ
「もう一人の補佐官は、反対側か（視線で居場所がバレてるぞ）
」

フェイト
「……あなたは彼女の仲間ですか？それとも外の騎士の」

イオリ
「アルカスターの仲間だよ。ついでに言うと元・教会の騎士だ」

フェイト
「ここで何を？〈シャーリー、教会の騎士の詮索をして〉」

シャリオ
「〈はい、分かりました〉」

フェイトの言葉にイオリはため息を吐きながらも、見るからに面倒だと視線をフェイトに送りながら

イオリ
「あいつがやり過ぎないように見張っているんだよ。察しろ」

フェイト
「……どうゆう事ですか」

イオリ
「自分で考えろ、何でも教える訳無いだろ……それとその斧を退けろ斬るぞ」

イオリの言葉にフェイトは言い知れない不安に駆られ、言う通りにしないと自分の相棒が無残に散る姿が、頭に浮かびフェイトはバルディッシュを下げた

イオリ
「それでいい、お前も観戦したらどうだ？どうせ増援も無いだろ？」

フェイト
「どうしてそう思うのですか？」

イオリ
「……管理局がここの周囲を囲うなら分かる、襲撃されたのは管理局の施設と部隊だからな。なのに今ここを囲っているのは何も被害の無い教会の騎士だ……しかも外の連中は教会でも、裏の仕事を受け持つ暗部だ。それが表の騎士連中の服を着てれば誰だって、裏で大きな権力が働いていると思うのは容易だ」

フェイト
「！、彼らは教会の暗部なんですか……」

イオリ
「表舞台には決して出てこない裏方連中さ……実力も表の騎士とは色んな意味で格が違う」

フェイト
「（教会の暗部が動いてる……それが本当なら状況次第で私達

が消される可能性も）」

フェイトの脳裏に強い疑問が生まれた、いくら孫に会いたいからといって教会の暗部を使うアルカスターの祖父の異常性を疑った

フェイト
「（そういえば、騎士カリムから教会が彼女を探す理由のもう一つ聞いてない……もしかしてそれと関係が？）

イオリ
「どうした？そんなに眉間にしわを寄せて老けて見えるぞ」

フェイト
「な！そんなに」

フェイトがイオリに反論しようとした時、エントランスの方から大きな音が聞こえたそれは何かが高速で何かに衝突したような音だったフェイトは慌ててエントランスを見るとそこには

フェイト
「シグナム……そんな」

イオリ
「決着はついたみたいだな（アルの奴、あれを使ったな後で知らねぇぞ）」

二人の視線の先には壁に叩き付けられたシグナムが見えそして、アルカスターはそれを黙って見つめていた

第七話　遭遇　～果たし状～（後書き）

少しい展開に無理があるような……それでも進むのみ
次からアルカスター対シグナムです
勝敗どうしようかな

第八話　包囲　～撤退～

アルカスター
「勝負は私の勝ちでいいわね。シグナム……（思ったよりも簡単に術中に嵌ってくれた）」

シグナム
「まだ決していない……ぞ（強い、予想以上だ）」

シグナムは壁から抜け出して、レヴァンティンの刃をアルカスターに向けながら左手に鞘を握りしめる、シグナムの呼吸は荒く肩で大きく息をしている

アルカスター
「……悪いけどあんたは勝てない」

シグナム
「決め付けるな、アルカスター最後の最後で足元を掬われるぞ？」

アルカスター
「（諦めの悪い奴……あんたは私の術中の中にいるのにね）なら掬ってみなさいよ」

アルカスターはシグナムの腰を目掛けて、アレイヤを振り上げると同時にシグナムはレヴァンティンと鞘を交差させてアレイヤの刃を受け止める

シグナム
「ぐっ！（重い！）」

アルカスター
「耐えるんじゃないわよ！」

アレイヤ
《ジェネレイト》

その瞬間シグナムの体を高圧の電気が駆け抜けると同時にさらに力を込めて、アレイヤを振り上げシグナムを吹き飛ばし、飛ばされたシグナムは水切りの石のように跳ねながら床にぶつかり続け十ｍほど飛ばされた所で止まった

アルカスター
「立ちなさい。私の足元掬うんでしょ？それともさっきの威勢はハッタリ？」

シグナム
「ぐっ……（体が思うように動かない……今のはスタン系の魔法か？）」

シグナムの体はすでに動けないほどに疲労していた単純な体力差ではなく、アルカスターの戦術によって通常よりも体力の消費が激しかったその戦術は、電気を最大限に使ったもの空気中の酸素をオゾンに電気分解することで、相手の呼吸を乱しながらの高速戦闘によって通常よりも速くシグナムの体にかかる負荷を増大させた……勿論悟らせない為にギリギリの間合いでアルカスターも近接戦を仕掛け続けた

アルカスター
「ハッタリみたいね……今度こそ終わりにする。ルオシス・ゼルゼ・アメイジス。天に潜む気候を支配せし大蛇、怒れる感情のままに大地に怒りの雷を降ろせコーラス・アーテス・ルルシス」

フェイト
「広域殲滅魔法!?止め……!!」

イオリ
「動くなよ、あいつの邪魔をしたら斬るぞ」

二階で観戦していたフェイトはアルカスターの広域殲滅魔法の詠唱を見て飛び出そうとしたが、何時の間にかイオリの手には黒い剣状態のクリサが握られその刃の矛先はフェイトの喉元に向けられていた

フェイト
「（何時の間に……）あの魔法は広域に巨大な一条の雷撃を落とす魔法ですよ!」

イオリ
「知ってるよ、何度も見てる」

フェイト
「なら、範囲の広さも分かっているはずです。あれはゆうに半径二百mを破壊」

イオリ
「破壊する上に防御障壁の類も完全破壊する最上級広域殲滅魔法の一つだろ？」

フェイト
「あなたも範囲内にいるんですよ！防御しても……」

イオリ
「黙って見てろ。安全は保証してやる、それより反対側にいた補佐官の気配が消えてるぞ」

イオリの言葉にフェイトは驚きながらも、ティアナに念話を送るが返事が無い……そしてその時アルカスターの魔法が炸裂した

アルカスター
「ナーガラージャ！」

その瞬間、空港の天井が消滅し巨大過ぎる蒼い雷が落ちた……雷は範囲内にある物全てを壊さんばかりに凄まじいまでの怒号と雷鳴

響かせながら破壊を繰り返す、それが十秒ほど続き雷が止んだ時，本来ならアルカスター以外は全て破壊されるはずだったが、破壊を免れ残ったのは直撃し消滅するはずのシグナムと二階にいたイオリとフェイトだった

シグナムの手には完膚なきまでに大破したレヴァンティンの僅かな柄のみが握られていた……アルカスターは意識の途絶えたシグナムの側に歩み寄り彼女の周囲を見ると僅かに残ったレヴァンティンの刃の残骸を見て彼女が生きている理由を理解した

アルカスター
「（……シュランゲフォルムで刃を伸ばしてそれを避雷針にして、可能な限り雷撃を愛剣に受け止めさせて、自分は全魔力を鞘に込めて防いだってところかな）で、イオリ邪魔すんじゃないわよ。威力落ちたじゃない」

イオリ
「なら、広域魔法なんか使うな。こっちに飛び火するだろ」

アルカスターの視線はシグナムからイオリに移すと、イオリは片手にフェイトを掴みながら浮いていた……そして、黒剣のクリサの刀身は、黒刃から蒼い光を放つ刃に変わっていた
そしてフェイトの顔には唯ひたすらに驚きの表情を浮かべていた……イオリの雷撃の防ぎ方、それとシグナムの眼を覆いたくなるような怪我に……

イオリ

「勝負はここで終わりでいいな。退くぞ」

アルカスター
「まだ、別れの魔法をしていない」

フェイト
「！！」

イオリ
「止めとけよ、そろそろあの症状が出る頃だろ？そんな状態で魔法なんて失敗するだけだ」

アルカスター
「……分かったわよ。（相変わらず勘のいい奴）」

イオリは掴んでいたフェイトを手放すと、アルカスターの側に寄り、山吹色の近代ベルカ式を展開して転移しようとしたが、その時突如展開したベルカ式の魔法陣が霧散した

イオリ
「ん？霧散した？」

アルカスター
「イオリ……」

イオリ
「……なるほど」

二人の視線の先には四十名ほどの騎士が周囲を囲いその手には、赤い刃に古代ベルカ文字が刻まれた大剣が握られていたその光景にフェイトは警戒した彼らは明らかにこちらに殺意を向けていたからだ

フェイト
「（まさか、私達を消しに来た！？どうして……）」

？？？
「大人しく武器を捨ててくれないかな？ハラオウン執務官にヘンドリック嬢それと輝双刃？」

三人が声のする方を向くと、そこには宙に浮いた眼鏡を架けた茶髪の中年の騎士が一人いた……その片手には気を失った彼女を掴んでいたそれを見たフェイトは彼女の名前を呼んだ

フェイト
「ティアナ！！」

？？？
「お静かにハラオウン執務官寝てるだけだよ。ああ、それともう一人の補佐官も預かっているよ」

フェイト
「シャーリー……あなた達は聖王教会の騎士ですよね？こんな事をして恥かしくないのですか！」

イオリ
「無駄だ、さっき言ったろ？こいつらは裏の連中だプライドも羞恥心もない色んな意味で表と格が違うって」

？？？
「言ってくれますね。さすが『流麗刃のカリム』『断罪刃のルクス』と同じ聖王三剣が一人『輝双刃のイオリ』」

イオリ
「良く知ってるな、さすが裏の騎士の間で『裂刃』と呼ばれてるだけの事はあるな、ヴォーガ・テンガル」

イオリの言葉に中年の騎士は僅かに目を大きく開き笑みを浮かべた……

ヴォーガ
「嬉しいですね。聖王教会歴代最強と言われた三人の騎士の一人に名前を知られていたとは」

イオリ
「……目的は何だ。地下倉庫の『封赤剣（ロート・アップ・ザーゲ）』まで持ち出して」

ヴォーガ
「ヘンドリック嬢ですよ。彼女の祖父が彼女に会いたがっているんですよ」

フェイト
「（だからって、ここまでやるなんて明らかに異常だ）」

ヴァーガ
「渡してくれますか？そうでないと二人の補佐官が命を散らす事になるのですが」

イオリ
「本人に聞け、アルどうする？」

イオリはアルカスターに視線を向けるが、アルカスターは眼を瞑りながら答えない……

イオリ
「答えないな、まぁ急に言われても困るよな……（あの症状が出てやがるな）」

ヴォーガ
「仕方ありませんね。無理やりと行きましょう」

ヴァーガが手を振ると、周囲の騎士が赤い刃をフェイト達に向けて歩きだした

フェイト
「くっ！バルディッシュ！サンバー……」

ヴォーガ
「無駄ですよ。封赤剣（ロート・アップ・ザーゲ）に囲まれたら最後、魔法構築は阻害する

剣型の古代ＡＭＦ発生器なんですよ」

フェイト
「！！」

フェイトが驚いている間にも、確実に剣はフェイト達に迫るだがイオリは特に慌てずに蒼い刃のクリサを地面に刺した

イオリ
「解放しろクリサ」

クリサ
《解放、ナーガラージャ》

その瞬間に地面から蒼い雷が噴出した。黒剣クリサの単一能力……魔力・属性吸収この力によってアルカスターの雷を吸収しながらも、そのエネルギーを蓄えそして今まさにそれを解放した事によって無差別に雷撃が暴れ、周囲の騎士達に襲い掛かるその余波は当然とばかりに宙にいるヴォーガにも襲い掛かり彼は白い障壁を張る

ヴォーガ
「ぐおっ！！それが噂に聞く『魔喰いの黒剣・クリサ』！！ですがこちらには人質が！！」

イオリ

「んなの何処に居るんだ？」

イオリの片手にはいつの間にかティアナが握られ、それを見たヴォーガは奥歯を強く噛んだ

ヴォーガ
「今のがあなたを三剣に伸し上げたオリジナル魔法『光掴（ハイル）』」

イオリ
「こんなので三剣になれたら皆、三剣だバカ眼鏡」

ヴォーガ
「だが、もう一人は……」

イオリ
「それは向こうに任す。俺の出番はここで終わりだ。退くぞアル」

アルカスター
「はいはい、任せますよ」

ヴォーガ
「何を逃げる事など、出来るはずが」

そう思った矢先、シャリオを捕える空港の外から突如、爆音と爆発が聞こえヴォーガは驚きながらも空間モニターを展開するとそこには完全に予想外の騎士が二人映っていた

一人は赤い騎士服を着た八歳前後の子供で、その手には鉄槌が握られその子供の表情は誰が見ても、激怒の表情そしてもう一人は、二十代半ばの青髪の男、その肉体は見事に鍛え上げられたもので、そして犬のような耳と尾があった

???

「『シグナム！！どこに居やがる！！』」

???

「『落ち着けヴィータ、シグナムも大事だが今この状況を考えろ。明らかに異常だ』」

ヴィータ

「『知らねぇよ！誰だこいつら、教会の騎士じゃないのかよ！！』」

赤い服の騎士ヴィータは完全に頭に血が昇っているのか、ちゃんと物事を考えずに怒鳴っていた……モニターで見たヴォーガの表情は火山の噴火寸前の如く、顔を赤くしていた

ヴォーガ

「『雲の騎士（ヴォルケンリッター）』のヴィータとザフィーラだと…馬鹿な何故ここに」

フェイト

「ヴィータ、ザフィーラ……良かったこれでシャーリーは助かる」

イオリ
「ヴォーガ、撤退をオススメしてやる。S、AAA＋、AA＋と俺を相手に勝てるか？」

ヴォーガ
「……いいでしょう。あなたの希望通りにここは撤退しましょう。全員！！！撤退！！！」

ヴォーガの撤退命令に周囲の騎士達は、懐から白い球体を出すとそれを思い切り地面に叩き付けたと同時に騎士達はまるで見えない穴に吸い込まれるように引き伸ばされながら消えて行った……フェイトがその光景に驚いていると何かが、自分に押し付けられた

フェイト
「！？何……ティアナ！」

イオリ
「お前の補佐官だろ？確かに渡したぞ」

フェイト
「……あ、ありがとうございます」

イオリ
「俺達とお前らは敵同士なんだよ。礼はいらない」

アルカスター
「カッコつけるな、本当は嬉しいくせに」

イオリ
「……うるせぇ」

その瞬間、イオリの足元に再び山吹色のベルカ式を展開し、今度こそイオリはアルカスターを連れて転移した。その転移の瞬間にアルカスターがフェイトに何かつぶやいたがその声と言葉は聞こえなかった

第九話　聖王三剣　～求める物～

ミッドチルダ　首都クラナガン　中央病院

今、手術室の中では重度の火傷を負ったシグナムの手術が行われていた……シグナムの怪我は当然雷撃だけではなかった打撃と斬撃による打撃と裂傷が合計二十箇所近くあったそれだけ受ければ、骨の一本や二本砕けているのも当然だった

ヴィータ
「あの馬鹿野朗……勝手に決闘して命を賭けてこのざまかよ……」

ザフィーラ
「シグナムにも考えがあって決闘をした。悔いはないはずだ」

ヴィータ
「そんなのは分かってる！私が言いたいのは……」

ヴィータのイラつきは相当な物で、もしアルカスターがここにいたら有無を言わさずに戦闘になるだろう……その時複数の足音が聞こえてフェイト達は音の聞こえる方を向くと、そこには彼女とその秘書がフェイト達の前に現れた

フェイト

「騎士カリムにシスターシャッハ、どうしてここに？」

シャッハ

「勿論、騎士シグナムが大怪我をしたと聞いて」

カリム

「容態は……あまり良くはないようですね」

フェイト

「はい……騎士カリムにいくつか質問があります」

カリム

「何ですか？」

フェイト

「聖王三剣とは何ですか？それと『輝双刃のイオリ』と『裂刃』と呼ばれるヴォーガと言う人物について何か知っていますか？」

フェイトの言葉にカリムとシャッハの二人は、明らかに動揺した素振りを見せた

シャッハ

「聖王三剣（シュヴェーアト・ベーテン）……どこでその名をそれにイオリとヴォーガの名前を……」

フェイト

「空港で襲撃してきた騎士達の一人の名前がヴォーガ、それとアルカスターの仲間の名前がイオリと……」

シャッハ
「イオリが生きていた……それよりもあのヴォーガが表に出て来るなんて……」

シャッハの動揺は誰の眼から見てもおかしく、対して隣のカリムは先ほどの動揺は嘘のように消えて冷静な表情を浮かべていたそして、ヴィータ達はシグナムを傷つけた奴の仲間の事を知りたいと眼で訴えていた

カリム
「……ここでは何ですから、屋上で話しましょう」

シャッハ
「!?、カリム!」

カリム
「良いのよシャッハ、これで何かが変わるのなら……さぁ、行きましょう」

そして、カリムはフェイト達を連れて病院の屋上へ行った……一応、手術室前にはティアナとシャリオ、ザフィーラの二人が待機した風が吹き太陽が照らす屋上へ着いたカリムは話し始めた

カリム
「では、聖王三剣（シュヴェーアト・ベーテン）とは、聖王教会の騎士の中で最も強い三人

に与えられる騎士の中で最高位の称号であり、教会騎士団の力の象徴です。最もその称号も十三年前までの話しで今はありません」

フェイト
「どうして無くなってしまったのですか？」

カリム
「十三年前に教会内で大規模なクーデターがありました。過去の聖王達の功績を称え信仰するのでは無く、今を生きる者を称えて信仰せよと……そのクーデターの首謀者が私と同じ三剣の一人にして当時の教会騎士団長の『断罪刃のルクス』……それ以外にも理由はありますが、それがきっかけで三剣の称号は取り消しになりました」

フェイト
「そのルクスは……」

カリム
「約二時間に及ぶ死闘の末、この手でその命を断ちました……それが私の騎士として最後の戦いとなりました」

ヴィータ
「最後？（今も騎士として教会にいるのに……）」

カリム
「直後に、私は当時十四歳だった『輝双刃のイオリ』に抵抗する間もなく、四肢を寸断され内臓の一部を斬られました」

その言葉にフェイト達は驚いた……いくら死闘の後とはいえ教会

最強の騎士の称号を持っていたカリムに抵抗させる間を与えずに一方的に四肢と内臓を斬ったイオリの強さに

カリム
「彼は……イオリ・ゼブルダートは間違えなく教会の未来を背負う事が出来ると思いました……常識を大きく超える高い魔力に桁違いの才能それをより高める高い向上心が、彼を史上最年少の三剣にしました」

フェイト
「どうして彼はあなたを斬ったのですか？クーデターのメンバーの一人だったのですか？」

カリム
「いえ、ただ私を戦いの世界から解放したかった……と」

フェイト
「そんな理由で……」

カリム
「それを聞いた時は確かに、なんて身勝手な事と思いました。でも不思議と怨む心はありませんでしたその後はシャッハに助けられ、手術で一命は取り留めましたが、二度と剣を振る事が出来なくなり結果的にイオリの望む通りになりました。私を斬ったイオリはその後百名近い騎士達に追い詰められ、激流流れる谷へ落ち生死不明のまま今に至ります……以上が聖王三剣とイオリについてです。ヴォーガについては私よりもシャッハの方が詳しいので」

カリムはシャッハに視線を送ると彼女は何かを諦めたかのようなため息を吐いて

シャッハ
「はい、ではお話しします。『裂刃』ヴォーガ・テンガルは教会の暗部である『蛇（シュランゲ）』に所属する騎士の一人です。非常に凶暴ながらも冷静に任務を遂行する事で有名です。勿論裏の世界の話ですが」

ヴィータ
「何でシスターが詳しいんだよ？」

シャッハ
「私は元『蛇（シュランゲ）』所属の騎士でしたから、彼は私に裏の世界を教えた人ですからまぁ、特に特別な感情はありませんがとにかく強いの一言です。正直彼に勝てる騎士は三剣以外いないのではないかと思いました」

シャッハの以外な経歴と告白にフェイトとヴィータは驚いたが、すぐにその感情を抑えて訊ねた

フェイト
「Sクラスぐらいですか？」

シャッハ
「今はそれ以上と思います、彼は薬物などで体を強化する事を平然としてましたし、彼を慕い私兵として動く騎士もいたくらい

のカリスマ性もあります。表に出ていれば師団長になる可能性もありましたから」

フェイト
「（それほどの人物だったんだ……彼がいて助かったのかな？）」

フェイトはあの場にイオリがいて助かったのかと思うもし、あのまま行けば最悪一対複数の戦闘になりティアナとシャリオの二人を失い自身も生きていなかったかもしれないと……

ヴィータ
「そんな奴がどうしてあんな所にいたんだよ？裏の奴なら裏に徹してもいいはずだろ？」

カリム
「それは恐らく、彼女アルカスターの祖父……ロデル・ダモンが大きく関与しているからこそだと思います」

ヴィータ
「ロデル・ダモン？何者なんだよ」

カリム
「フェイトさん達には以前教会で簡単に話しましたが、彼は管理局でとても強い発言力を持った人物であると同時に教会にも太い繋がりのある人物です。ですから暗部である『蛇（シュランゲ）』を動かせると思いますただ……彼がこの件に関与しているという証拠がありません。まだ私の予想の域を出ていません」

フェイト

「ですが、テンガルは空港で「祖父がアルカスターに会いたがっている」と言っていましたから騎士カリムの予想は間違っていないと思います」

シャッハ

「ヴォーガの言葉を鵜呑みにはしない方がいいと思います。まだ私が裏にいた時に、彼はある人物の暗殺を依頼された際直接手を下さずに、その人物の周辺の人達を話術で誑かしその人物を殺害させたほどの話術があります。ですから鵜呑みは危険です。もし、フェイトさんが誤ってダモン氏を逮捕でもしたら、確実にフェイトさんの執務官資格は剥奪させ管理局を去る事になるかもしれません……『敵に確かな傷を残し逝け、その傷が次なる蛇が勝つ為の礎となる』と言う言葉が『蛇（シュランゲ）』にあるくらいですから、ただでは死にません必ず敵に傷を残して逝きます」

シャッハの言葉に少し人を信じやすいフェイトはヴォーガを警戒しようと決めた、自分の精神面に弱い部分があるのを分かっているので彼の言葉は聞き流すぐらいの気持ちでいようと考えていた……ちょうど、その時シグナムの手術が終わった知らせが届いた

◆◆◆

ミッドチルダ　中央区画　ホテル・アグスタ

シグナムの手術が終わりフェイト達が、医者からシグナムの状態を聞いている時を同じくして、アルカスターとイオリはミッドチルダ中央部にある森に囲まれたホテル『ホテル・アグスタ』のロビーにある上質なソファーに腰掛けていた

二人は遅い昼食をとった後にロビーで他の『星の海（シュテル・メーア）』のメンバーと通信していた以前アルカスターがしていた音声のみの通信ではなく、映像も付いた通信……その相手はイオリと同じ黒い髪だが黒真珠のように艶と輝きがあり、それに合わせたように黒い瞳の十代後半の少女だった

？？？

「『どう？久しぶりのミッドチルダは？』」

アルカスター

「懐かしさはないよ。十七年近く離れていたんだから」

？？？

「『そう……ところでイオリ『双抜刀』は出来た？』」

イオリ

「うるせぇ」

？？？

「『まだか、まあ……頑張れ。宝の持ち腐れだけはやめてくれよ』」

少女の言葉にイオリは不機嫌な表情になり、視線を映像からそらした……少女は薄く笑みを浮かべ

？？？

「『そうそう、噂で聞いたけど教会の連中が裏で『何か』するらしいから気をつけろ』」

アルカスター

「……多分、よくある『世界の為』じゃないの？（どうせ、ろくでもない事でしょう）」

イオリ

「その『何か』にアル、お前が関係していると思うぞ？教会連中が捕まえに来てるんだから」

？？？

「『何アルカ、もう巻き込まれているの？』」

アルカスター

「知らないわよ。私の祖父が会いたいなんて関係ないし、私はただ復讐するだけ……（祖父の事なんてほとんど、覚えてないし）

アルカスターは本当に、どうでもいいと思っているのか興味を示さない時に彼女が良くやる爪を噛む癖が出ていた。その癖を見た少

女は、またかとゆう表情を見せていた

？？？

「『その癖やめろよ。行儀悪い』」

アルカスター

「……誰も困らないでしょ」

？？？

「『見た目の問題で言っているんだけど？』」

アルカスター

「はいはい、気をつけますよ」

イオリ

「（ぜってー、嘘だろ）で、お前も来るのか？」

？？？

「『ん？いや、忙しいから無理だからお前をアルカの所へ差し向けたんだぞ？』」

何を今更とばかりの表情を見せる少女にイオリは何も言えない……

行く前に言われた事を思い出していたから

？？？

「『……二人共、一応気をつけろ。油断してると食われるぞ』」

アルカスター・イオリ
「「気をつける」」
???
「『じゃあ、通信終わり』」
少女は言うだけ言うと通信を切った……
イオリ
「……アル、眼が回復するのにどれ位だ？」
アルカスター
「大体、六時間ぐらい？」
イオリ
「眼を使うのを控えているんじゃなかったのか？」
アルカスター
「仕方ないでしょ、シグナムをより簡単に術中に嵌めるには使うしかなかったんだから」
イオリ
「ヴォーガ達に気づかれるのは面倒だ。残り五日使用するな」
イオリは真面目に真剣な声で、彼女に言うが特に表情を変えずにいた

アルカスター
「……真顔で言っているんだろうけど、眼が見えないから分からないわよ」

イオリ
「それもそうだな……（人が珍しく真面目に言っている時に限ってこれだからな）ところでこのまま復讐を続けるのはいいが……お前、本気で復讐する気ないだろ」

アルカスター
「……は？」

イオリ
「精々、腕試し程度しか思っていないだろ？……本音を言えよ」

アルカスター
「どうして、そう思うの？」

イオリ
「あんな近くに復讐の相手（ハラウオン）がいるのに特に殺気を見せる訳でもない、そんな奴が復讐なんて言っても説得力ねぇよ」

イオリの言葉にアルカスターは、どう言えばいいか分からないようで、凄く悩んだ末に口を開いた

アルカスター

「本当の事を言うとね……」

アルカスターはイオリにこの復讐の本当の理由を、嘘のない本当の理由を話した……それを聞いたイオリはその理由にどう言えばいいか悩み悩んで

イオリ
「分かった……お前の目的の為に全力で支援してやる。邪魔する相手は俺が斬り散らす」

アルカスター
「それはどうも……よろしく頼むわよ」

イオリ
「次は誰にするんだ？」

アルカスターは笑みを浮かべて、はっきりと答えた「エース・オブ・エース」と……

◆◆◆

ミッドチルダ　首都クラナガン　時空管理局・ミッドチルダ地上本部

そこはかつてレジアス・ゲイズ中将がその手腕を振るっていた執務室の一室に四人の人物がいた地上本部の茶色の制服を着た三十代後半の無精ひげの男と、管理局本局の青い制服を着た四十代前半の赤い眼の女、車椅子に座りながら点滴をしている八十歳を軽く超えているだろうと思われる老人、そしてグレーのスーツを着たヴォーガがいた

老人
「初戦は敗北となったのお、ヴォーガ」

ヴォーガ
「すみませんね。ロデル卿、何分揃えた騎士が戦いに不慣れな新米ですから」

無精ひげ
「お前の子飼いの部隊『悪蛇（ユーベル）』はどうした？」

ヴォーガ
「師が必要と申したので貸しました。ですが、明後日にはこちらに来ます」

赤い眼の女
「確か数は百名でしたかしら？」

ヴォーガ

「百五十名ですよ。ＡＡ－以下はいない。私が丹精込めて鍛えた蛇達です」

ロデル
「ならば次は確実に捕らえろ。思いのほか時は少ない」

ヴォーガ
「と、言いますと？」

無精ひげ
「こそこそと動いている奴らがいる。クロノ・ハラウオンと査察官のヴァロッサ・アコースだ」

赤い眼の女
「ほんと困るわ。優秀で捨てるのがおしいけど、目障りなのよ」

赤い眼の女は執務室の唯一の机に腰を下ろして、細い足を交差させて誘うような妖艶さを出していたが、無精ひげの男もロデル、ヴォーガも差して興味を示さずに会話を続ける

無精ひげ
「ヴォーガ、お前の所で始末出来るか？」

ヴォーガ
「無論出来ますよ。後始末をしてくれるのならね」

無精ひげ

「……良いだろう。提督と査察官と処理には少し面倒だが引き受けよう」

赤い眼の女
「あら、私はその案に反対よ。二人は本局の所属、後々困るのは私なの」

ロデル
「処理は不要、精々動きを鈍らせれば良い……（処理など無駄な浪費に過ぎん）」

赤い眼の女
「あは♪さすがロデル卿、良い判断ですわ」

ヴォーガ
「私はどちらでも構いませんが、ロデル卿に雇われている身なので一応を支持します」

三対一で二人の処理は保留とし、余計な障害は消したかった無精ひげの男は舌打ちをして渋々反対案を了解した

赤い眼の女
「ところでロデル卿、お孫さんを使うのはどうしてですか？『あれ』が必要なのは『聖なる血』ですよ？お孫さんはすでにその血を失っていると思うのですが」

ロデル
「お前は少々、知識がたりんようじゃな。『あれ』を開くに

は血ではなく眼じゃ。血はまやかしよ」

ヴォーガ

「師も同じ事を申していました「血は囮に過ぎず、鍵は聖なる血族の征服の瞳」と」

無精ひげ

「だがロデル卿、彼女はまだ瞳の力を残しているのか？遺伝子操作されて力が消えている可能性は捨て切れない……これは十分あり得る事だが？」

ロデル

「心配性じゃな、消えるなどあり得ぬよ。あの瞳の力は『あれ』の恩恵により生まれし神代の力じゃ、人風情の科学でどうにか出来ると思うか？」

無精ひげ

「……そこまで言うからには、それなりの根拠を見せてほしい。俺も危ない橋を渡るからな」

無精ひげの男の言葉にロデルは、車椅子の背もたれの部分のポケットから、ある書物を取り出すそれは古い古代の文字で『聖王史』と書かれていた

ロデル

「お前達は何故、聖王の魔力光が虹色であったか疑問に思った事はないか？」

無精ひげ
「……特にないな。魔力光の色は個々のリンカーコアの魔力波長の違いで決まる事はすでに証明されている確かに虹色は魔力光の色として珍しいとは思うが、特別気にする点ではない」

赤い眼の女
「でも、『あれ』の話しに聖王の魔力光が関係しているのですよね？でなければ、ロデル卿が言うはずありませんもの」

ロデル
「そう『あれ』と聖王は密接に関係しておる。その内容はこの原本の『聖王史』に語られている」

そしてロデルは老いた手で原本の表紙を開き、そして語る、聖王と自分達の求める物とのその関係を……

第十話　三番目　～追跡～

人と人が互いに分かり合うのはとても難しい事を私は知っている……特に譲れない物や挫ける訳にはいかない事情がある時の意思の強さはダイヤモンドのように硬く、難攻不落の要塞のように堅牢でさらに風のように「心配している」とも声をかけても聞き流してしまう……

それでも必ず私は声が届く事を知っている……硬い意思はいずれは砕けて、堅牢なる覚悟を貫いてそれで声が届く事を……だからあなたにも、必ず声が届く事を分かり合えるんだと言う事を知ってほしい……その為ならどれだけ長くても辛くても諦めないで話し続けるだって、私にはそれしか出来ないから……

復讐　六日目　　天気　晴れ

第3管理世界ヴァイゼン……ミッドチルダに隣接する世界であり交通の利便性と郊外の自然環境のよさからキャンプや登山を楽しむ人が多く訪れる世界、その世界の空、高度千メートル以上上空を高速で飛行する二人の女性がいた

青の模様が入った白のロングスカートに白のジャケットの縁に沿うように青のラインが入り、ジャケットの肩や腕の部分に赤い石が付けられ、右手には赤い宝石が付き、先端が二つに分かれた金色の槍のような杖を握りながら、飛行する長い茶髪をツインテールにした『エース・オブ・エース』高町なのは……服装は彼女にとって完

全な戦闘用『エクシードモード』そして彼女が握る杖は十年来の相棒『レイジングハート・エクセリオン』

そしてその彼女を追うのが、黒い前開きのロングスカートその内側に薄い青のショートスカートを穿き、腰の部分に長方形で金色の金属板を付けた黒のインナーの上に黒と白の色を中心とした上着を纏い、手に身の丈ほどの長い柄に巨大な両刃型の刃を付けた漆黒の戦斧『アレイヤ・ジョルト』を持つのは主のアルカスター・ヘンドリック……今の服装は彼女の本来のバリアジャケットであり、前回の服装は近接戦に考えた物の一つ

二人が空を飛ぶ理由は一つ、今まさに二人は本気の空戦をしようとしていた……始まりは今から五分前、ヴァイゼンにある管理局の戦技訓練所で、技術指導をしていたなのはに突如アルカスターが砲撃で強襲をかけて二人の戦いが始まった

攻撃を受けたなのはは周囲の被害を考えて、真っ先に空へ飛びアルカスターはそれを追う形でなのはを追った……そして地上に残された空戦魔導師、約四十名はなのはの援護をしようと考え、空へ飛ぼうとしたがアルカスターと共に来たイオリの広域結界に閉じ込められ慌てる彼らを余所に堂々と、彼らの正面から右手に鍔のない剣・リオルと左手に自身の魔力で作った山吹色の剣を持ったイオリが現れた

イオリ

「悪いがあいつの邪魔をさせる訳には行かない、だからここで散れ」

その言葉と共に一対四十の戦闘が始まった……そして空では地上の被害を考え飛んだなのははアルカスターと睨みあっていた

なのは
「あなたがアルカスター・ヘンドリック……（本当にフェイトちゃんと同じ顔なんだ）」

アルカスター
「言わなくても分かってると思うけど、あんたを倒しに来た他の三人と同じようにね」

なのは
「あなたは、フェイトちゃんを殺すのが目的なんですよね」

アルカスター
「そう、あの失敗作を十分苦しめた後だけどね」

なのは
「どうしてですか？どうしてフェイトちゃんを……」

アルカスター
「聞きたいなら私を倒したらどう？それが出来たら教えてあげる。フェイトの一番の友達だからね」

なのは
「（シグナムさんでも勝てなかった人……強敵でも）倒します。それでちゃんとフェイトちゃんと向き合って話し合って下さい」

アルカスター

「……いいわよ。私を倒す事が出来たらね」

なのはとアルカスターは同時に足元に桜色と蒼色のミッド式を展開してながら

なのは
「レイジング・ハート」

アルカスター
「アレイヤ」

なのは・アルカスター
「「カートリッジロード！」」

レイジングハート・アレイヤ
《《ロード・カートリッジ》》

二人のデバイスは同時に大口径のカートリッジを排莢し、二人の魔法陣の輝きを増しそして戦闘が始まった……

◆◆◆

時空管理局ミッドチルダ地上本部……『局員連続襲撃事件捜査本部』地上本部に複数ある会議室、アルカスターの連続襲撃に管理局は本格的に捜査本部を設置し、彼女の逮捕に乗り出した

捜査主任はスバル襲撃から担当していた捜査官から、新たに本局から若手ながらも確かな実力と成績を持った捜査官が捜査の指揮を取る事になった……そしてフェイトは犯人であるアルカスターの目的である為に捜査から外される事になった当然ながらもフェイトはそれに反発し捜査主任に異議を申していた

フェイト

「どうして私が外れる事になるんですか！」

捜査主任

「当たり前です。犯人（アルカスター）の目的は執務官あなたです。本来なら何処かに隠れてほしいくらいです。ですが、それを行いさらに彼女の行動が過激になる可能性は捨て切れませんので、あなたには捜査から外れてもらうだけにして他の案件をしてもらう事に……」

フェイト

「そんな事をしても彼女の目的は私を苦しめた上で殺すのが目的です。他の世界に逃げたとしても苦しめる事は出来ます」

捜査主任

「確かに前回同様にあなたの知人を襲えばいい事です。無論、それには手は打ってありますあなたの特に親しい友人達に隠れて監視を付ける予定です（もう、一部監視をしてますが）」

フェイト

「……」

フェイトは捜査主任の言葉に出来ればしてほしくないと目で訴えていたが、捜査主任はそれが分かっているのか口を指で押さえながらも笑みを浮かべてフェイトに言い放った

捜査主任
「バレなければいいんですよ。かつて『歩くロストロギア』が自分の部隊設立に裏で後ろめたい事をしたように……ね」

フェイト
「……（この人、はやての行動を調査している？）」

捜査主任
「話しは以上です。ハラウオン執務官補佐官と共に別件の捜査をして下さい。これは上からの命令です」

フェイト
「……」

反論は出来なかった……上からの命令であれば是非も問わずに従うのが組織に所属する者の定めであり、逆らえば消される事になる……もし、フェイト一人であれば左遷する事も厭わずに動くかもしれないが、自分は今、一人の未来ある執務官候補を補佐官にしている……その子の未来を考えれると行動を起こす事は出来ない

フェイト

「（でも、彼女をアルカスターを出来れば私が……）」

その時捜査本部に悪い知らせが届く、それはヴァイゼンでアルカスターが現れ教導中だったなのはを襲撃したという事だった

捜査主任
「（クラナガンに滞在すると言う夢の話しなど当てにはしてなかったとは言え、大物を狙いましたね）分かりました。現地の局員に連絡し早急に広域結界で彼女を押さえるようにと」

フェイト
「なのは……」

捜査主任
「ダメですよ。あなたには別件を……」

フェイトが今にも友人を助けようと動きだしそうなのを感じ取ったのか、捜査主任はフェイトを制止させようとした時、フェイトに救いの手が現れた

ヴィータ
「なら！これならどうだ！」

フェイト
「え？ヴィータ？」

捜査主任
「確かヴィータ三等空尉でしたね。何がこれならなのですか？」
捜査主任の言葉にヴィータは堂々と会議室に入り、捜査主任の前に立ち机にある紙を叩き付けた……それは休暇届けヴィータのでは無く、フェイトの休暇届けだった……それを見た捜査主任は何かを悟ったのか……

捜査主任
「（そう来ますか……）なるほど休暇であれば何処へ行こうが自由であると」

ヴィータ
「そうだよ。これからフェイトは私とティアナ、シャーリーも連れてヴァイゼンに旅行に行くんだ。勿論あんたよりも上の上司の許可は貰ってる」

捜査主任
「……（クロノ提督のサインですか、まったく身内には甘い人）ハラウオン執務官、この休暇届けはあなたの意思ですか？」

フェイト
「え……え、え、そうです。ここに来る前に届出をハラウオン提督に出しました。報告をし忘れてすいませんでした」
頭を下げるフェイトを余所に、捜査主任はため息を吐きながら

捜査主任
「（何で提督が執務官の休暇にサインなんかするのですか？普通は室長でしょ。そもそも無効じゃあ）」

ヴィータ
「文句ないよな。じゃあ行くぞフェイト！（待ってろ、なのは）」

フェイト
「え、うん」

ヴィータはフェイトの背を押して無理やり会議室を出て行き、その後姿を捜査主任は半分呆れて見送った……フェイトとヴィータは、外で待っているティアナとシャリオと合流する為通路を早足で進む

フェイト
「ヴィータ、助かったありがとう。でもどうやってクロノにサインさせたのいくらクロノでも他の部署の局員の休暇なんて許可出来る訳……」

ヴィータ
「あれはいくつかちょっとした裏技を使っただけだよ」

フェイト
「裏技……もしかして、あのサイン写しじゃあ……」

ヴィータ

「さぁな？いいんだよ、バレなきゃ後でクロノに伝えて置けばどうにかしてくれる……はず」

フェイト

「（お兄ちゃん、ごめん……多分すごい悪い事に巻き込んでる）」

心の中でフェイトはクロノに謝罪したが、これが本人に届く事は無い……そして外に出た二人はティアナとシャリオと共にヴァイゼンを目指して次元転移をした到着の時間は最速でも、一時間半四人が着くまでになのはとアルカスターの戦闘が続いている保証は無い

第十話　三番目　～追跡～（後書き）

今までで一番文章に悩み、改めて難しさを実感

第十一話　空の戦い　～蹂躙の瞳～

蒼い空を漂ういくつもの雲の中をなのは、アルカスターの二人は高速飛行をしながら魔法の打ち合いをしていた二人の戦闘は開始してから、約二十分が経過していた

状況は一進一退、スピード・攻撃面ではなのはを超えるアルカスターだが、高い空間認識能力と空戦技術があるなのはが、アルカスターより一歩先の反応を見せて攻撃を防御したが、なのはの砲撃はアルカスターのスピードに勝てないので当たらない……互いに決定的な一撃が与えられないまま、二十分が過ぎていた

アルカスター
「（高速戦闘はフェイトで慣れているからとしても反応が良過ぎ。本当ならもう終わってもいいのに）」

なのは
「（フェイトちゃんとの戦闘経験がなかったらもうやられてる……本当に強い人だけど負けられない！）」

なのはとアルカスターは同時に純魔力で出来た桜色と蒼色のスフィアを十個周囲に展開し、そして同時に放った

アルカスター・なのは
「「シューーート！！」」

放った互いのスフィアはぶつかり合い爆発を起し、二人の間に爆煙が舞いその中をフルスピードでアルカスターは突き抜けなのはの正面からアレイヤを振り下ろしたが、その攻撃はレイジング・ハートが捕縛盾（バインディングシールド）でアレイヤの刃を捕まえた

アルカスター
「（捕縛盾！でも予想済み！）」

なのは
「（捕まえた！これで…え！？）」

なのはは砲撃魔法『ストライクスマッシャー』を零距離で放ちアルカスターを昏倒させるつもりだったが、それよりも早くアルカスターはなのはの予想外の動きを見せる、右手でアレイヤの石突きの少し上の部分を握ると同時に掴んだ柄の部分が引き抜かれ魔力で出来た刃が出てきた

アルカスター
「日本の呼びかたは、仕込み刀でいいんだっけ？」

アルカスターは刃をなのはの左肩に突き刺したと同時に電流がなのはの体を駆け抜け、よろけたなのはの腹にアルカスターは蹴りを入れた

なのは
「ぐっ！！」

アルカスター
「サンダー・ブレイド！」

なのは
「！！」

アルカスターは零距離で一本の雷の剣をなのはに投げつけ、雷撃と爆発がなのははの上着のジャケットを焦がした

アルカスター
「（思ったよりも硬い……でもあの力で焦がすことは出来るから……）」

なのは
「（攻撃が読まれてた……やっぱり近接戦闘は不利だ）」

なのははアクセルフィンを展開してアルカスターから大きく距離を取ろうとしたが、そんな事はアルカスターが許すはずもなく

アルカスター
「逃がさない、スピードはこっちが上なんだから」

空気の壁を破る最高速度でなのはに追いつき瞬時に背後に回り、一撃を加えようとしたアルカスターだったが、彼女の視界に予想外の物が映ったそれはなのはの背に縦に並んだ桜色のスフィアが三つ

なのは
「シュート」

アルカスター
「！！」

三つのスフィアはなのはの言葉に反応して真っ直ぐにアルカスターへ飛び、爆発を起しなのはは爆風を利用してアルカスターから三十m以上の距離を手に入れた

なのは
「念の為に用意して正解だったね」

レイジング・ハート
《はい、あれが無ければ確実に背中を切られてましたね》

なのは
「スピードはフェイトちゃんより上、それにシグナムさん並の重い一撃もあったそれに確実に捕縛盾（バインディングシールド）で捕まるのを読んでた。そうじゃなきゃあんなに素早く反応出来ない」

レイジング・ハート

《同感です。やはり、強敵です》

なのは
「うん、でも負けないよ」

なのは改めてアルカスターを倒す事を決めて、肩に刺さったままの刃を抜いたその瞬間舞っていた煙の中から蒼い光が見えたと同時に蒼い雷を纏った砲撃がなのはめがけて飛んできた

レイジング・ハート
《ラウンドシールド》

襲い掛かる砲撃を障壁で防いだ瞬間に周囲の雲の中から、蒼いスフィアが連続で五十個飛び出した

なのは
「（遠距離生成、早い！）」

アルカスター
「これで終わらない！高町なのは！！」

アレイヤ
《ランサー・ライトニング》

なのは
「！、上！？」

スフィアの相手をレイジング・ハートに任せていたなのはは、アルカスターの声が聞こえ上を向くと視界には極めて巨大な蒼い槍が刃先を自分に向けて落ちてきた

なのは
「（高圧縮の雷槍！？）」

アルカスター
「スパーク・エンド！！」

なのははとっさに多重防御魔法マルチプルディフェンサーで雷槍を防ごうとしたが、雷槍は五百以上の小さな槍に分かれてなのはに降り注ぐと思ったが雷槍は、なのはを避けるように落ちて行く

なのは
「え？何？」

アレイヤ
《本命はこちらです。ライトニング・サークル》

瞬間に雷槍は光ったと同時に雷槍は雷撃に変わり、なのはの体目掛けて四方八方から一斉に襲いかかり、レイジング・ハートが全方位防御魔法『オーバルプロテクション』で雷撃を防ごうとしたが、雷撃は防御魔法が生成させるよりも速くなのはの体を襲いなのはが

悲鳴を上げる間もなく雷撃はなのはを飲み込んだ

アルカスター
「ふぅ、うまく嵌ってくれた」

アレイヤ
《少し魔力消費が大きかったですが、別にランサー・ライトニングでも良かったのでは？》

アルカスター
「……かもね。でも折角電気を周囲に散らしたんだから、槍の一撃よりも輪の方がいいでしょ？電気を吸収して威力が増す魔法だから」

アレイヤ
《そうですね……これで終わ》

アレイヤの言葉が終わらぬ間に雷撃の中から桜色の光線が飛び出し、かわす間もなくアルカスターに直撃し爆発……雷撃は光線が放たれた瞬間に飛び散り、その中心には服全体が焦げ肩で大きく息をしているなのはがいた

なのは
「レイジング……ハート、大丈夫？」

レイジング・ハート
《大丈夫です。私よりもマスターの方が心配です》

なのは
「体が痺れているけど……まだ、戦えるから大丈夫だよ」

レイジング・ハート
《一旦、エクシードモードを解除しましょう。このまま長引けば負ける可能性が》

なのは
「解除は出来ないよ、どうしてもここで勝たないときっと、フェイトちゃんとあの人は話合えないと思うから、だからごめんね。レイジング・ハート」

レイジング・ハート
《……分かりました。ですが本当に危ない時は降参してください》

アルカスター
「悪いけど、降参は認めないよ」

なのは
「……すごいですね、うまく不意打ちできたと思ったんですけど」

なのはは視線を横に向けると、そこには服全体が破け汚れたアルカスターがいた彼女の手には蒼い大鎌状態(ゼンゼモード)のアレイヤが握られていた

アルカスター

「普通に今の砲撃喰らったわよ……しぶと過ぎるよ、エースオブエース」

なのは

「皆には「無理をし過ぎ」と良く言われます（主にヴィータちゃんが）」

アルカスター

「はぁ……無理が祟って大怪我して、それでも魔導師を続けている理由は何？未来の為？」

なのは

「正直言うと、自分でも良く分かりません……でもきっと譲れない物の為に戦うんだと思います」

なのはの眼は覚悟を決めたようにまっすぐで、しっかりと、アルカスターを見つめ続けていたがその視線をアルカスターは外した

アルカスター

「（苦手だなあの眼……死んだって悔いは無いって眼）」

アレイヤ

《主、イオリには止められていますが『蹂躙の瞳』を》

アルカスター

「機会があればね。さて……高町なのは、あんたまだ魔力に余裕ある？」

なのは
「？……まだ八割くらいはありますけど……？」
首を傾げながらも答えるなのはにアルカスターは、ため息を深く吐いて

アルカスター
「はぁ～～、八割ね……（まぁ、量が多いのは知ってたけど長期戦はダメか、こっちは残り六割強だし仕方ない使うか、磁力魔法を……疲れるんだよね）」

アルカスターは手品の様に空いた手を軽く振ると、彼女の手に一枚の銀色のカードが握られていた『４８（フォーティンエイト）カード』……簡易型のカートリッジシステムのような働きをする使い捨ての魔力蓄積装置でありワンセットがトランプと同じ四十八枚ある事からその名がつけられ、トランプカードと呼ぶ人もいる

なのは
「（あれは確かトランプカード……バインド、それとも強力な砲撃をするつもり？）」

なのはの警戒を余所にアルカスターはカードを上に投げ飛ばすと同時に、カードが消えその代わりに真上から十分な質量を持ったコンクリート片が大小合わせて五十近く落ちてきた

なのは
「コンクリート！！」

アルカスター
「これは収納専用のカードで、ここへ来る前に廃棄都市区画から拝借して来たの、空戦じゃあ磁力を生かせないね。アレイヤ」

アレイヤ
《スチール・テンペスト》

全てのコンクリート片は空中で止まり、そのまま下へ落ちるではなく、なのは方を目指して飛んで行く

なのは
「（あんな質量攻撃受けたらタダじゃすまない！）レイジングハート！！」

レイジング・ハート
《アクセルシューター》

なのはの周囲に三十近いスフィアが形成され、その全てが周囲のコンクリート片に飛び散りコンクリート片を破壊したが、それでもコンクリート片はなのはへ飛び続ける

アルカスター

「（大きいコンクリート片を壊して直撃のダメージ減らすつもりで放ったんだろうけど無意味だよ。それは囮、本命はまだ手の中にあるんだから）」

なのは
「（やっぱり砕いても磁力が消える訳じゃないか）……でも、これで！」

レイジング・ハート
《ショートバスター》

なのはにシューターで砕かれながらも襲い掛かるコンクリート片に向かって、最速の砲撃を放ちながらもコンクリート片をかわし完全に消滅させていった……そして五分と掛からずに全てのコンクリート片を消し去った

なのは
「ふぅ、これで」

アルカスター
「お疲れ様。じゃあ、もう一発行こう」

なのは
「え！」

二枚目のカードが使われなのはの頭上に影が出来、上を向くとなのはの瞳には予想外の物が降ってきたそれはコンクリート片ではな

くもっと丈夫で巨大な物、それを見たなのははは叫んだ

なのは
「ビル！？」

アルカスター
「流石に容量ギリギリだったから、それ一つよ……もっとも簡単には消させないけど、マクネット・フォール」

自由落下していた廃ビルは磁力魔法によって落下速度が上がりながら、なのはに迫り来る五階建ての廃ビルに対して、なのははアクセルフィンで廃ビルを避けようとしたが、それはやらせまいとアルカスターは、なのはの横に移動し大鎌のアレイヤを振りと同時に連装刃の刃が飛びなのはに迫る

アレイヤ
《ハーケン・フライヤー》

なのは
「くっ！（速い！）」

なのはは襲い掛かる刃に手をかざし、ラウンドシールドで受け止めたが、その間にさらに廃ビルがなのはの正面に迫っていた

なのは

「（回避はもう間に合わない！）」

レイジング・ハート

《ロードカードリッジ…マルチプルディフェンサー＋》

回避は間に合わずといって砲撃のチャージをしている時間もなく、なのはに残された手段は一つだけ……正面から受け止めるしかなかったマルチプルディフェンサーに、カードリッジ内の魔力を追加したマルチプルディフェンサー＋で受け止めたが、その衝撃は障壁を通じてなのはの体に伝わった

なのは

「ぐっううう！！（凄い…衝撃）」

アルカスター

「その程度じゃあ、落下は止められないよ…おまけで一発！ハーケン・セイバー！！」

なのは

「！？」

アルカスターは再び刃を飛ばし、マルチプルディフェンサーの障壁を一枚を破壊……それにより受け止めていた廃ビルの落下速度が上がった

なのは

「うっ！（このままじゃ……地面に衝突する、如何にかしないと……）」

アルカスター
「（このまま行けば、多分三十秒ぐらいで地面と衝突だけど……）アレイヤ、地上の被害は？」

アレイヤ
《真下は森林地帯です。自然破壊はありますが人的被害は彼女一人だけでしょう》

アルカスター
「それなら……さらに追撃を！！」

アルカスターは落下する廃ビルの中に入り、なのはのマルチプルディフェンサー＋の正面の窓に姿を見せ、なのはに向かって手をかざしその姿を見たなのははは焦った

なのは
「くっ……」

アルカスター
「悪いわね。アレイヤ、カードリッジロード」

アレイヤ
《ロードカードリッジ…ライトニング・ブレイカー》

アレイヤがカードリッジを二発排出すると同時に、アルカスターのかざした手首に環状魔法陣が展開され、高速で回転を始めそして手の平に雷を帯びた魔力が集まり……そして

アルカスター
「ライトニング・ブレイカー！！」

放たれた蒼い雷の砲撃は展開されている桜色の障壁を全て破壊しながら突き進み、そして防御に力を注いでいたなのはに直撃し、そのまま吹き飛ばした……なのはは、自由落下しながら森林地帯の森の中に落ちて行き、続けて廃ビルが森林の中に落ち、凄まじい轟音と地鳴り粉塵、そして衝撃で倒れる木々の悲鳴が森林の一部を包み込んだ

アルカスター
「これで勝敗は決したよね？アレイヤ」

アレイヤ
《恐らくは、仮に意識を保てても体は言う事はきかないでしょう》

アルカスター
「そうだといいけど……」

アルカスターは粉塵が治まるのを待って、ゆっくりと森の中に降りて行く……そしてなのはの魔力を探す事、約三分視線の前には土

まみれのバリアジャケットに大きく破損したレイジングハートを握りながら、大の字に倒れるなのはの姿があった

アルカスター
「生きてる？高町なのは」

なのは
「……はぁ……はぁ……はぁ…」

アルカスター
「生きてるみたいね。良かった殺す気は無かったから死んだらどうしようと思った」

なのは
「……はぁ……レイジン……グハート」

アレイヤ
《魔力感知！左後方！！》

アルカスター
「はぁ！？」

アレイヤの警告に慌てて左後ろを振り向くと、五m先に宙に浮く小さなレイジングハートのヘッド部分に似た物が今まさに砲撃をしようとしていた

アルカスター

「（ブラスタービット！？じゃあ、今ブラスターモード！？なんて無茶を！）」

レイジングハート

《エクセリオンバスター》

ブラスタービットから桜色の砲撃を放たれ、いくら高速移動に優れたアルカスターでもかわせない一撃だった……がその砲撃は当たる直前に向きを変え空へ伸びって行った……その光景を見たなのはは驚きの表情を見せていた

なのは

「どうし……て、向きが……？」

アルカスター

「危なかった……驚いた？今のが私の一番の切り札『蹂躙の瞳』」

アルカスターはなのはの方へ歩いて行き、倒れるなのはの顔と向かい合わせになるように立ち、なのはに自分の左目を見せた

なのは

「虹色……どうして？（ヴィヴィオと同じ……）」

アルカスター

「私の両眼は初代・聖王が持っていた三つの力の一つ『蹂躙の

瞳』なの」

なのは

「……蹂躙の瞳？」

アルカスター

「そう、初代・聖王には奇跡のような力と武器があった……如何なる攻撃からも民と己を守る絶対防御『虹彩の鎧』『聖王の鎧』と言えば分かるよね。もう一つは、如何なる防御も打ち砕く一騎当千絶対撃破の聖剣『無尽の剣（クリサリオル）』そして三つ目、敵の如何なる攻撃・行動を支配し制圧する不滅の魔眼『蹂躙の瞳』」

なのは

「その眼が……『蹂躙の瞳』なら、どうして……あなたが？」

アルカスター

「最もな質問ね、私の一族の始祖は聖王の弟でね。その昔、弟は戦場で目を失い、兄たる聖王は自身の眼を移植しその際、瞳の力は何故か弟に移りそれ以降は、度々瞳の力を持つ子が生まれ続けた……」

なのは

「今はあなたが……」

アルカスター

「その通り、血は絶えたけど瞳の力は持ち続けている……話しはここまでにしよう？高町なのは」

アルカスターは顔をなのはに近づけるとなのはの瞼を閉じないよ

うにしっかりと掴み、掴まれたなのははアルカスターが何をするつもりなのか理解したが、体は落下の衝撃で動かない……

なのは

「（フェイトちゃん……ごめん）」

空には黒い雲が生まれ太陽を隠し……大粒の雨が降り始めた

◆◆◆

ティアナ
「フェイトさん！上！！」

ティアナの言葉にフェイトとヴィータは上を向くと、空には泥塗れでボロボロのバリアジャケットを着たなのはが見えた

フェイト・ヴィータ
「「なのは！！！」」

二人はゆっくりと降りてくるなのはに叫びながら飛び上がり、なのはに近づいた

ヴィータ
「おい！大丈夫か！？」

なのは
「ヴィータちゃん……ごめん負けちゃった」

フェイト
「でも、無事で良かった。何処か怪我は無い？」

なのは
「フェイトちゃん、ヴィータちゃん、逃げてもう止められない」

なのははフェイトに、苦しさと悔しい表情が混ざったような表情を

見せながらレイジング・ハートをフェイトに向けた

フェイト
「え？」

ヴィータ
「な！？」

なのは
「逃げて！！」

叫び声と同時になのはは、レイジング・ハートからエクセリオンバスターが放たれたがフェイトはギリギリで回避したが、なのはは続けてスフィアを十五個以上生成し、その全てをヴィータ・フェイトに放った……ヴィータは回避しながら叫んだ

ヴィータ
「なのは！てめぇ！！何すんだ！」

なのは
「ヴィータちゃん、ごめん！体が言うことときかないの！だからお願い、私は魔力ダメージで気絶させて！」

フェイト
「そんな事出来るわけ……」

なのは

「お願い！！このままじゃあ……皆を」

ヴィータ
「（あの野郎……シグナムだけじゃなく、なのはにも……絶対許せねぇ！！）フェイト！やるぞ！！」

ヴィータの言葉にフェイトは酷く嫌という表情を見せたが、ヴィータは大声で叫んだ

ヴィータ
「このまま、なのはが誰かを傷つけてもいいのかよ！！？」

フェイト
「でも……なのはを倒すなんて出来るわけ」

ヴィータ
「なら引っ込んでろ！！私だけで止める！！行くぞアイゼン！」

グラーフアイゼン
《了解、ラケーテンフォルム》

グラーフアイゼンの赤い柄の中にある連装回転シリンダーのカートリッジが排出され、ハンマーヘッドの片方が噴射口反対側がスパイクに変形したグラーフアイゼンは噴射口からブースターを放出し、ヴィータは体を回転させながらスフィアを回避し加速しながらなのはめがけて突進した

ヴィータ
「レイジング・ハート！！その柄をぶっ壊すぞ！！」

レイジング・ハート
《……》

ヴィータ
「（答えないか……それでも悪いな）ラケーテンハンマーァァァァァァ！！！！！」

ヴィータはなのはに接近したと同時にグラーフアイゼンを振り上げると、レイジングハートの柄にグラーフアイゼンのスパイクの部分を叩きつけ柄は音をたてて砕け、さらに振り上げた勢いのままヴィータは続けざまにグラーフアイゼンをなのはに振り下ろした

なのは
「ごめん」

ヴィータ
「この馬鹿やろう」

ヴィータの眼には涙が浮かび、振り下ろされたグラーフアイゼンはなのはのバリアジャケットに直撃し、なのはは空気の壁を破るような速度で地面に向かい吹き飛んだ……

第十二話　嵐の前　～彼女の苦悩～（前書き）

約一ヶ月弱ぶりの投稿です……放置する気は無かったのですが色々ありまして
結果的に投稿が遅れました。すいません……久しぶりなので、誤字脱字があれば指摘をお願いします。

第十二話　嵐の前　～彼女の苦悩～

第３管理世界　ヴァイゼン　北西部　炭鉱の町「アミア」

アルカスター
「イオリの奴、どうしてこんな所で合流なんて言うかな？『ホテル・アグスタ』みたいにちゃんとした所での合流がいいのに」

アレイヤ
《これが普通なのでは？》

アルカスターは愚痴をこぼしながらも、イオリの待つ炭鉱入り口へ歩いて行く、そしてすでに炭鉱入り口でアルカスターを待つイオリは退屈そうに待っていた
その表情から、つい五時間ほど前に四十人以上の管理局魔導師を倒した後には見えない、それから十分後アルカスターが来た

イオリ
「おせぇ、走って来い」

アルカスター
「自由でいいでしょ。私としては都心の方が良かったのに……そもそも何でこんな廃れた炭鉱の町なんか選んだのよ？」

イオリ

「気になるガキがいたから、様子見も兼ねて」

アルカスター

「？、子供がこんな所にいるの？」

イオリ

「ああ、ここの生き残りらしい、それで少し精神的に病んでる」

病んでいるのが分かっているのなら、精神科の病院ぐらい連れていけと、呆れてため息を吐いたアルカスターだが彼女もきっと思うだけで行動には移さない今の自分は仲間以外に深入りする気はないからだ

アルカスター

「ん、生き残り？何この町盗賊にでも襲われてダメになったの？」

イオリ

「表向きは鉱山から出た有毒ガスによる事故になっているらしいが、ガキの話しだと藍色の羽根のタトゥーがある連中がいたらしい」

アルカスター

「藍色の羽根……凶鳥だと変よね。あいつら基本的に、皆殺しでしょ？」

アルカスターの言う、凶鳥は凶悪犯罪集団として管理局に広域指名手配がかけられた武装グループの当て字で正式名は『フッケバイン』特別な武器を用いての大量虐殺を行なう者たち、アルカスター達『星の海（シュテル・メーア）』とも二、三度戦闘をしている……今はフッケバインの事や鉱山事故の真相はどうでもいい今は早々に移動し、目的を果たす事が最優先

アルカスター
「（時間は三日しかないそれに余裕は欲しい）……イオリ次はフェイトを狙うからそのつもりでいいわね」

イオリ
「かまわねぇよ、当然すぐだろ？」

アルカスター
「勿論、明日の内にはフェイトを捕まえて……私の中のアリシアを消し去る」

イオリはアルカスターの本当の目的を以前に聞いていたので、特に表情には見せずにこの町にいる少年の事を思っていた

イオリ
「（あいつは多分、森でナイフでも振り回しているんだろうな……そういえば、名前聞いてなかったな）」

そんな事を思っていた……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

同じ頃、フェイト達は襲撃された戦技訓練所とは別の管理局施設内の医務室でなのはの眠るベットを囲うように座椅子に座っていた怪我の度合いはスバル、ヴァイス、シグナム達の中ではスバル以上シグナム未満ぐらいで、命には別状はないが体に強い衝撃を受けて少しの間、安静が必要と診断で出たらしい

それを聞いたヴィータがアルカスターを叩きのめそうと殺気を放ちながら、外に飛び出そうとした所をフェイト達が必死で抑えてようやく落ち着いたところでもあったまだ若干の怒りを見せているヴィータを横目に、フェイトは眠るなのはを見つめながら、自分の存在のせいで友達や仲間が傷つくのを悔やんでいた

この事件の始まりは自身の生みの親(プレシア)の研究が原因であり、それが二十年近い年月をかけて彼女(プレシア)の研究の成果でありその彼女に「いらない」と捨てられた不完全な自分への不満が始まり……本来なら断固抵抗するべき所だが、研究の被験者であるアルカスターに対してフェイトは心の何処かで彼女(アルカスター)になら殺されてもいいと思っている部分が心の奥にあったが、それ以上に友達を守りたいと思っていた

フェイト

「（どうしたらいいんだろうか、事件を終わらせるとしたらアルカスターを逮捕すればそれで終わり……でも彼女の心はどうなる？刑務所で私とプレシア母さんに対する怒りを抱えたまま生涯を送るなんてさせたくないでも、私が命を捧げたらエリオ達が今度は復讐者になるかもしれない……特にシグナム）」

フェイトとしてはアルカスターの復讐をやめさせて、さらに彼女の復讐心を取り払いその状態で罪を償ってほしいと思っているが、実際はアルカスターにフェイトに対する復讐心はさしてなく、頭の中のアリシアを消し去るのが目的だとフェイトは知る良しも無い……

第十三話　敗北　～生きていた男～

雨が降り続けるヴァイゼンの首都の中心に、堂々とそびえ立ち雲を突き抜けようと空に伸びる巨大な一本のタワー『時空管理局・ヴァイゼン地上本部』ミッドチルダ地上本部と同じ、最上階は展望台になっておりその展望台には一人の短髪の赤毛の男が眼下に広がる街並みを眺めていた

服装は管理局の制服ではなく、卸したての黒のスーツを着た五十歳に差し掛かるのではないかと見える顔立ちながらもその目は獲物を狙う鷹のように鋭く肉体は鍛え抜かれ屈強な筋肉を纏っていた

赤毛の男

「あの日から十三年……死んだと思っていたが、しぶとく生きていたか……イオリ」

ヴォーガ

「ええ、大変元気でしたよ。とても強い方だとひと目で分かりました」

赤毛の男に答えるのは何時からいたのか分からないが、ヴォーガが赤毛の男の後ろで跪いていた。その姿に赤毛の男は無視をしながら話を続けた

赤毛の男

「奴とヘンドリック嬢は何処にいる？」

ヴォーガ
「北西部の炭鉱の町「アミア」で野営をしています。向こうも雨ですから炭鉱内にいるかと……」

赤毛の男
「そうか、ヴォーガ『悪蛇（ユーベル）』の配置は？」

ヴォーガ
「全員戦闘準備は万全です。ご指示でいつでも強襲可能です……マスター・ルクス」

ルクスと呼ばれた赤毛の男は、ヴォーガの言葉に軽い笑み浮かべながらヴォーガに歩み寄りながら頭に左手を乗せ

ルクス
「上出来だ。さすがは俺の弟子だ」

ヴォーガ
「勿体無いお言葉です。全てはあなたが『扉』を手にする為と思えば」

ルクス
「そう、ならば行くぞ。老害のダモンに『万象の扉（ゲート）』など渡せるものか」

ヴォーガ
「はい、我が師にして悪蛇の王、ルクス・D・アビニオン様」

ヴォーガはルクスに心酔しているこの師の為ならば、親兄弟を殺す事に何のためらいも迷いも無い程に歪んだ忠誠心をそしてそれと同じ位にその胸に大火の如く燃え上がる師を越えようとする心も……

◆◆◆

アルカスター
「！？、結界！？」

アレイヤ
《主！！、出口に！》

アルカスター
「！？」

目を凝らして光が差し込む出口を見ると、そこには双剣の一本であるリオルを構えながら、眼前の敵を一振りで蹴散らすイオリの姿が見え、その敵が聖王協会の暗部の者達だと分かり、そして彼らの目的が自分であることも……

アルカスター
「イオリ！結界を解きなさい！私もやる！！」

イオリ
「お前はそこにいろ！こいつらの目的はお前だ。それに空港の時の連中とは格が違う」

アルカスター
「なら、なおさら二人でやるべきでしょ！実力じゃ確かにあんたより下だけど、これでも凶暴でがさつなあんた達をまとめる星の海（シュテル・メーア）の副将よ！」

イオリ
「凶暴で悪かったな……だが悪いがこいつらは俺一人で潰す！」

この会話の間にも、悪蛇達はその名の示すように多彩な武器と臨機応変、変幻自在の動きを見せて、イオリを翻弄しようするがそこは歴代最強と言われた三人の騎士の一人瞬時に悪蛇の動きに対応して、その生まれもった巨大な魔力を使い形成した魔力刃で蹴散らす

アルカスターはそれを見て悔しいと思っている自分にはイオリほどの魔力もなければ才能もない、魔導師としてはSクラス以上だと自負しているし生まれ持った変換資質を極めていると思うし、先祖から受け継ぐ瞳もある……それでもそれでも、勝てない敵が上には上がいる実際星の海内（シュテル・メーア）の実力は恐らく真ん中位でスピードだけは上位三人には入ると言われている。そんな自分が副将についているのは、ホテル・アグスタで通信していた黒髪の少女の推薦があってこそ（彼女が大将）

アルカスター本人は最初こそ反対したが、何分他のメンバーの行動や性格に難あり（放浪癖・めんどくさがり屋・超自己中心的）などが多く皆をまとめ役が難しい……なので比較的常識人で、まともな自分が仕方なく副将に納まっているそれも今年でもう十一年目だが……

アルカスター
「（って！思いにふけっている場合じゃあない！）アレイヤ！壊すわよ」

アレイヤ

《いいのでしょうか？主を守る為に用意された結界ですし……》

アルカスター

「いいのよ！気にしない！バリアブレイク！！」

アルカスターはイオリの結界を壊す為に拳を叩き付けると同時に結界は砕けそのまま炭鉱出口に向かい走り出す、自分の張った結界が砕けた事を感じたイオリは舌打ちをしていた

イオリ

「（あいつ……壊しやがったな、人の行為を無駄にしやがって）」

リオル

《無駄な消費》

クリサ

《私の出番はまだですか？》

腰に差したままのクリサは自分も戦闘に参加したいと言おうしたが、イオリは基本的には二本の内のどちらかしか抜かない理由は複数あるが一つはクリサとリオルを同時に抜く事は、余程の強敵の時だけと決めている事そして今はリオルと魔力刃で十分な為クリサの出番はない

イオリと悪蛇の戦闘を開始してすでに、四十分が経過し途中アル

カスターも戦闘に加わり、二対百五十の戦いはアルカスター達が優勢の状態が続き、悪蛇側の騎士も半数以上が倒され残されたのは三十人弱

アルカスター
「さすがに少し疲れてきたんだけど」

イオリ
「なら……残りの三十人は、『光斬砲（ノルト・リヒト）』で蹴散らす」

アルカスターは光斬砲（ノルト・リヒト）と聞き目に見えて嫌な顔をイオリに見せる、イオリも嫌な顔をされるのは分かっていたのか何も言わないとしたが

イオリ
「目に見えて嫌な顔するなよ」

アルカスター
「あれは迷惑な魔法で、私が嫌いなの知ってるのにやるの？」

イオリ
「一気に片付けるには一番有効なのも知ってるだろ、我慢しろよ（相変わらず文句が多いな）」

アルカスター
「……仕方ない、副将として許可しましょう。さっさと片付けて」

イオリ
「（許可いらないだろ）……リオル光斬砲（ノルト・リヒト）」

イオリがリオルを悪蛇に向けて振ると同時に、刀身から山吹色の光が周囲全体に広がった、光斬砲（ノルト・リヒト）とはイオリの変換資質『光』を周囲に無差別に広げて攻撃する砲撃と斬撃の両方を持った魔法……無差別なので、当然仲間にも飛び火する

巻き添えを食わないようにアルカスターは高速で回避の連続を続けて、悪蛇の方は防御する間もなく光に飲み込まれる者や血相を変えて回避に専念する者と別れていたが、回避の途中の僅かなミスで最後は光に飲み込まれ倒されていき攻撃が止んだ時には悪蛇側の騎士は一人として立っている者はいなかった

リオル
《攻撃終了・殲滅完了》

イオリ
「おい、アル終わったぞ」

アルカスター
「「終わったぞ」じゃないでしょ……本当に迷惑な魔法、それ直線的な攻撃できないわけ？」

戦闘が終わり少し気を抜いた感じのアルカスターは不満をこぼすとイオリははっきりと答えた

イオリ
「出来たらとっくにやってる」

イオリの光変換資質は電気資質と比べて格段に操作面が難しい、理由はイオリが『光』を使う際の魔力発揮値が高いのが理由でなら魔力発揮値を下げればいいのだが、変に低くすると理由は不明だが『光』が出ない時がある。訓練の時にならまだしも戦闘中に変に下げて、それで出なかったら命に関るだからイオリは余りこの変換資質『光』を使わない、使わないから操作が上手くならない

アルカスター
「（変換資質の中じゃあ、最高の攻撃能力があるのに）」

勿体無いと思いながら軽くため息を吐くアルカスターを余所にイオリは周囲を見渡していた何か気になるのか、リオルを握ったままだ

アルカスター
「どうしたの？何かいる」

イオリ
「ヴォーガの奴がいない、それに簡単に終わり過ぎてる気がしないか？」

アルカスター
「そう言えばいなかったわね。でも、いないのは単純に部下だ

けで十分と思って本人はどこか遠くで見る可能性だってあるわよ？」

イオリ

「アホ、教会暗部の指令官がそんな真似するか，奴をなめるなよ」

アホは余計だと、不満の表情を見せたアルカスターだったが、イオリの忠告はこの直後見事に的中する事になるなどイオリ本人も夢にも思わなかった

少年は森の中から二対百五十の圧倒的不利な戦闘を見届けていた……『アミア』のヴァイゼン遺跡・鉱山崩壊事故の生き残りであるその少年は戦いの全てを収めようと、必死で目を見開いていた

少年

「凄い、あんなに速く動いているのに正確に攻撃している」

少年は手にサバイバルナイフを握り締めながら、高速戦闘をしているアルカスターの動きを真似ようとマルチタスクで学ぼうとしながらも、視線は彼女の仲間で六日前にあったイオリを見ていた

少年

「あの人、やっぱり凄い……」

少年とイオリの出会いは本当に些細な事、少年は一人で森の木々

を相手に修行している最中で野生の熊に遭遇し、襲われる寸前に偶然通りかかったイオリに助けられた。ただそれだけの話し、少年にはその時のイオリは圧倒的に強く輝いて見えただから少年は翌日イオリに会いたくて遠くの方まで探しに出かけていたそして五日ぶりに故郷へ戻ってみれば彼が大勢の敵と戦っている姿が見えた、少年の思った通りイオリはその圧倒的な力で、敵を倒し続けた

少年

「（あんな大勢に攻撃されているのに全然慌ててない）……凄い」

そして最後にはイオリの持つ剣から山吹色の光は溢れ、光が止んだ時には残りの敵は全て地に伏していた

少年

「凄い、あの人ならきっと！」

少年の心の中はイオリに稽古をつけてもらいたい気持ちでいっぱいだった……

◆◆◆

第3管理世界　ヴァイゼン　北西部　炭鉱の町「アミア」

ヴォーガ
「『ええ、その通り私を舐めないで下さい。ヘンドリック嬢？』
」

アルカスター・イオリ
「「！！」」

二人は突如聞こえたヴォーガの声がする方へ、視線を向けるとそこには少し古い型の通信機があった恐らく倒した騎士の一人が持っていたのが落ちてそれを使いヴォーガが話しかけてきたのだ

イオリ
「姿を現したらどうだ眼鏡？」

ヴォーガ
「『現しても良いのですが、残念ながら師が「出るな」と言いましたので今回は姿は見せません』」

アルカスター
「師？あんた弟子なの？教会暗部の指令官なのに？」

ヴォーガ
「『指揮官は関係無いと思いますよ。まぁ、それはそうとあなた達の相手は私の師がお相手します』」

通信機から聞こえるヴォーガの言葉には、師の確かな勝利と自信そして喜びが混ざっているのがはっきりと感じアルカスターの心の中に嫌な感じという不安が生まれ、それはすぐに現実となる……直後に鋭い視線を感じ後ろを振り向くと、十m先に重厚な銀と赤を中心とした騎士甲冑を着た五十前後の赤毛の男が手には、遠目に見ると鬼の棍棒のように太い黒刃が握られていた

アルカスター
「（あいつがヴォーガの師……何て威圧感にあの武器、あんな形の剣見たこと無い……）」

ルクス
「初めましてアルカスター・ヘンドリック。私の名はルクス・D・アビニオン」

イオリ
「おい……何でお前がここにいる？死んだんじゃないのか」

アルカスター
「イオリ？」

イオリの表情は明らかにいつもと違い、驚愕していたまるで死んだはずの死者を見たかのように青ざめていた

ルクス
「そんなに驚くなイオリ、仮にも俺と同じ元・聖王三剣の一人だろ？……まぁ、疑問を持つのは当然か先に答えておく、確かに十三年前に俺はカリムに殺されな……が、すぐに生き返った」

イオリ
「何？どういう事だ！！」

ルクス
「怒鳴るな、お前も知っての通りカリムは相手を殺す際に必ず心臓を狙う。そして一突きでその命を絶とうするだから俺は事前に自身の心臓にある細工をした。心臓を突かれ絶命してから三分以内に心臓を修復するようにな、だから俺はここにいる以上だ」

ルクスの言葉にイオリの中に言い知れない怒りがこみ上げているのをアルカスターは感じたその怒りは強烈に激しくそしてそれでもまだ爆発していない、当然ルクスも感じていると思うがまるで何処吹く風のように平然としていた

アルカスター
「（こんなに怒りを見せているイオリ見た事ない）」

ルクス
「そんなに怒るな、惚れていた女の四肢を切断してでも、戦いから解放したのにその最後の相手が生きていた。俺に言わせればカリムの殺し方が下手で雑なだけだ。殺すなら胴と首を切り離せ」

その言葉にイオリの中の怒りは噴火し、閃光のような速さでルクスに攻めより閃光の横一閃を振る……が刃は届かずルクスの黒剣に止められたと同時に、黒剣は信じられない事にリオルの刀身をすり抜けイオリの腹部に黒剣の角が刺さった

イオリ
「ぐっつ！！！」

ルクス
「怒りで俺の黒剣『審判者（トルーク・ビルト）』の能力を忘れたか！！」

ルクスは叫ぶと同時にトルーク・ビルトを振り上げ角の刃に刺さるイオリを吹き飛ばしたが、アルカスターは吹き飛ばされるイオリを空中で受け止めると、同時にルクスから距離を取った

アルカスター
「ちょっと！大丈夫！？」

イオリ
「怒鳴るなよ……急所は外してるそれにこの程度で死ぬ訳ないだろ？アホアル」

アルカスター
「む、また、アホと……あの剣の能力何よ」

イオリ
「物質透過だ。あいつの意思で自在に物質をすり抜ける。俺の無の双剣（クリサ・リオル）が対魔法用ならあいつのは対物用だ。攻略法は近接抜きの中・遠距離からの魔法攻撃だけだ。魔力を付加した武器もすり抜けるからな」

アルカスター
「めんどくさい能力、物理防御不可能って事？……ついでに聞くけど惚れてたってホント？」

イオリ
「色恋の惚れたじゃない、単なる憧れだ……（何言ってるんだが俺は）」

変に動揺している自分に気付き、イオリは深い息を吐きそして、それを待ってかのようにルクスは話しかけてきた

ルクス
「落ち着いたか？」

イオリ
「随分、余裕だな。部下がやられている中で」

ルクス
「昔と変わらない、使える部下は使い、使えない部下は捨てるそれだけだ。それに今回はお前と殺し合う気は差して無いからな気が楽だ」

イオリ
「何？」

ヴォーガ
「敵の言葉を信じるのはどうかと思いますよ？輝双刃」

背後からヴォーガの声が聞こえたと、同時に再び腹部に痛みが駆け抜ける視線を腹部に向ける腹部には一本の連結刃が腹を突き抜けていたそれを見た瞬間にイオリは口から吐血しながらも、リオルで連結刃を切断したそしてすかさず不得意ながらも高速砲を放ったが手ごたえは無かった

ヴォーガ
「いい判断です。ですが私の愛剣『ファング・アルム』の連結刃は一本ではありませんから」

イオリの視線の先に映るのは、先ほど斬られた連結刃を除く四本の連結刃がひとまとめに付いた剣だったそしてその内の二本がアルカスターの体を縛っていた

イオリ
「アル！？」

ヴォーガ
「師に意識を向けすぎです。余りに簡単で困りましたよ」

イオリ
「…アルの奴を放せ……殺すぞ」
ルクス
「今度はヴォーガに向けすぎだ。未熟者」
イオリ
「！！」
振り向いた瞬間、イオリの意識は闇に落ちた……

◆◆◆

「彼が見ているからな……」

ヴォーガ
「彼？」

ヴォーガは視線で探すよりも周囲の気配を探ると、森に誰かいたとても小さく怯えているような気配が同時にヴォーガは師の唯一の欠点を思い出したそれは、師は子供も前では誰も殺さないと言う事を……

ヴォーガ
「彼を殺さない理由は分かりましたですが、野放しは危険ですせめて四肢を」

ルクス
「目的を優先しろヴォーガ、ダモンが知れば面倒だ。数ではこちらが不利だ」

ヴォーガ
「……そうですね。あなたが『万象の扉（ゲート）』が手に入ればイオリやダモンなど取るに足らないですから」

同時にヴォーガは思っていた甘い人だと子供など殺してしまえばいいそれで危険分子が消せるなら安いものだと、だが思うだけだ行動に移そうとは思わない、ルクスの判断こそ最上であり正しいのだから……それから数分後に二人はアルカスターを連れて目的の『万象の扉（ゲート）』が眠る地へ転移し森の中の少年は二人が消える姿を黙って

見ていた

キャラクター紹介（前書き）

随分前に紹介を書こうといい、少しずつ書き続け終盤の手前でようやく完成
今さら感もありますが……宜しければ見て下さい

キャラクター紹介

星の海（シュテル・メーア）

アルカスター・ヘンドリック

性別：　女

年齢：　２４歳

身長・体重：　１６８ｃｍ・秘密

出身世界：　第１世界・ミッドチルダ　首都クラナガン

髪色：　赤

瞳の色：　金

魔導師ランク：　推定　Ｓ＋

魔力値：　ＡＡＡ＋

魔法術式：　ミッドチルダ式

魔力変換資質：　電気・磁力

魔力光：　蒼

固有能力：　蹂躙の瞳

好きな物：　果物系全般（特に柑橘類）

嫌いな物：　鳥肉（スズメを食べてから）・アルコール

《デバイス》

インテリジェントデバイス　「アレイヤ・ジョルト」

人格：　男性

カードリッジシステム：　搭載

待機状態：　黒いカード

デバイスモード　『アクスト』：　両刃型の斧　刃が大きく強度も高い為、平均的なデバイスより重い

セカンドモード　『ゼンゼ』：　連装刃の大鎌　連装刃でなければ、ほぼフェイトのハーケンと

サードモード　『フェアブレンネン』：　リミットブレイクに相当する機能、使用後はオーバーホールが必要

プレシア・テスタロッサのプロジェクトFの唯一にしてただ一人の人体実験の被害者、顔立ちはフェイトそのもので違いはフェイト

は金髪赤眼だがアルカスターは赤髪金目で、フェイトよりも背が高くシグナムとほぼ同じ（本人は背が高いのを内心気にしてる）、性格は飽き易くニ回に一回のペースでバリアジャケットを変えてくる場合が多いので、他の星の海（シュテル・メーア）が戦闘時に誤って攻撃してしまう時がある本人は分かっているが止めるつもりは無い、若干の潔癖症を持っていて風呂嫌いの仲間のイオリを苦手としている

血筋は初代・聖王の弟からなる血統であり、聖王教会からは崇めるべき対象と考えられていたが、幼少期に何者かに誘拐され経緯は不明だが当時、豊富な研究費目的で犯罪組織に所属していたプレシアの手に渡り、当時未完成の記憶転写実験に利用されそしてプロジェクトFは完成した

その後、プレシアはアルカスターの外見を遺伝子操作で、愛娘アリシアそっくりにしたが「髪と目の色が違う」という理由で研究施設のある世界の近くの管理外世界に捨てられ、その世界で数年間奴隷同然の生活を送る……そして十歳の時に当時、仲間を集めていた星の海（シュテル・メーア）の大将と出会い星の海に加わる

戦闘はフェイトと同じ高速戦闘の戦法を取る事が多い、フェイト以上のスピードとシグナム並の一撃も持つので近接戦闘も得意、魔法は全距離を均等にバランスよく使うが、本人は「一撃で倒すより効率よく絡めてで倒したい」気持ちが強いので敵を倒すのに時間がかかる事が多い

固有能力の蹂躙の瞳は、初代・聖王が持っていた能力だが聖王の弟が戦地で失明した際に目を移植してからたびたび弟の血筋に現れるようになった能力は蹂躙の瞳、発動状態時に対象の操作する全てのコントロールの略奪、魔法・デバイス・対象の行動などその全て奪う事が出来きるがリスクとして使用時間に合わせて数時間から一日半の間失明状態になる

イオリ・ゼブルダート

性別：　男

年齢：　２７歳

身長・体重：　１７８ｃｍ・６８？

出身世界：　第１世界・ミッドチルダ　北部

髪色：　黒

瞳の色：　黒

魔導師ランク：　推定　ＳＳ

魔力値：　ＳＳ－

魔法術式：　近代ベルカ式

魔力変換資質：　光

魔力光：　山吹

好きな物：　パン

嫌いな物：　タバコ・魚類（特に鰯）

《デバイス》

アームドデバイス　「クリサ・リオル」

人格：　女性　（普通にしゃべるのがクリサ　片言ぎみがリオル）

カードリッジシステム：　非搭載

待機状態：　黒の十字架と銀のロケット

アインスフォルム　『デーゲン』：　双剣　二刀だが使うのは基本どちらか一本と魔力剣の組み合わせ

ツヴァイフォルム　『ウンタードリュッケン』：　銃剣　中・遠距離用に用意したが使用頻度は少ない

ドライフォルム　『エヒト・クリサリオル』：　大剣　「クリサ・リオル」の全能力解放形態、魔力消費が尋常ではない

元・聖王教会所属の騎士。その中で最強の三人に与えられる称号『聖王三剣（シュヴェーアト・ベーテン）』の一人で『輝双刃のイオリ』と呼ばれ同時に歴代最年少記録を持つ、神童とも言われていたが、十三年前同じ三剣の一人『断罪刃のルクス』の起こしたクーデターの際に三剣の紅一点『流麗刃のカリム』に刃を向け彼女を倒し、その直後に応援に来た騎士達に追われ谷に落ち生死不明になる

星の海（シュテル・メーア）に加わった時期は不明だがアルカスターよりは遅い、メンバー内の実力は五指に入るが変換資質の『光』が使いこなせればもっと上にいける……魔力量は三番目に多く、剣術は上位三人に入る

戦闘は高い魔力を相手に二回連続でぶつける『二撃必倒』を主流としている為、砲撃型の魔導師は苦手なので他のメンバーに任せる事が多い、どうしてもの場合に砲撃中心の戦いをするが命中率はあまり良くない

性格はめんどくさがりだが、仲間の件などは真剣に取り組み最後まで付き合うがそれ以外の特に生活面は、ダメな部分が多く風呂なども入るのは週一回で十分と思っているので、アルカスターは苦手にしている。部屋も汚い

デバイスの『クリサ・リオル』は聖王教会秘蔵の双剣で、古代ベルカの時代から存在し危険度は低いが古代遺産（ロストロギア）の部類に入り、能力はクリサが魔力・属性吸収を持ち『魔喰いの黒剣・クリサ』と呼ばれリオルの能力が魔法・属性反射を持ち『魔鏡剣・リオル』と呼ばれている

聖王教会　暗部

ルクス・D・アビニオン

性別：　男

年齢：　４８歳

身長・体重：　１８５ｃｍ・７６？

出身世界：　第６１管理世界・スプールス　北東部

髪色：　赤

瞳の色：　緑

魔導師ランク：　推定　ＳＳ

魔力値：　Ｓ

魔法術式：　近代ベルカ式

魔力光：　黄色

好きな物：　ワイン・川釣り

嫌いな物：　弱者

《デバイス》

アームドデバイス　「審判者（トルーク・ビルト）」

人格：　非搭載

カードリッジシステム：　非搭載

待機状態：　指輪

アインスフォルム　『シュトラーフェ』：　棍棒のように太く分厚い黒剣

元・聖王教会所属の騎士であり、『教会騎士団・団長』であり『悪蛇（ユーベル）』の生みの親、さらにイオリ、カリムと同じ聖王三剣の一人、三十代で教会騎士団・団長まで上り詰め、その圧倒的な強さと部下からの高い信頼度を評価され三剣の称号を手に入れた

しかし、それから五年後にクーデターを突如起こし、二時間に渡る死闘の末カリムの手によって死亡したとされたが事前に施した治癒技術によって蘇り、その後はアルカスターの祖父ロデル・ダモンの下で弟子のヴォーガと共に暗部の育成を行なっていた

性格は敵に対しては均等に冷酷であるが、完全な非情ではなく子供の前で殺しはしないが使えない部下は平気で見捨てるが、信頼は昔同様厚い

デバイスの「審判者（トルーク・ビルト）」はイオリの「クリサ・リオル」と同じ教会秘蔵の剣で古代遺産（ロストロギア）の部類に入り、能力は物質透過であらゆる物質をすり抜け又魔力付加の武器も透過が出来る。戦闘は自身の豪腕と透過能力を生かした敵の内側から破壊する「臓器破壊」で断罪者のように逃れられないその技から『断罪刃のルクス』と影で呼ばれそれが三剣としての呼び名になった

ヴォーガ・テンガル

性別：　男

年齢：　３５歳

身長・体重：　１７５ｃｍ・６６？

出身世界：　第１２管理世界　フェディキア　北部

髪色：　茶

瞳の色：　青

魔導師ランク：　推定　Ｓ＋

魔力値：　ＡＡＡ

魔法術式：　近代ベルカ式

魔力光：　白

好きな物：　弱者・ルクス・オペラ

嫌いな物：　ヘビメタ

《デバイス》

アームドデバイス　「ファング・アルム」

人格：　非搭載

カードリッジシステム：　搭載

待機状態：　ブレスレット

アインスフォルム　『プファオ』：　柄の先の刀身が五本の連結刃に分かれており、それぞれが独立した動きが可能

聖王教会の暗部『蛇（シュランゲ）』の総指令官であり、ルクスの一番弟子兼『悪蛇（ユーベル）』の指令官、十三年前のクーデターの前から『蛇（シュランゲ）』に所属し、当時から戦闘において凶暴でありながらも冷酷に任務をこなし敵を八つ裂きにする事から『裂刃』と呼ばれ同時に聖王三剣と同列の強さと周囲から噂されていた

性格はルクスと違い冷酷非常で目的の障害とあらば皆殺しも厭わない、師であるルクスに心酔しているが同時にルクスを超えたいと思う野心も持つ誰に対しても敬語で話し、話術も達者で戦闘は五本の連結刃を使い、敵を翻弄しての死角からの一撃を得意とするが任務中の戦闘は薬物を使い野獣の如く敵に襲い掛かり八つ裂きにする

第十四話　野望　～望む物～（前書き）

ここから終盤に入ります

第十四話　野望　～望む物～

復讐　八日目　天気　曇り

？？？

「以上が僕が現状で調べられる全てだね。もう少し時間をくれれば管理局上層部との細かい繋がりも……」

カリム

「もういいわ。ありがとうロッサ……お疲れ様」

聖王教会・大聖堂、その中にある秘密の地下通路の分かれ道を挟んでカリムと義弟で緑の髪に白いスーツが目立つ『時空管理局・本局査察官』ヴェロッサ・アコースがロデル・ダモンと聖王教会暗部『蛇（シュランゲ）』との繋がりを調べられる限り調べ、カリムに伝えた

カリム

「予想はある程度していたけど、想像以上の人員が動いてる……それに」

ヴェロッサ

「うん、調べて初めて分かった。『悪蛇（ユーベル）』と呼ばれる部隊、その生みの親……」

カリム

「……ルクス・D・アビニオン、まさか生きている思わなかっ

たわ」

カリムの脳裏に十三年前のルクスとの戦いが蘇る……二時間に渡る友との殺し合いが鮮明に克明にはっきりと心臓を刺した感触まで……

ヴェロッサ
「姉さん……？」

カリム
「大丈夫、昔を思い出していただけよ……」

ヴェロッサ
「……イオリも生きていた」

カリム
「ええ、もう悲しむ必要はないわ。だからロッサここに毎月来る必要はないわよ？」

ヴェロッサ
「……何の事だい？僕はただ大切な姉と世話焼きでお節介な元・教育係が入れる紅茶とお菓子を食べに来てるだけだよ？」

知らぬ存ぜんを通すヴェロッサだったが、カリムもシャッハも知っていた毎月決まった日に、ヴェロッサがこの地下通路の奥に作られた慰霊碑に花を置いている事を……それは十三年前のクーデターで死んでいった者達の慰霊碑、聖王教会が隠した戦死者達の墓そしてヴェロッサが騎士になるのをやめたきっかけ……

カリム
「……そう、（嘘つきは泥棒の始まりよ）」

ヴェロッサ
「ところでカリム、これからどうするんだい？ロデル・ダモンに関して調べたはいいけど、彼を裁くのは難しいと思う管理局上層部と敵対していても、彼の持つ権力はカリムと違いすぎる証拠を見つけても消されるのが目に見えてるよ？」

カリム
「そう、私のように形だけ管理局に席を置いているだけなら何もできないけど、教会の中からなら出来る事もあるの」

ヴェロッサ
「？？」

首を傾げるヴェロッサを見て、カリム優しく口元に笑みを浮かべて自分の考えを言い放つ、それは彼にとっては完全な予想外で驚き、二人から離れて見守り続ける世話焼きでお節介な元・教育係のシスターにとっても、十分に驚くことだった……

カリム
「私が教会騎士として、この手で『蛇（シュランゲ）』を倒せばいい……そしてもう一度ルクスをこの手で……」

◆◆◆

目からと一番呼びやすいと大勢の学者達が呼ぶ名前

当然、古代遺産（ロストロギア）の回収を行なっている管理局も探してはいるが、設立から百五十年の記録を見ても過去に一度として封印・回収もしくは破壊をしたという記録は無く、そもそも造られたのが一つだけなのか？複数なのかすら分かってないのが現状で、わずかだが分かっているのが『未知の物体らしき物で出来た光沢のある両開きの扉』『各世界の記録によって扉の大きさがバラバラ』ぐらいしかない……

そしてロデルの言う『森羅万象（イデア）』とは、彼の持つ『聖王史』に記された初代・聖王が聖王と呼ばれるになる物品の名。それにはあらゆる世界の過去・現在・未来が記録されそれを手にした者が、『王』になる事が出来ると記されていた

ロデル

「（あらゆる世界の過去・現在・未来を知る事は『王』ではなくもはや『神』に等しい……神になるのはワシじゃルクスの奴などに渡さぬ……それに本性を見せた所で、秘策がある）」

ロデルは低い声で笑いながら、自身の座る車椅子に付けられたポケットの中の物を触りながら「何者が相手だろうと、これがある限り自分に敗北はない」と自信と優越感に浸っていた……そしてそれから数十分後、彼の待ち望んだ扉を開ける鍵であり自身の孫娘だった（・・・・・）少女が届けられた……

◆◆◆

突如彼女の首に灰色の『フーブバインド』が三本現れ、彼女の喉を締め付け気管を塞ぐか塞がないのギリギリの所で止まり、赤い眼の女はすぐさま破壊しようとバインドに自分の魔力を注ぎ込ませようとした時、部屋の入り口の方から女性の声が聞こえた

???

「やめた方がいいですよ？私の方が先にあなたを絞め殺しますから……」

赤い眼の女

「！？、誰！姿を見せなさい！！」

???

「隠すつもりはありませんよ。ただ、この部屋の照明の光が弱いだけですよ？」

声の主は赤い眼の女の部屋の照明が悪いと言いながら、その姿を赤い眼の女に見せ、しばらくして彼女は声の主が誰かを思い出した彼女は成績優秀で、そして確かな実力を持ち、自分が近い内に手駒にしようと考えていた捜査官であり、今は『局員連続襲撃事件』の捜査主任でミッドにいるはずの彼女が目の前にいた

赤い眼の女

「どうしてここにいる？答えなさい！」

捜査主任

「簡単です。あなたには死んでもらう為です。勿論話してもら

う事は話した後ですが」

赤い眼の女

「何の目的があって、こんな事を！！管理局に居られると思って」

捜査主任

「別にどうでもいい事ですよそんな事は、それよりも一応教えときます。あなたは自殺として処理されます」

赤い眼の女

「な！？出来るわけが……まさか、あのロデルのじじい！！」

捜査主任

「違いますよ彼ではありません。勿論、同じ協力者のひげの彼でもありませんよ、彼はすでに天に召されましたから」

その言葉に赤い眼の女は、眼を見開き驚いた、彼は昔から用意周到でそれでいて警戒心の強い男で、例え部下であろうと直接は会わずにモニター越しの話しになる。だから、彼の部下が見れば自分とロデルそれにヴォーガの三人と同時に直接会うのは非常に珍しいと思うだろう

捜査主任

「さて、彼は答えてくれませんでしたが、あなた方の目的を教えてほしいのです。嫌ならこのまま死ぬだけですけど教えてくれましら、命はお助けしますよ。記憶は消させてもらいますが」

赤い眼の女
「……（背に腹は変えられない）言うわ。私達の目的は……『万象の扉（ゲート）』から『森羅万象（イデア）』を手に入れる事扉（ゲート）が眠っている世界は、第４管理世界『カルナログ』場所は、カルナログ首都から南西に千ｋｍにある『黒石砂漠（こくせき）』の地下遺跡の最下層の隠された通路の先の大空洞にあるわ」

捜査主任
「『カルナログ』『黒石砂漠（こくせき）』……私は局内の立場の逆転を狙ったクーデターでも考えていたと思ったのですが、扉を開けようとは考えもしませんでしたよ……一応、嘘はないですね」

赤い眼の女
「無いわ。だから命だけは助げぇ！！！」

赤い眼の女が、命乞いしようとした瞬間に一本のナイフが彼女の喉元に突き刺さり傷口から、鮮やかな鮮血が噴水のように噴出し彼女は出血を手で押さえたが、それは無駄に終わり彼女は絶命した……捜査主任は特に驚きもせずに後ろを向くとそこには、ヴァイゼンでルクスとヴォーガに破れ、そして今は頭と腹部に包帯を巻きつけたイオリがいた

第十五話　期限　～残された時間～

捜査主任
「危ないです。イオリさんナイフは投げる物じゃありませんよ切る道具」

イオリ
「知るか、どちらにしろお前あの女、殺す気だっただろ」

イオリの言葉に捜査主任は、無言の肯定を示してながら赤い眼の女に近づき彼女の腕を掴みながら話しを続ける

捜査主任
「でも、良かったですね扉（ゲート）とアルカスターさんの居場所が分かって、これで三つ目になるんですから」

イオリ
「それよりお前の担当の罪の宝石（エルプズユンデ）の捜索はどうなっているんだ。もう五年目だろ？」

捜査主任
「そうでした？一応、本局の『古代遺産保管庫（ロスト・アーカイブ）』に罪の宝石（エルプズユンデ）の一つらしき物があるみたいなんですが、何分鉱物系の古代遺産（ロストロギア）が一番多く保管させているので、確認に時間がかかります……それよりもイオリさん、アルカスターさんの話し本当なんですか？」

イオリ
「ああ、多分な……どちらにしろ時間が無い」

捜査主任
「行くなら気をつけて下さいよ。皮膚は完全に塞いでいますが、内臓の方は激しく動くと傷が開きますよ？それと私も捜査主任をしてる以上『カルナログ』に局員を送らざるえないので、アルカさんの為にも、捜査から外したハラウオンを送る事になると思います……それと先ほど言っていた、アミアの炭鉱爆発も調べておきます、時間はかかると思います」

捜査主任は話しながらも、絶命した赤い眼の女の硬直した手を動かしながら慎重に殺人を首をナイフで、刺しての自殺を偽装していたイオリはそれを見て悪態をついていたが特に偽装に文句は無い

イオリ
「ああ頼んだ。あのガキが居なかったら流石に不味かったからな、礼の一つでもしないとな」

捜査主任
「……なら、自分で調べて下さい、私だってそれなりに忙しいですけど？」

イオリ
「調査は苦手だ俺が出来るには敵を斬るそれだけだ……だから調査は頼んだ、アウローラ」

アウローラ

「……（ＮＯと言えない自分が憎い）分かりました。お気をつけて、地下遺跡でもし会っても他人のふりをお願いします」

イオリ
「そのへんは分かってる、ただ……俺の戦いの邪魔をするなよ、ルクスは俺が殺す。情けをくれてやる気は無い」

アウローラ
「ご自由に……それなりの敵の部下を残してくれるなら、お好きなだけその双剣を血で染め存分に力を振るって下さい『鬼葬刃』さん」

アウローラは知っているイオリの本当の野獣を超える鬼神のようなを、かつて聖王三剣として輝ける双剣の刃……『輝双刃イオリ』と言われていたが今は違う鬼神の如き敵を葬る双刃……『鬼葬刃イオリ』

イオリは『時空管理局本局・特別捜査官』兼『星の海（シュテル・メーア）』の一人アウローラ・ミーアに後は任せ一足先にカルナログの黒石（こくせき）の砂漠、地下遺跡を目指し最短ルートの個人転移をした。アウローラはイオリの転移を見届けると、偽装の最後の仕上げをして赤い眼の女の部屋に自分とイオリの痕跡を残さないように細心の注意を払いながら、部屋を出て行った……その後、彼女と無精ひげの男の二人は仕事と人間関係を苦にした自殺と処理されたのは数日後の話し

◆◆◆

がどうでも良い」

アルカスター
「？、どういう意味よそれ……」

ロデル
「お前のその瞳は万象(ゲート)の扉を開ける鍵となる。そしてその中に眠る物品森羅万象(イデア)を手に入れる」

アルカスター
「万象(ゲート)の扉？森羅万象(イデア)？……！、ここに扉があるの！？『真理(エメト)の扉』が！！」

アルカスターの驚きの声に彼女の手を拘束魔法で、拘束しているルクスは神妙な表情でアルカスターの表情を見つめ、アルカスターの相棒アレイヤはルクスの背後ヴォーガの手の中にあり、機能のほとんどを停止させられている

ルクス
「（真理(エメト)の扉、その呼び名は初耳だな……）」

ロデル
「どうしたルクス、神妙な表情などして？（どうせ、万象(ゲート)の扉を奪い取る算段でも考えていたのだろう）」

ルクス
「いや……何でもない、それよりどう開ける？蹂躙の瞳は使い(アルカス)手(ター)の意思しだいでＯＮ、ＯＦＦ出来る無理に薬をやれば、こいつの

精神を壊すぞ？」

ロデル

「確かに……ならば、肉体面で痛めつければ良い、ヴォーガお主はその手が得意じゃろ？」

ロデルに呼ばれヴォーガは頷いき、ロデルは拷問でアルカスターの蹂躙の瞳による万象（ゲート）の扉を開く事を決めると、アルカスターは笑いを堪えていた

アルカスター

「くっふふふふ……」

ヴォーガ

「どうしました？恐怖で気が触れましたか？」

アルカスター

「ほんと、邪魔ばっか……こっちには時間も無いのに」

ルクス

「時間が無い？何の事だ」

アルカスター

「今は八日目の夜……あんた達と私の残された時間は後、二日それまでに蹂躙の瞳を使わせないとあんた達の目的は一生叶わないと思うと可笑しくて……くふふふ」

ロデル

「どういう意味じゃ？ふざけているのなら、この後の拷問は……」

アルカスター
「いいえ、ふざけていませんよ？おじい様、私には時間がないだって後二日で私の人格はアリシアに消されるかもしれないのですから」

ロデル達にはアルカスターの言葉の意味が良く理解できなかった。アリシアと言う単語がアリシア・テスタロッサを指しているのは分かる管理局が壊滅させた組織の研究データからアルカスターにアリシアの記憶が転写されているのを知り同時に、アルカスターが生きてると確信を持って自分達は動き出した……そして消されるのはどういう事なのか分からなかった

アルカスター
「分からない？まぁ、当然だけどね知ってるのは私の仲間でも二人だけだし……」

ルクス
「答えろ。消されるとはどういう意味だ？」

アルカスター
「教えてあげる……今から十七・八年前知っての通り、私は記憶転写技術『プロジェクトF』の実験体になったそしてその研究者プレシアの亡き娘アリシアの記憶を転写された……と思うでしょ？でも、本当は違う私が転写されたのは記憶ではなく人格の方だった……けど、プレシアは記憶転写が成功したと勘違いのままさらに

研究を進め続け、そして数年後に時の庭園でフェイトを生み出した。でも知っての通り生み出されたフェイトはアリシアに成りえなかった……その理由は簡単、フェイトはアリシアの人格を持てなかったのが原因、例え記憶を持てたとしても、人格を組み立てるのは赤ん坊から三歳までの経験、別世界には『三つ子の魂百まで』って諺がある位だからそれが無く、五・六歳くらいで生まれたフェイトは、どう頑張ったってアリシアにはなれない……まぁ、私にした転写実験がちゃんと成功していればフェイトはアリシアに成れたかもしれないけどね」

ロデル
「それがどうお前の人格の消失に繋がる？お前が小娘の人格を持っていても何の問題もないはず」

祖父の言葉にアルカスターは落胆したようなため息を吐きながら答えた

アルカスター
「はぁー、馬鹿。なら聞くけど、どうして生まれた時一つの肉体に一つの人格…魂でもいい、それが一つしか生まれないの？問題ないなら最初から複数の人格…魂を持った人間が生まれないの？病気とか、後天的とかは無しよ」

アルカスターの問いにロデルはすぐに答えられなかったが、ルクスとヴォーガは一応問いの答えを見つけていた

ルクス
「人の肉体とは人格…魂を入れる器であり、その器には一つの魂しか入らない。そこに他者の人格を無理に入れれば肉体に無理が生じ、肉体か元の人格に何かしらの障害が出るから……か？」

アルカスター
「正解。さすが聖王信仰が厚い聖王教会の騎士、ミッドじゃあオカルトの類は簡単に浮かばないね……その通り、私の場合は人格の侵食少しずつアリシアの人格が私を消そうとする」

ヴォーガ
「それが残り二日と？何故明確に時間が決まっているのですか？」

アルカスター
「……私達星の海（シュテル・メーア）の大将が特別な魔法の使い手でね。その魔法でアリシアの人格を封じ込めたでも、それは期限付きでその期限が十五年弱、その効果が二日後に切れて十五年分の侵食が多分一気に来るから、私の人格は消える。だからあんた達の目的は叶わなくなるアリシアに蹂躙の瞳が使えるとは思えないし」

ロデルは孫娘の言葉に焦りを感じずにはいられなかった万象（ゲート）の扉の存在を知り、森羅万象（イデア）を手に入れんと捜索の為に半世紀近くの人生を削り、そして今まさに手の届く距離まで迫り、後は扉を開くだけ……ここまで来て目的を野望を潰えるわけにはいかなかった

ロデル
「ヴォーガ！！！残り二日で必ずコイツを服従させ瞳を使わせ

ろ！」

ヴォーガ

「ロデル卿、怒鳴らなくてもそのつもりですよ、我々も相応の時間を使いましたからね。ここまで来て失敗は嫌ですから」

そしてヴォーガは笑顔でロデルに答えながらアルカスターの髪を掴みながら、地下遺跡にある小部屋を目指して歩いて行く……その部屋には血で塗れている

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

第3管理世界　ヴァイゼン　時空管理局・ヴァイゼン地上本部

フェイト達はなのはの病室から『局員襲撃事件』の捜査主任アウローラ・ミーアに呼ばれ、渋々ヴァイゼン地上本部に移動していたフェイト達は最初あの休暇届けの件が問題になりそれで呼ばれたと思ったが予想は大きく外れた

フェイト

「え？カルナログですか？」

アウローラ

「『そうです。ヘンドリックとゼブルダートの両名がカルナログの黒石砂漠の地下遺跡周辺で目撃されました。あなた達も至急カルナログに向かって下さい。そうすれば、あの休暇届けの件は不問とします……ヴィータ三等空尉、あなたは逮捕されても文句は言えないのですよ？』」

ヴィータ

「う……それは」

フェイト

「……分かりました。ミーア主任、フェイト・T・ハラオウン…ヴィータ両名これからカルナログ黒石砂漠に行きます」

アウローラ

「『ええ、私も来ますが合流は明日の夜になると思います。カルナログの地上本部から砂漠までの移動は飛行機で行って、その後はヘリで地下遺跡を目指して下さい武装局員の要請は私が話しをつけておきます……間違っても先行しないように』」

フェイト

「はい」

アウローラ

「『では、休暇届けは無かった事とします作戦行動開始は二日後。以上で通信を終わりにします』」

通信が終わりフェイトとヴィータは別室で待機しているティアナとシャリオを目指しながら、ヴィータがフェイトに話しかけてきた

ヴィータ
「なぁフェイト、あのミーアって奴はやり手なのか？」

フェイト
「そうみたいだよ。訓練校も私となのはと同じ短期プログラムで卒業したみたいだし、入局数年で捜査主任なんてやり手の証拠だよ魔導師ランクも確かＡＡＡ＋の特別捜査官でも……いい噂は聞かないかな」

ヴィータ
「……どんな噂だよ」

フェイト
「彼女は去年まで本局勤務だったんだけど、去年のレジアス中将の死後に地上本部に飛ばされている『海』から『地上』の転勤なんて滅多にないだから、彼女は中将が送り込んでいたスパイだったんじゃないかとか、逆に本局が地上本部に送ったスパイとか……それにはやての事も調べているみたいだから私としては前者かなと思う」

ヴィータ
「ちっ……嫌な奴に貸しができちまった」

舌打ちし苛立つヴィータを横目にフェイトは、「でも、真面目で局員からも信頼が厚いから」と言おうとしたがその前にティアナと

シャリオが待つ部屋に着いたので言えずじまいに終わった……
アウローラは通信を切ると足早に本局からの長距離転移の申請をしながら、アルカスターの身を心配していたフェイトに言った事に嘘はなく実際本局からカルナログまで最短でも一日はかかりさらにそこから移動となると、どうしても作戦開始はアルカスターの期限と同じ二日後になる

アウローラ
「（イオリさん一人でどうにかこの事を終わらせればいいけど、相手はオーバーS以上が少なくても最低二人、AA＋が最低でも五十人以上はいると見ていいこちらが　要請する武装局員もせいぜいAクラスが十人程度、残りは良くてB＋程度…ハラウオン、ヴィータ、ランスターこの三人と私でやるしかないかな……ほんとうに管理局は人数は揃えられても、戦力が足りないもっと戦技教官を増やすべきね）」

愚痴を思いながら待つとそれから数分後、長距離転移の許可が下りアウローラはカルナログ目指して長距離転移を開始した

第十五話　期限　～残された時間～（後書き）

どうも進みが遅いな、うまく文章が出ないや……元々文章下手だけどね

第十六話　遺跡　～戦闘開始～

復讐　十日目　天気　晴天

第４管理世界・カルナログ……第３世界ヴァイゼンの隣接する世界であり、森林の多いヴァイゼンとは違い山岳地帯が多く首都を除くほとんどの町や都市の隣に千メートル級の山が点在し、次元世界の中で一番多く登山家が訪れる世界としても有名、そして首都から南西に千ｋｍの地点にそれはあったカルナログ最大の砂漠にして観光名所の一つ黒石砂漠

黒石砂漠……第１管理世界から第５管理世界内にある砂漠の中で最大級の広さと暑さを誇り、昼間の平均気温が４０度を超える事が多く夜の気温は、０度を下回る事は日常茶飯事そして黒石砂漠、最大の特徴は名前の由来である、砂が黒い事理由は鉄やアルミニウムが八割りを占めている為そしてその広大な砂漠に点在または、砂に埋もれている古代の遺跡が多々ありその数およそ百、その中の地下遺跡に万象の扉が眠っている

その砂漠の上空を時空管理局のヘリが十数機、ローター音を響かせながら砂漠の奥地へ進みその一機にフェイト達は待機していたが四人の額には汗が滲んでいた

ヴィータ

「あちぃ～、くそ何でこんなに熱いんだよ……アイス食いたい」

ティアナ
「……同感です。帰りたい」
シャリオ
「右に同じく……シャワー浴びたい」

ヘリの冷房は全開にしているが、運が悪いのかこのヘリの冷房は効きが悪い……そしてフェイトは助士席で三人の愚痴に耳を傾け心で頷きながら、アウローラと作戦の確認の通信をしていた

フェイト
「武装隊の人数と作戦開始時刻に変更はないですね？（髪の毛が熱い……シャワー浴びたい）」

アウローラ
「『ええ、そうです。このまま二人が目撃された北ブロックの遺跡に向かいます』」

フェイト
「了解……あの、ミーア主任どうして彼女達はそんな所にいると思いますか？それと目撃情報はどこから？」

アウローラ
「『情報元は秘密です……そこが彼女達の野営の場所なのでは？もしくはあなたを殺す為の奥の手があるとか……あなたはどうするつもり？』」

フェイト

「え？何がですか？」

アウローラ

「遺跡にまだ彼女がいた場合、戦闘になればほぼ間違いなくあなたが相手する確率が高いそれに教会の暗部も動いています。最悪私達は複数のオーバーSを同時に相手にしないといけない……（周辺に魔力反応なし、イオリさんはまだ戦闘を開始していない？）」

アウローラは話しながら視線を周囲の魔力を感知するセンサーに眼を配りながら、内心先行したイオリが全てを終わらせる事に小さく期待しながらフェイトと会話していた

フェイト

「……そうですね。この戦いで誰か死んでしまうかもしれないでも、誰も殺さないできちんと法で裁くのが管理局です。仮に私が彼女に追い詰められて瀕死になっても非殺傷は解きません。必ず最後は勝って私の帰る場所に帰ります」

アウローラ

「……その覚悟は結構、私も死ぬのは嫌ですから互いに頑張りましょう。アルカスターはあなたに一任します。友人の敵討ちもしたいでしょうから…（これで確実にアルカさんとぶつかる…後はアルカさんの人格がそれまで持つか次第）」

アウローラが視線を再びセンサーに視線を向けるとセンサーに反応が出たと同時に、はるか前方に巨大な黒い柱が轟音を響かせながら空に向かって伸びていくのが見えて柱が崩れるのが見えた

アウローラ
「ここから五キロ先それであの大きさ……最初から全力でいくつもりですか……」

アウローラはフェイトに聞こえない小声でつぶやきながら、残りの通信回線を開くと同時に宣言した

アウローラ
「『全武装局員に連絡、予定より早いですが今より戦闘を開始します……向こうは恐らく常時殺傷設定で攻撃して来ると思うので一瞬でも気を抜かずに』」

◆◆◆

られていた

彼の目の前には、教会暗部の騎士達以外にロデルの雇った札付きの魔導師と騎士がいたが、そのほぼ六割が最初の魔力の斬撃で倒されていた

砂まみれになりながらも残った魔導師、騎士達は叫びながら、イオリに明確な殺意と敵意を向けて迫るが……それ以上にイオリは殺意と敵意で殺さんばかりの鬼気で、彼らを一瞬怯えさせその隙にイオリは容赦なく両手の刃が彼らを慈悲無く切り裂く…中には鬼気に腰を抜かし命乞いをする騎士もいたが容赦なくその喉を切り裂く、どれほど返り血を浴びようがイオリには微塵も気にする事ではなくただ一心不乱に、アルカスターを助けそしてルクスを殺すこの二つしか彼の頭にしかなかった

イオリ

「これで粗方片付いた残りの奴らはアウローラに任せる。いくぞ」

クリサ・リオル

《《了解》》

そしてイオリは地下遺跡内部へ向けて走り出す……数分の入れ違いでフェイト達、先行部隊が入り口正面近くまで迫っていたが足止めを喰らっていた。彼女達の前にはイオリが斬らなかった魔導師と騎士が抵抗していた

だがその攻撃もイオリの鬼気に当てられた為か、動揺し攻撃の照

準は何処か的外れで怯えその隙を歴戦の騎士たるヴィータが高速で近づき一撃で沈めていく

ヴィータ
「はっ！怯えてそん程度で私に勝てるかよ！」

勝ち誇るヴィータを余所に後方にいる後続部隊にティアナが合図を送りながら、フェイトがヴィータの横を足早に通りすぎる

フェイト
「ヴィータ、行こう。ティアナ、後続部隊よろしく」

ヴィータ
「ちょっ、待てよフェイト！ティアナ無理すんなよ！」

ティアナ
「はい！！任せてください」

後続部隊をティアナに任せ、フェイト達は先行部隊を率いて、地下遺跡内部へ進んでいく……当然その途中には教会暗部の騎士達が待ち構えているはずだとフェイトもヴィータも思ったが、その予想に反して地下内部はとても静かだった…その理由も彼女の前に広がっていた

ヴィータ

「……容赦なしの手加減抜きの一撃……」

フェイト
「多分、彼…イオリだと思う……でも」

フェイトは自分の周囲を見るとイオリと騎士達の戦闘の後が、生々しく残っている地下であるから生々しい血の臭い…だが、フェイトの感じた違和感は別にある

フェイト
「ねぇ？ヴィータ？何となくなんだけど、本当にここが二人の拠点なのかな」

ヴィータ
「ん？なんだよ。いきなり」

フェイト
「自分の拠点に戻ると言うより、知らない拠点を進んでるそんな感じがするんだ…もしかするとここは教会暗部の拠点の一つで、イオリは何か目的があって進んでいるんじゃないと思う」

ヴィータ
「あるとしたら……なんだよ」

フェイト
「分からない…でも、ここまで徹底的にやるのだから彼にとって大切な事だと思う……」

ヴィータ
「何にしても、進むしかねぇだろ…仮にここが教会の拠点だとしても、あいつら捕まえれば分かるだろ？」

フェイト
「……うん」

分からないと言いながらもフェイトは脳裏にアルカスターの姿が浮かんでいた。もし自分なら仲間の為にきっと犯罪も厭わないと思えたから……そしてそれだけ自分が皆に依存気味だという事も自覚した

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フェイト達先行部隊が地下内部に入ってから十分後にティアナ率いる後続部隊も、フェイト達とは別の道を進んでいたこちらの道はイオリが通っていない為か教会暗部の騎士達が万全の状態で、待ち構えていた

通路の分かれ道の壁を盾にティアナ達後続部隊は、魔導師達の射撃の雨を防ぎながらわずかな隙を狙い応戦するが状況を打開する事

は出来ない仮に出来ても教会の騎士達が待ち構える

ティアナ
「（数ならこちらが上なのに、向こうは腕の立つ奴が多い！せめて高ランクの魔導師がもう一人いたら……）」

ティアナの願いが届いたのか、敵側の横の壁が突如爆発して通路は粉塵に包まれた突然の事に驚くティアナ達を余所に粉塵の向こう側では、悲鳴が聞こえたり何かに応戦するように、魔導師の砲撃の光が見えた

そして粉塵が晴れはじめた時には、騎士達は意識を失い床に倒れその中で唯一そこに立っていたのはティアナが良く知る人物がいた

シャッハ
「大丈夫ですか？」

ティアナ
「シスターシャッハ！？どうしてここに！！」

ティアナは予想外の人物に動揺してるとシャッハの壊した壁の向こう側からさらに予想外の人物が現れた

カリム
「この一件には教会が関与してますから私達が来ても不思議じ

ゃないですよ？ティアナさん」

ヴェロッサ

「それにこの件は管理局の膿を出すのにも、ちょうどいいしね」

ティアナ

「騎士カリム、それにアコース査察官…」

カリム

「では行きましょう」

カリムの言葉にティアナは強く頷きながら、心強い味方が出来た事にうれしかった

◆◆◆

ルクスとヴォーガは遺跡内部に仕掛けた監視カメラからフェイト達の動きを監視していた

ヴォーガ
「シャッハの事ですか？彼女は戦闘は優秀でしたが、精神面が蛇には向いていなかったのですぐに捨てました」

ルクス
「……それよりもアルカスターの方はどうなった？」

ヴォーガ
「誤って殺さないように気をつけながら拷問しているのでもう少し時間がほしいところです」

ルクス
「ならば、行くか……拷問は他の奴に任せればいい」

ルクスの言葉にヴォーガは薄ら笑みを浮かべながら答えた

ヴォーガ
「はい、わが師よ…」

第十七話　相対？　～交戦～

遺跡内部へ入り、およそ三十分弱が過ぎフェイト達は、順調に遺跡の中を進んで行く途中にいくつかの罠があったがその罠はすでにイオリが引っかかったのかすでに壊された後だった……

フェイト
「なんかワザと引っかかってる気がする……」

ヴィータ
「いいじゃねぇか楽で、ティアナの方はもっと楽じゃねぇの？」

フェイト
「そうだね、アコース査察官はこの手の罠には馴れているだろうし、シスターシャッハもいる」

ヴィータ
「まぁ、騎士カリムも一緒なのは驚いたけど……」

ティアナからの連絡でフェイトもシャッハやヴェロッサがここに来たのは予想外だったが一番はカリムだった昔、四肢を斬られもう戦えない彼女がどうしてここに来たのか疑問に思いながら、しばらく進むとフェイト達は遺跡の中心部と思われる、広い円形状で囲うように複数の出入り口のあるホールに出た

ヴィータ
「どうする？二手に分かれるか…？」

フェイト
「それもいいけど、ここには戦闘の痕がないイオリはこのホールを通ってないだから罠があるかも」

？？？
「心配しなくても、この部屋にはトラップの類はありませんよ。ハラウオン執務官」

フェイト達のいる入り口から反対側から声が聞こえ、前方を警戒すると反対側の入り口の一つからヴォーガ含めて複数の騎士達が出てきた

フェイト
「ヴォーガ・テンガル！！」

ヴォーガ
「ハラウオン執務官それと初めまして騎士ヴィータ」

フェイト
「どうしてここに？」

ヴォーガ
「何を言っているのですか？ここは私達の拠点であり目的地…まさか輝双刃以外にあなた達が来るとは思いませんでした」

フェイト
「拠点…目的はなんです」

ヴォーガ
「あなた達に教える必要も知る必要もありませんよ。何故ならここで消えるのですから」

ヴィータ
「！！、下だ！！！」

ヴィータの叫び声と共に床から、連結刃が床を引っくり返し蛇のような動きで襲い掛かりフェイトとヴィータはかわしたが、他の武装局員の一部はかわす事が出来ずに負傷したと、同時にヴォーガの背後の騎士達が襲い掛かった……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ティアナ
「また地響き……フェイトさん達戦闘を…」

フェイト達とは別の道を進んで行くティアナ達は、急に断続的に聞こえ始めた地響きが気になっていた

シャッハ
「急ぎましょう…ロッサ、道は間違っていないのですね？」

ヴェロッサ
「大丈夫だよ、シャッハ。僕の猟犬達を先行させてルートの確認はちゃんとしてるよ」

ヴェロッサの横には彼の稀少技能『無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）』で生み出した猟犬がいた猟犬を見つめながらカリムが三人に話しかけた

カリム
「……シャッハ、ロッサ、ティアナさんここで分れましょう。私は彼の相手をしますあなた達は先に進んでください」

シャッハ
「！？、カリム！？何を言っているんですか！」

カリムの言葉にシャッハは驚きの声を上げたが、カリムは答えずに視線を後ろに移した

カリム

「出て来たらどうですか？ルクス」

ルクス
「ふっ、さすがに気づくか…」

ティアナ・ヴェロッサ・シャッハ
「「「！？」」」

突如として後ろから聞こえた声に三人が驚くと同時に姿を消していたルクスが姿を見せたその姿は騎士甲冑、そしてその手にはイオリを倒した審判者（トルーク・ビルト）が握られそしてあまりに自然すぎる動きで、審判者（トルーク・ビルト）を振ると同時に彼の魔法が炸裂した

ルクス
「地を這う刃（イーティクリヒム）」

審判者（トルーク・ビルト）が床に突くと同時に床から魔力刃が飛び出し、カリム目掛けて突進した途中その間にいた局員は刃に当たり吹き飛ばされそして、目標のカリムは静かに右手を前に出したと同時に足元に古代ベルカ式を展開したと同時に魔法陣が高速回転し始め

カリム
「砕け魔法刃（クライ・ツウィッネ）」

突如足元のベルカ式はカリムの下を離れ、襲い掛かる魔力刃の方へ

飛んでいき魔力刃とぶつかり魔力刃と共に消えた…それを見たルクスは頬を吊り上げ

ルクス
「ふっ、魔法は問題ないな…では剣の方はどうだ？」

カリム
「ルクス……この状況を招いた原因はかつてあなたを殺し損ねた私の責任です。今一度あなたをこの場で殺します」

ルクス
「殺すか…俺達、教会騎士の中でも最も淀みなく美しい刃を振るう奴の言葉には相応しくないな…だがいいぞ、お前には一度殺された身だ。俺自身の復讐をさせてもらおうか」

シャッハ
「カリム！！」

シャッハの声がカリムに届くとほぼ同じ瞬間、ルクスは爆発的な脚力を見せ審判者（トルーク・ビルト）でを床を削りながら突進し、間合いに入ると同時に風きり音を上げながら振り上げる、ルクスはこの速さにカリムは反応出来ないと思ったこれで終わりだと

カリム
「ルクス、あなたは勘違いしてる。私が何の策も用意もなくここには来ない」

ルクス
「！？」

カリム
「その程度をかわすなんて訳ない。切り裂きなさい無形の牙（リヴァイアサン）」

振り上げる審判者（トルーク・ビルト）の刃を最小限の動きでかわしながら、カリムの袖の中から刀身の無い柄のみの剣が飛びだし柄を握ると同時にカリムは剣をルクスの甲冑を切り裂くように横一閃に振り、その瞬間に甲冑の一部にひびが入りそれを見たルクスは脚力だけで後ろに大きく下がりカリム達から離れた

ルクスはひび割れた甲冑を触りながら、とても歓喜したような笑みを浮かべながら審判者（トルーク・ビルト）を振り上げ

ルクス
「ああ…久しくぶりで忘れていたよカリム、お前の刃とお前の見切りを……行くぞ地の針（シュティク・ボーデン）！！」

カリム
「舞う散水（シュプリンタ・タンズ）」

ルクスは振り下ろすスピードを上げながら地面に叩きつけると同時に床は砕けると、破片は弾丸のような速さで一直線にカリム達を目指して飛ぶカリムは二人の間にいる動けない局員達を守る為に前へ飛び出しながら、襲い掛かる破片へ向け剣を縦に振ると破片は壁にぶつかったように砕け散った…

カリムの後ろで破片が砕け散る瞬間を見ていたティアナにはカリムの持つ剣の能力がよく分からなかった最初は刀身が見えない剣と思ったが今のは明らかに自分の考えとは違った物だと思った

ティアナ
「騎士カリムの剣は一体……それにあの男は？」

ヴェロッサ
「男の名前はルクス・D・アルビオン…カリム、イオリと同じ三剣の一人で元・教会騎士団団長そしてカリムの剣は無形の牙（リヴァイアサン）、イオリの双剣無の双剣（クリサリオル）そしてルクスの黒剣審判者（トルーク・ビルト）と同じ、聖王教会秘蔵の剣だよ」

ティアナ
「え！…じゃあ、クーデターを起した本人！？……あれ？騎士カリムは戦えないはずじゃあ」

シャッハ
「そうです…この戦いの為にもう一つ教会の地下倉庫から持ってきた物があります。装着型の古代遺産（ロストロギア）・傀儡（マリオネット）の衣装備者の肉体を強制的に過剰強化と行使させ肉体を壊す古代遺産（ロストロギア）……」

ティアナ
「そんな危険な物を……どうして」

ヴェロッサ
「カリムなりの責任の取り方なんだ。十三年前にルクスを殺す事が出来ていれば、この状況は無かったんだ…だから例え体を壊す

事になってもだから……彼はカリムに任して、僕達は先に行こう」

ヴェロッサの言葉にティアナは反対しようとしたが、自分がいても手助けできる事がないとティアナ自身良く分かっていたそしてティアナ達はルクスをカリムに任せて先に進む事を選んだ

◆◆◆

イオリ
「近いな……」

イオリはすぐさまに三百m先を目指して走り出しそれから、三十秒程で木製の扉を見つけ勢いそのままに扉を蹴り飛ばしたと同時に血生臭い臭いが鼻を突いたその部屋の石壁に打ち付けられた鎖に、手錠で繋がれた傷だらけのアルカスターがぐったりとした様子でうな垂れていた

イオリ
「アル…生きてるか？」

アルカスター
「……何とかね…全身が痛い」

イオリ
「意識の方は、まだ大丈夫みたいだな」

アルカスター
「とりあえずね…でも、そんなに時間が無いのは分かる…イオリこの下の層に」

イオリ
「真理（エメト）の扉だろ？分かってる行けるか？」

アルカスター
「歩くのは無理だけど、とりあえず眼の方は大丈夫。あいつら

に渡す前に開く」

イオリ

「ああ、間違っても途中で自分を失うなよ」

イオリはアルカスターに繋がれた鎖と手錠を砕き、彼女の手を掴み引っ張り上げるとそのまま担ぎ上げた

アルカスター

「ちょっ！イオリせめておんぶにしてよ！恥かしい…」

イオリ

「何、恥かしがっているんだよ。誰が見るかよ、お前の尻なんか…背中叩くな」

アルカスター

「うるさい！おんぶにしなさい！！副将命令！！」

アルカスターはイオリの背を拳で叩くが鍛えている為か、さして痛がる様子は無くイオリはアルカスターを無視してそのまま担ぎ続け部屋を調べるとアルカスターの相棒のアレイヤを見つけると手渡して、結局アルカスターを担ぎ上げたまま最下層の大空洞を目指し部屋を出た

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3450t/

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ StoryAfter

2011年10月9日03時26分発行